れを善くして、之れを寶藏院流といふ、其他弓術馬術各〻其の法を傳へ、武を練ることは、おさ〳〵怠らなかつたのである。

一般の風習、此の如きを以て、婦人までも亦此の氣風を受けて、平安の昔よりありし後妻打（うはなりうち）は此の時代に於て盛んにして、妻を離別して後妻を娶りたる時は、先妻は其の親戚より膂力ある女を借り、其の身分に應じて二十人なり五十人なりを集め、手に手に棒、木刀の類を持ちて豫めこれを新妻に通知し、其の日に押し寄せて器具を破り、障壁を傷け、亂暴狼籍を働くにて、其の頃の女に後妻打に二三度頼まれて出でぬはなかつたといふ、これらも此の時代の人情として見るべきである。

さて何事もかゝる風習であるから、産業は一般に不振であつたが、大名の城下は比較的安全であり、其の大名も亦之れに稅を付して其の利便を計つたが爲め商業は各城下城下に行はれしが、それよりも比較的に盛んであつたのは、外國貿易で、足利義滿、明より勘合符を得て、之れを周防の大內氏に掌らしめしより、大內氏は盛んに支那朝鮮と貿易し、從つて支那の通貨は我が

國に入り來り、久しく國內鑄造のこと絕えたる我が國にては專ら支那の通貨を用ひたのである。此の外國貿易と共に忘るべからざるは、此の時代にあつて頻りに支那朝鮮の近海を剽掠した倭寇のことである。國內亂れて英雄雲の如く起るの時、志を國內に得ざるもの、又は海上の事に慣れたる有爲の士は船を艤して海外に雄飛し、自由に貿易を營み、時に掠奪をも試みたのである。かく我が國民が眼を海外に注ぐ時に當つて、葡萄牙人の我が國に來るあつて九州の大友宗麟は先づ之れと約して貿易を初め、爾來西洋の文明は我が國に輸入せらるゝに至り、其後、呂宋、阿媽港とも互に往來することゝなりて、海外貿易は大に發達し、肥前平戶、和泉の堺の如きは頗る旺盛を極むることとなつた。此の西洋貿易の隆盛、殊に銃砲の輸入は我國情に一大變化を與ふべき時となつた。火藥の發明が西洋中古の群雄割據を打破する一原因であつたが如く、銃砲の輸入は我が群雄割據を打破する一原因であつた。初め葡萄牙人の九州種ヶ島に來つて鳥銃及び其の法を種子島時堯に傳ふるや、根來寺の僧杉房、紀州の人津田監物、筑前の人泊一火の如き皆な種子島に至りて其

の術を學び、次で大友宗麟、葡萄牙人より大砲を傳へ、此の術諸國に傳播して弓矢を以て唯一の武器としたる從來の戰術に代り、築城の法も亦傳へられて、小を以ては大に敵するを得ず、豐臣秀吉は實に此の機運に乘じて國內統一を計つたのである。

豐臣秀吉、微賤より起りて天下を統一し、萬民漸く其の業に安んずるを得た。秀吉、更に威を朝鮮に振はんとして、事半ばにして止み、秀吉薨じて、其の子秀賴尙ほ幼冲にして、國內再び亂れんとして、終に政權は德川氏に歸して、こゝに三百年の太平を馴致し、世態人情は又一轉變した。秋は過ぎて冬となれり、德川三百年は眞に冬籠の時代である。

第四節　江戶時代の世態人情

さしも式微の極に達したる皇室は、織田、豐臣の二氏によつて興復せられ、京都の繁榮も稍々舊態に復し、公卿百僚の諸方に流浪したるものも漸く召還され、豐臣秀吉の略ぼ海內を一統するや五奉行を置きて政務を管理せしめ、

徳川氏の統治

冬籠の時代

其の上に五大老を置きて大事を議せしめ、諸國には大名を封じて國郡を管理せしめ、檢田使を發して五畿七道を臨檢せしめて其の所領を明にし、且つ大判、小判並に丁錢等を鑄て商業に便せしめて太平の象漸く現れんとす。徳川家康、天下の權を握るや、自ら征夷大將軍を以て幕府を江戸に開き、子孫其の職を世襲し、巧みに配置の法を考へて諸侯を各地に封じ、關東を以て自家の根據地とし、京阪樞要の地は之れを直轄とし、便宜の地には譜代親藩を配し、邊陬の地には外樣大名を置き、且つ參勤交替の制を設けて悖逆の憂を少うしたる等其の政策行き屆きしを以て、終に三百年太平の基を開き、千代田の御豪、風、枝を鳴らさず、四民をして御家萬歳を謳歌せしめた。これより先き足利氏の末に當りて歐羅巴諸國との交通開け、切支丹即ち基督教も亦從て我が國に入り漸次國内に流布したが、豐臣秀吉其の害を認めて之れを防ぎ、徳川氏に至つて之れを嚴禁し、其極終に外國との交通を絶ち僅に肥前長崎の一港を開きて、和蘭陀のみの入航を許し、國を鎖して事を外國に構ふることを避けた。これ實に日本文明の冬籠りの時代と目すべきである、此冬籠りの

時代に國内の秩序は整ひ、曾ては僧侶釋門のみの事とすべきものと思はれた學問も大に興隆し、産業も亦頗る發達した。蓋し文教の興隆は、亂に飽きてゐる人心の歸嚮によるとはいへ、又徳川氏偃武の政策にして家康、藤原惺窩並林羅山の徒を擧げて儒を講ぜしめしより諸藩も亦擧つて文教に志し、名儒碩學相繼いで出で、文運の盛なる殆んど前古無比の狀を呈し、太平漸く成りて民は其の業に安んじて産業大に振ひ、且つ參勤交替の制は交通を利便にして江戸は文化の中心となり、室町の末季に太田道灌が「我が庵は松原つゝき海近く、富士の高嶺を簷端にぞ見る」と云ひたりし武藏野の一區たる江戸は、全國諸侯が其の所得を集め來つて消散する所となり、早くも八百八街人口五十萬の大都會となつたのである。都府の膨脹此の如く、太平の持續此の如きを以て文弱の弊漸次に萌し、奢侈の俗次第に行はれ、五代將軍綱吉の時代に於ては、所謂元祿風の華美を生じて、四民の生活狀態非常に變化し、娯樂の用に供すべき設備も大に發達するに至つた。

平安朝時代には華美を競ひたる京都の公家は室町時代の衰微は恢復したれ

公家と大名

系圖造り

ど、此の時に當りては社會の域外に郤けられたるが如く、位階こそ貴けれ、其の所得は實に僅少にして畏れ多くも禁裏の御料は僅に三萬石、諸公家の總高七萬石に過ぎず、將軍は自ら八百萬石を以て居り、尾張の六十萬石、紀伊の五十五萬石、水戸の三十五萬石は御三家として之れを輔佐し、諸國の大名も亦加賀の前田(百萬石)、薩摩の島津七十七萬石、奥州の伊達六十二萬石、肥後の細川の五十四萬石、筑前の黒田五十二萬石、安藝の淺野四十二萬石、長門の毛利三十六萬石、肥前の鍋島三十五萬石、因幡の池田三十二萬石、備前の池田三十一萬石、近江の井伊三十五萬石、伊勢の藤堂三十二萬石、阿波の德島二十五萬石、土佐の山内二十四萬石等大藩を以て各地に雄視し、其の臣といへども、禁裏の御料と相如くもの少からず、公家の祿は武家に及ばざること、頗る遠かつたのである。即ち系圖正しき公家よりも、戰國時代の風雲に際會したものゝ時めく代となつたのであるが、血統を尊び系圖を重んずるは、なべての人心、殊に何事も世襲となりたる太平の代に血統の正しきを誇るの情は系圖作りとて人の望みに應じて之れを僞造するものあり、彼の系圖

の一條にて田沼山城守が佐野善左衞門の爲めに傷けられし如きも、此の時代の人情を窺ふの一端とすることが出來る。

町人百姓は系圖卑しきものと認められ、其の正しと認めらるゝもの又は特別の功勞ありたるものには苗字帶刀を許されたれど、他は名のみにして姓を稱ふることを禁ぜられ、且つ縱に刀を帶ぶることを許されず、武士は跋扈して町人百姓は其の膝下に拜跪せざるを得ざる狀態であつた。百姓の方は各〻其の領主の下にあつて、耕作を事とするのであるから、別段の變化はないが此の時代に於て產業の勃興と共に勢力を得て來たものは町人である。町人即ち商賈の尤も繁盛したるは、全國の中心たる江戸にありしはいふまでもなく之れに次ぐ大阪も亦甚だ殷賑にして物貨の集散此の地に多く、西國大名の交通皆な此の地によりしを以て、江戸並に大阪の町人は頗る豪富を致せしも、社會の階級は町人の跋扈を許さゝりしを以て、彼等は金錢を以て、意の趣く所を行はんとし、其の生活頗る豪奢なものもあつて、幕府は屢〻之れを戒めたれども、其の甚しきものは其の財を沒收し其の人を追放したほどである。併し豪奢の

華美の俗

俗は町人ばかりでなく文弱の弊崩して武家も亦豪奢を衒ふこととなつて、生活の狀態は一般に奢侈となつた。諸國大名の城廓は云ふまでもなく、其參勤交替の爲めに來る江戸の住宅も亦華美を極め、殊に江戸には火事多きを以て本宅以外に下邸と稱するものを多きは四五ヶ所、少きも一二ヶ所は之れを有して數奇を凝らし、町家も其の財に任して、目立たぬ所に金錢を費し衣服も亦幕府の禁令に觸るゝを恐れて、表を木綿にし、裏を錦繡にするなぞ町家の風流となり、僅に長崎の一港より輸入し來る和蘭陀の貨物は大名豪家に賭はれ、食物も亦和蘭陀風支那風の知らず識らず加味せられたる南蠻物を生じ、戰國時代には主として玄米を用ひしもの此の時代に入りて精米となり、食事の數も二度なりしもの三度となり、料理法はいよ〳〵發達し、飲食店、料理店も亦此の頃より行はれ、實用以外に趣味又は娯樂の食物漸次多くなつた。即ち江戸時代の風俗を見るべき「守貞漫稿」の記する所によつて食物に關する職業を擧ぐると、

飲食並に娯樂の職業

蕎麥屋、　粟餅屋、　鰻屋、　鮨屋、

山鯨、　紅梅燒屋、
豆腐賣、　蜆賣、
飴細工、　飴賣、
批杷葉湯賣、　心太（ところてん）賣、
湯出雞卵賣、　納豆賣、
上燗おでん、　茶飯賣、

等で、其他娯樂に關するものは、

花賣、　蟲賣、
からくり、　淨瑠璃、
女太夫、　鳥追、

等あり、而して其の冠たるものは演劇である、演劇は田樂、猿樂、能樂と發達し來りしもの〻一變化ともと共に、これは民間に行はれて、初め出雲の巫女お國の初めしより諸方に傳播し、遊女なぞ紛黛を凝らしめ舞踏せしが、寛永の末幕府令して之れを禁せ

油揚賣、　白魚むきみ賣、
赤蛙賣、　漬物賣、　新粉細工、
菓子賣、　蕃椒粉賣、　甘酒賣、
松茸賣、　緋昆布巻賣、　蒸芋賣、
白玉賣、　鹽辛賣、　汁粉賣、

錦魚賣、　物眞似、　太神樂、
ちよぼくれ、　講談、　首掛芝居、
猿曳、　砂書、　一人相撲、

しより若衆歌舞伎なるもの行はれ、美少年の粧飾を盡くして舞ふさまの、之れ亦風俗に害ありとて禁せしより終に今日の演劇の源となつたので、此の事は後に語るべき機會があるから略するが、兎に角四民娯樂の用に供すべき演劇は此の時代に於て隆盛に赴き來つたので、其の所演の狂言も初めは金平物荒事など專ら好評を得たが、世の文弱に流るゝに從つて好色劇の流行するに至つた。更に當時の淫靡の俗を見るべきものは三都を通じて遊廓の全盛である。殊に諸國勤番の士の集る江戸の吉原は尤も盛んにして、寛保三年の調べによれば遊廓關係者一萬二千百八十四人、內男六千百八百二十二人、女千八百五十八人、遊女三千五百五人とあり、藝妓も亦此時代より發生して社會の一勢力となり、小說戲曲の類は之れを主人公として脚色し、奢侈と淫靡とは世の太平に赴くに從ひ、免るべからざる副現象として發達したのである。

遊廓全盛

階級と世襲

上下の階級明かに士農工商の分立ち、四民以上のものには公家ありて、活社會を超越するの觀あり、其の公家も亦業を世襲にして、攝家關白の世襲なるのみならず筆道は清水谷、持明院、挿花は園、蹴鞠は難波、飛鳥井、和歌は冷泉、烏丸等各々之れを繼ぎ、大名武士の世襲たるはいふまでもなく、家督相違なく相續仰付らるゝを以て目的とし、賢も愚も其の家柄を以て貴賤の差生じ、農家も亦其の業を世襲し自由なる商工も亦子孫に其の職を傳ふるを以て能とし、一般に家柄を貴び、四民以下なる穢多非人は全く四民との交際を杜絶せられて賤業を以て世に傳ふるといふ狀態にて、此の階級世襲の世態と、太平に馴れたる人情とは、一般に保守的となりて進取の氣象に乏しく、其の德敎の中心となるべきものは、「身のほどを知れ」の五字七字の敎訓であつた。德川家康の遺訓と稱せらるゝ「上を見よ」

して持續し來られたのであつが、昌平三百年、實に此の如くに獨り日本をして東洋の一孤島に孤立するを許さなくなつて、英露の船しばゝ邊境に來り、殊に米艦は浦賀に來りて通商を促す。此の時に當りて幕府儉安を事として諸國の雄藩崛起し來り、かてゝ加へて文敎の興隆は大義名分を明にして、獨り幕府の專制を許さず勤王の聲起りて紛擾又紛擾、世態幾たびか變じて終に明治の維新を現出し、內は七百年來の統治關係は復古して、幕

府政權を奉還し、天皇親ら政を執りたまふに至り、外は三百年來の鎖國制度を打破して世界各國の文明は滔々として我が國に入るに至つた。

我が日本は冬過ぎて一陽來復の春となつたので、明治元年は實に西曆一千八百六十八年にして、歐米に於ては太平洋鐵道成り、スエズ運河竣功したるの前年である。これより日本は日本の日本にあらず、世界の日本たらざるを得ないので、其の世態人情も亦新ならざるを得ない。即ち統治機能に於ては、開闢以來の萬世一系の皇室を戴くことは變りはない。公家又は武家專制の時代は過ぎて萬機公論に決する立憲政體となり、帝國憲法發布せられて、士農工商共に參政の權を得ることとなり、これより先き封建制度を打破せられて、政權は一に歸し、兵馬の大權も亦天皇の親しくしたまふ所となり、從來武士のみの事とすべきものであつた兵役の義務は百姓町人を問はず國民の等しく免るべからざることとなり、四民の階級は破れ、人權は尊重せられ、自由は認められるゝこととなり、家柄と階級とは以て人に誇るに足らず、經濟機能に於ては主として國內のみの商業は一轉して世界的となり、早駕籠早馬の交通は汽

車電車となり、教育も亦武士として若くは商人としてではなく世界文明の一員たる日本國民として恥しからぬやうにせなければならぬことゝなり、宗教も從來の神儒佛以外に、一たび日本の國性に適せずとして排斥せられた基督教も新進の勢ひを以て我が國に入り來り、殊に日清日露の兩役を經て、日本の眞價漸く世界に認められ、强國の班に列するに至つて萬事が世界的となり、實力主義となり、世態も人情も昔とは非常の差となつた、曾ては「武士は食はねど高楊枝」と威張つて居つた武士も今は祿に離れて衣食に汲々たらざるを得ず、古は斬捨御免と畏されし町人も金さへあれば、公卿大名等と同席の出來る世の中となり、金錢萬能、黃金崇拜の風を馴致した。併し尙ほ過去の思想の深く根底に入つて牢として拔くべからざるものがある。予曾て「現代の縮寫として見たる旅館」の一文を造つて、現代を觀察したことがある。

　　日本の世態人情

　　一六九

會が如何なる人に尊敬を拂ふかゝ洞察せらるゝ。旅館に於て貴ばるゝ人は、持ち物の立派な人、服裝の堂々たる人、これが先づ入口で御辭儀を餘計にせらるゝ連中である。內に入つては肩書のある人、金を多く使ふ人、此の二つが尊敬の中心となるのである。有名なる東京の文士が、肩書のない爲めに郡長の宿泊の爲めに座敷を追ひ出されたり、金を使はぬ爲に大學者が陋室に入れられたりするのは其の例に乏しくないのである。華を去り實に就くことなく、實を去り華に就く當世の人心はこゝに何の庚すことなく現はれて居るのである、此の肩書崇拜は舊時代の遺習で、金錢崇拜は新時代の產物である、新舊思想の過渡時代、此の兩方面に跨つて居るのが殊に面白く觀察せらるゝ。更に東西兩洋の折衷を見るのは、旅館の建築が一番明かである。表は西洋造りで內に西洋室のもある、西洋風のスリッパを穿るのもあれば外に日本造りで內は日本建て一室毎に床の間もあれば掛物もあいて日本室を往來したり、テーブルの上に膳を置いて飯を食ふなぞといふ不調和は珍らしくない。それが今日の日本の現況ではないか、其の食物を

見ると、刺身や椀盛の日本流なるにフライやオムレツを付け、箸でも食へるのに、わざ〳〵フオークやナイフをつけるなぞといふ奇態な折衷、不調和な混淆これが日本の社會全體を亘つて居るので、旅館は其の縮寫たるに過ぎない。さて又其の客なるものを見ると、東洋流の階級主義で下女下男に威張り通すかと思へば、西洋流の個人主義で隣室の客の迷惑はかまはず、勝手氣儘に權力を振ふ、當世紳士に多く此の類を見る之れも現代社會の縮寫か、其の旅館の萬事金錢本位で、親切氣のなくなり、誠實の心薄くなつたのも、其の客の旅の恥はかき捨て主義で、社會制裁のないのを力に亂暴なことをやるのも、これも亦當世流、現代流と申すものであらう。汽車の通ずる所此の風盛かんに、山村僻地に尙ほ昔の質朴な面影を殘すのも、現代文明の風が社會を拜金化し、虛榮化し、皮相化し、胡魔化し化するのを現はして居る。一以て萬を推すべく、小以て大を計るべし。旅館も之れを精到に觀察せば今尙ほ多くの社會狀態を知ることが出來るであらう、建築の表面ばかり立派なことや、掛物や額の置せ物の多いことや、食物の見か

け倒しのことも皆な大いに當世風現代的を現はして居る。

これ僅に其の一班に過ぎないか、一斑以て全豹を推すことが出來ると思ふ、本書は實に此の現代日本の社會を中心として世態人情を觀察せんとするので、從來見來つた所は、現代を觀察するの一助たらしめんが爲めに、過去に溯つて其の社會的遺傳を見たに過ぎない。

第五章　地理と人情

第壹節　國民性と地方感情

人は皆な人として共通の性格を有す、極北風寒き地に獸皮を蒙りて馴鹿を追ふエスキモーの土人も、樹上に屋舍を結び裸體赤脚、常に毒蛇と戰ふ亞弗利加の蕃族も、自動車を驅りて交際場裡に奔走し自ら文明を以て誇る歐米の紳士も、肥馬輕裘、自ら大とする中華の官人も、人たるに於ては則ち一、人には人の共通の性もあり情もあるのであるが、遺傳と境遇とは其の性格を異ならしめ情緒を同じからしめずして、人の心の異なる猶ほ其の面の如く人

々に其の性情を同じくしない、併し異中に同を求め、同中に異を立てゝ吾等は人種には人種共通の性情あつて、他と異り、國民には國民の性情あつて容易に他と分ち得べきを認めざるを得ない。同一植物學上の疑問に遭遇するも、英吉利人は直に植物園に走りて之れを實驗せんとし、佛蘭西人は圖書館に走りて群書の中に其の所說を見んとし、獨逸人は獨り止りて沈思默考するといふたのは、一場の譬喩であるが、又此の三國の人情の異なれるを認むることが出來、關東人の喧嘩は先づ罵り、罵り止むで漸く手を下すといふ如きも亦確かに此の兩地方の性情に同じからざるものあるを見ることが出來る。同じ文明でも西洋と東洋とは違ふ、西洋の文明は希臘の哲學的思想に、猶太の宗教的思想を混じ、之れに羅馬の法律的思想の加はつて出來上つたのであるが、東洋の文明は支那の道德に、印度の宗教といふ二大要素の醞釀したものであると見られる、それに歐羅巴の地は山嶽多くして地方分割せられ、其の歷史に於ても、統一せらるゝこと少くして分離して居つたことが多いから自由獨立の精神が盛んで、東洋

民族と宗教

殊に支那の地は大なる山嶽なく、常に分離せんとして統一せらるゝ歴史を持て居るから服從の思想が盛んである。同じ歐羅巴人でもラテン民族とスラブ民族とチユートン民族とは其の好尚も異れば氣象も同じくない、これを宗教に見るも、ラテン民族は守舊的なる天主教を信ずるもの多く、スラブ民族は主として希臘正教に赴むき、チユートン民族は自由なる新教徒に走る、ラテン民族は華麗を愛し、チユートン民族は質實を好み、スラブ民族は勇悍を喜ぶ、同じ支那人なりと雖も、老莊を出したる南方人と、孔孟を出したる北方人とは其の性情を異にする。國民性は其の民族固有性の遺傳に基くも、其の亦固有性が周圍の事情即ち地理的狀態や、歴史的事情によつて變化することを免れないのは、同じアールヤ人種も歐羅巴に入りては彼れが如くに活躍し、印度波斯に入りては思想上の貢獻以外何等の見るべきものなきも其の一例であり、同じラテン民族でも伊太利の歴史は現代伊太利人の氣象を生み、佛蘭西の歴史は現代佛蘭西人の氣象を生む。英吉利は海洋に國するが故に貿易の業に富み、露西亞は大陸にあるが故に農を以て知らる、瑞西は山國なるが故

地と人の關係

日本の風景と歴史

に歐洲列強の中に立つて能く獨立を保ち、バルカンは半島なるが故に列強紛擾の巷たり、地は人に影響し、人は事に影響す。人事百般多くは歴史と地理との相互關係によつて生ぜざるはない、我が日本は東洋の一孤島、久しく世界の風潮を絶ちて特有の國民性を養成し、一千五百年の昔、近く支那印度の文明を朝鮮半島より受けて、其の根幹に培ひ、三百年前一たび西洋の文明を受けしも時利あらずとして之れを拒絶し、此に益〻日本特有の性情を養ひ、近く五十年前、復び西洋の文明を受けて之れを咀嚼し、東西兩洋の精華を收めんとして居るのが現代の日本である、現代の日本は茫々五千載、東西の歴史が齎らせる文明を一堂に會せしめて居るのである。併し日本人は唯だ之れを勸工場の如くに並べて居るのでない、自主的選擇力を以て之れを選擇し、固有の同化力を以て之れを我が物として其の國民性の內容を豐富にせんとしつゝあるのである。即ち日本國民は四面繞らすに海を以てする一孤島なるが故に永く外國との交涉を絶ちて自主自尊の精神を有し、風光明媚の山水に對して愛鄉の念を切にし、萬世一系の皇室を戴き、二千有餘年の久しき、未だ

世態人情の觀察

一度も他に征服せられざる歴史的自負心を有すると共に、儒教によつて倫常の道を明にし、佛教によつて慈仁の教を容れ來たので、尊皇と愛國とを一ならしめ、忠と孝とを他義ならざらしむる國民性となり、しかも四面海なるが故に固陋に流れず來るべきものを容れて其の長を採り、希臘の哲學思想も、羅馬の法律思想も、猶太の宗教思想も、共に敷島の大和錦に織りなさんとして居るのである。

こは日本を概觀したので、更に仔細に地方地方の感情を見ると、亦同中に異あるを免れない。これも亦其の地方地方の歴史と地理とによるので、大河の流域には自ら平原を生じ平原には平原の氣風を生じて寛宏濶達、しかも輕浮に流れ易く、其の河口には自ら都會を生じて村落と異なる氣風となり、其の源に遡れば山嶽四周、人は頑固なれども輕浮ならず、平原國のしば〳〵兼併の厄に遭ふに反して、之れは久しく獨立を保ちて古き歴史を有する、一つの河、一つの山も人生とは沒交渉なるのではない。況んや、其の史的狀態を考察して一たび繁華の中心たりし所と、未だ一たびも中心たるを得ざりし所と、大藩の下に統轄せられし所と、小藩の分轄したる所とを比較するならば、其の地方感情の甚しく異るを發見せざるを得ない。更に其の宗教狀態に考へて、未來淨土の教の行はるゝ所と、現世祈禱の盛なる所とを較し、平安朝時代に開かれたる天台眞言の盛なる地と、鎌倉室町時代に勢ひを得し禪宗の勢ある地とを比して見ると、其の間に自ら人情の異るを認めざるを得ない、曾て旅行家の爲めに地方觀察に關する注意を述べて左の如く云ふたとがある。

地方觀察

昔、横井小楠が勤王の大義を齎らして諸國を旅行する時に、

一、士の容體質朴なるは士風盛なる所、

二、町家の繁榮なるは其の國の富みたる所、

三、農政の行屆き民心を得たるは仁政の行はるゝ所、

との標準を以つて觀察せしに、長州の奇傑村田清風更に一條の加ふべきものあり。

市中に玩弄物多く賣り居るは奢侈の國なり、

世態人情の觀察

と云ふたといふことである。

これ等も亦實に一種の鑑識法で、禪宗の雲水などは寺々の風儀を鑑識するのにも、僅に庭掃除の工合位で其の和尚の風格が明かになると云ふ程であるから、町並や、家の工合で地方狀態を視察するのは決して困難であまい。

一概には云へぬが町村役場の學校より立派な所は敎育は振はないが、町村役場は醜くとも學校の整備してをる處は敎育が盛んだと見ることも出來ると思ふ。

地理的關係

地を離れて人なしで、地理が人事に關係することは茲に今更事新らしく云ふまでもないが、平原國の人と山國の人とは自ら其の氣風が異つて、山國の人は獨立の氣象に富んでをるが偏狹に流れ易く、平原國の人は寬宏だが薄弱に陷る弊がある。

試みに甲信の山國の人と、尾參の平原の人とを比較すれば直ちに合點が

行く、雪國の人は忍耐に富むが、火山國の人は氣が早い、これも北國の人と關東の人とを比べて考へれば解り易いことだ。

古い書物だが北條時賴の書いたと傳へられてをる「人國記」などは地方演說に出掛けるもの丶一讀すべきものだと思ふ。勿論、これは何等科學的基礎あるものでなく且つ時も異り、歷史上や宗敎上いろ〳〵の關係があるから此の「人國記」の云ふことが確かと云ふのでないが一讀だけの價値はあると思ふ。

職業的關係

これも地と離れたことではないが、產業の上から見ると、農業の盛なる地方は一概に人の思想が保守的で識見固陋を免れないが、一般に愛鄉の精神が盛んである、同じことでも養蠶の盛んな處になると投機的の精神が加はつて純粹米麥を業とする地方とは、其の趣を異にしてをる、併し此の氣風の一層盛なのは商業地で、思想は進步的で、其の智力も發達してをるが、農村に見るやうな素朴な風はなくて輕薄の態度を免れず、愛鄉の念も亦比

較的に薄い、漁業地となると一體に氣性が荒く、且つ冒險的で節儉の風はない、工業地は大體に於て商業と異らないが、常に一事に專らであるから眼界固陋を免れず、人心も漸次機械的傾向がある、こんなことは誰も云ふことであつて新しくないが、此の觀察眼を養つて行くのが必要だと云ふのだ。

歷史的關係

歷史と云ふても遠いものもあり、近いものもある、遠い所で其の土地に出た偉人崇拜の思想が今以つて殘留して、若し一言でも其の偉人を傷くるやうなことがあつては反動を買ふ場合もある。

或る辯士が甲州で武田信玄の惡口を云ふて怒られたり、或る辯士が河內で楠公のことを譽めて大喝采を博したなどは著名な例である。

近い處では舊幕時代に於ける藩々の關係で同じ大名でも譜代と外樣とは其の風が全然違ふ、譜代代名の處で德川氏の惡口を云ふては失敗するが、外樣の中では譽めては却つて怒られる所もある、何しろ三百年來薫化して

來た領主と領民との關係であるから、今尙ほ其の遺風が存してをる、之れを看取してゐないと失態を來すことを免れぬ。

文化の關係

文化の程度によりて使用すべき言語にも影響するので、文化の進んだ處で昔流の言語を使へば陳腐固陋として初めから聽いて呉れず、文化の進まない所で、新しき言語を使へば頭から生意氣だと罵倒せられる。

僕の一番困つたのは備後の或る山奥の寺院で翁媼相手に演說をした時に國家と云ふことが解らぬ、それで國と云ふたが、それでは備後の國のことだと思ふ、考へ考へて日本といふて解つた時のことで、地方々々の文化の度を察して使ふべき言語にも亦注意せねばならぬのである。

宗教的關係

それから宗教も亦其の氣風に密接の關係を持て居るので一概にいふとキリスト教の勢力を得て居る所は進步的で、神儒佛三道の勢ひある地方は保守的だと云ひ得るが、其のキリスト教の中にもいろ〳〵あり、佛教の中に

もいろ〳〵あつて保守とか進歩とか云ふより寧ろ東洋的、西洋的と云ふ方が適當かも知れぬ。

其の佛教の方で云ふても天台眞言の行はるゝ地方は上品なれども儀式に流れ、禪の行はるゝ地方は平民的にして未來を思ふ心深き等の傾きあり、日蓮宗の行はるゝ地方も亦平民的にして活氣あり、現世教育の行はるゝ關東の氣風、未來教の行はるゝ關西の氣風、とりく〳〵に長所もあり、短所もある、之れ等も亦一應見て置く必要がある。

娯樂の關係

人一日も娯樂なかるべからずで、此の娯樂の風でその地方の人情は尤も明かである、浪花節が流行るか、芝居が流行るか、謠曲が流行るかは直ちに其の品位を知るべく、其の中でも亦それ〳〵藝題の好尚によつて忠臣義士が行はれるか、俠客ものが流行るか、淫猥なのが喜ばれるか、怪奇なのが愛せらるかは其の氣風を看取するに尤も便である。

盆踊りの歌一つでも其の人情は解るし、流行歌の一節でも其の氣風は流露してをる。其の他茶の湯の流行る國は玉突の流行る國と趣が異り、生花の行はるゝ所と骨牌の弄ばるゝ所とは品位が異ふ。

苟くも其の地方に至り地方人士を相手に一席の演說でもしやうとするには是非之等の諸點に注目せねばならぬ。

其の他正確なる統計によりて就學兒童の多少も、入檻者の多少も、貯金の多寡も見ねばならぬことは數多の、政黨政派の色分けも一應は知らねばならず、有志家と目せられ、先輩と云はるゝ人の品位、代議士の人物、算し來れば限りはないが、兎に角、以上は尤も必要なものである。

こは唯だ要點のみを擧げたのであるが、這般の諸事情は其の地方の世態人情を視察する上に於て忘れてはならぬことである、廣く云へば國民には國民共通の性情あり、狹く云へば一村、一部落にさま〴〵の地方感情の存するものである。

第二節　關東と關西

汽車、東海道を下りて、箱根を越え、沼津、靜岡を經て濱名湖を過ぎ、豐橋に出で名古屋に進むに從ひ、沿道停車場で賣る新聞の漸次に東京發行のもの丶減じて大阪發行のもの丶加はるを見るであらう、東京は關東を代表し、大阪は關西を代表す、關東と關西とは頗る人情を異にす、關西は古來尤も帝都に近き地で一千年の久しき京都の帝都たりしは云ふまでもなく、其の以前に遡りても、奈良の都や、近江の朝、さては難波の舊都に至るまで皆な關西と云へる廣き範圍に屬するのであるが、關東は由來覇者の據て起つ所で、源賴朝は先づ地を鎌倉にトし、北條九代は此の地にあつて天下に號令し、德川三百年は江戸に府を開いて太平を致したので、其の歷史も違へば地理も違ふ、關東は利根川流域による平原の地、關西は淀川の流域によると雖も、山嶽起伏して小區劃を爲し、關東は主として火山岩の上に立つも、關西は多く花崗石岩の上に立つが故に關東には地震多けれども、關西には比較的に少し、地

震の多き關東には現世祈禱を主とする眞言、天台、禪、日蓮の宗旨時を得、少なき關西には未來を主とする淨土門盛んなり、現世教の盛んなる關東人に宵越しの錢を持たぬ無分別漢多ければ未來教の盛んなる關西人に吝嗇奴の少くないのも必ずしも偶然の事實とは見られない、卽ち東京、埼玉、千葉、茨城、群馬、栃木の各縣に於ては尤も多き宗旨は、現世祈禱を事とする眞言宗、箱根以西に在るが尙ほ關東の範圍と見るべき靜岡縣は禪(曹洞)尤も多く、山梨縣は日蓮、多數を占むるに反し、西、愛知に入れば現世教に屬すべき禪と、未來教に屬すべき眞宗とは伯仲の間にあり、三重、大阪、奈良、兵庫並に關西の範圍たる和歌山に眞宗尤も多く、京都も亦同じ未來教たる淨土宗多數を占めて居る。一事が萬事で、關東は一時的で持續の氣に乏しく、關西は永久的で持續の氣に富む、二宮尊德翁と併稱せらるゝ大原幽學、曾て關東と上方との人情を較して、

關東は人が右と云へば忽に心に左りと浮かび、左と云へば右を思ふ癖があり。疑心はすくないけれども背くことが多い。上方は人が右と云へば、先づ

関東と上方

一旦は右と思ひ、左と云へば先づ左と思ひ背くことは少いけれども疑は深い。關東は其場の奢をするが、上方は後の奢をする。上方のものは己にまさつて衣服の美麗のものがあれば、面前で賞美するが内心では猜み、陰で惡口する。しかし一旦決定たことは歳月の立つに連れて益〻之を厚くする勇氣がある。關東のものは己に勝さる美麗のものには下寄る氣味があつて猜むことは少い、議定誓約などは一旦は命をも惜まない勢を示すが、歳月を經るに從つて忘れてしまふ。

大阪商人の努力

と云ふたのは、能く兩者の人情を道破して居る、關東は一時的にして忍耐の性に乏しく、關西は之れに反して耐久性を以て居る。それであるから武人としては關東人は面白いが、商人としては關西人の方が成功する。試に關東に於て東京を除いて那れの所にか西の名古屋に當るべき商業地あり、何れの國人か近江商人と併稱せらるゝ價値あるものある。其の東京商人も三百年の久しき諸國大名の參勤を待ちて商へる風を傳へ、今も一國の首都として地方人士の入り込むを顧客として、彼の大阪商人の如く出でゝ其の勢力範圍を擴張するの伎倆に乏しく、彼の大阪商人が其の勢力範圍を關西より中國四國九州に及ばし、更に北陸全道より去つて北海道にまで擴張せるに反し、僅に關東と奥羽を得意とするに止るの一事は、歴史的事情や交通の便宜にも由つたのであらうが、又東西兩地の氣風と見るの一端に供することが出來る。

以上は關東關西の概觀であるが、同じ關東の中でも先きに源氏幷に北條氏の鎌倉に據りて天下に號令し、後に北條早雲の小田原に據りて覇を關東に唱へたる相模と、廣漠たる不毛の地として放拋せられたる那須野の原を有する下野とは人情も異り、漁業を事とする房總沿岸の地と、織物の産地たる桐生足利とは其の風俗を同うせず、副將軍の城下として文敎の大に興りたる水戸と、嚊天下と長脇差とを以て名高き上州とは氣象に大差あるは免れない所であるし、同じ關西の中でも、京の着倒れ、大阪の食倒れの諺の如く公家の都たりし京都と町人の都たりし大阪とは好尚も違へば氣象も同じくない。御三家の一たりし尾張侯の城下たりし名古屋とは又趣きが異る、これらを一々に視察するは到底本書の悉くすべき所でないから、こゝには便宜上、東京、埼玉

神奈川、千葉、茨城、群馬、栃木、靜岡、山梨及び長野の各府縣を東部とし、愛知、岐阜、三重、滋賀、奈良、和歌山、京都、大阪、兵庫の各府縣を西部とし、統計の示す所によりて先づ一方里内の人口割を以て其の粗密を知り、就學兒童の百分比例を以て敎育の振否を察し、米産額によつて農業の一斑を察し、市街宅地の地價によりて商況を推し、犯罪者と人口との比例によつて其の風俗を計るの栞としよう。

府縣名	一方里内人口		學齡兒童百人に就き就學者	市街宅地一反地價	米の收穫高	人口千に就き刑事被告人數
東京	二一、二二四人	男	九七	二四六円	五三、一九六石	二、七三
		女	九六			
神奈川	七、〇一五	男	九一	一八一	四七三、九八〇	二、三一
		女	九五			
埼玉	四、六三二	男	九七	九五	一、一二三、二八一	一、〇四
		女	九九			
千葉	四、〇二三	男	九五	四〇	一、八四七、八〇七	一、一四
		女	九八			
茨城	三、一五八	男	九五	五七	一、六〇九、五八〇	一、二九
		女	九八			
栃木	二、二五三	男	九六	六五	一、一〇三、四〇〇	一、二四
		女	九八			
群馬	二、二二六	男	九五	六三	五九二、六五七	一、四一
		女	九八			
長野	一、五八四	男	九六	八四	一、四三八、五四七	一、四六
		女	九八			
山梨	一、八九六	男	九七	七七	三八七、五五三	一、四九
		女	九九			
靜岡	二、六二六	男	九七	一六二	一、二三〇、四八七	〇、九三
		女	九九			
愛知	六、〇三二	男	九七	一一二	二、〇〇七、三二八	一、四〇
		女	九九			
兵庫	三、三九七	男	九六	一九一	二、二三一、六〇九	二、〇〇
		女	九八			
和歌山	二、二五三	男	九八	一一七	六五二、二四七	一、三三
		女	九九			
奈良	二、七二四	男	一〇〇	八九	七四七、七九六	〇、八九
		女	一〇〇			
大阪	一六、八三五	男	九三	二六三	一、二〇八、八二七	二、九八
		女	九七			
京都	三、七〇九人	男	九九	一〇九円	八三二、〇六八石	一、九七
		女	九九			
府縣名	一方里内人口		學齡兒童百人に就き就學者	市街宅地一反地價	米の收穫高	人口千人に就き刑事被告人

更に西部を見んか。

東西の都會

人口の密度は東部、西部に優るの觀あれど、西部は山嶽起伏して平原の地少きに反し、東部は概ね平原にして四面山を以てせる山梨、長野の兩縣の平原少きのみなれば、數字上に於ては東部密なるが如きも實際は西部に於て人口稠密の大都會を見るので即ち東部は東京の人口二百十八萬を有せる外は、橫濱の三十六萬之に亞ぎ、他は橫須賀(武藏)七萬、靜岡(駿河)五萬三千、宇都宮(下野)四萬七千、甲府(甲斐)四萬九千、前橋(上野)四萬五千、高崎(同上)三萬九千、長野(信濃)三萬九千、水戸(常陸)の三萬八千、松本(同上)三萬五千を有するのみなるに反し、大阪の百二十三萬、京都の四十四萬、名古屋の三十八萬、神戸の三十七萬あり、降つて紀伊の和歌山(七萬七千)和泉の堺(六萬一千)三河の豐橋(四萬三千)伊勢の津(四萬一千)四日市(三萬)宇治山田(三萬七千)美濃の岐阜(四萬一千)近江の大津(四萬二千)大和の奈良(三萬三千)播磨の姫路(四萬一千)ありて繁華の程度に於ては東部は到底西部に及ばない。唯だ東京のあるあつて能く拮抗し得るが、東京を除いては東部は萬事に於て西部に劣るのである、文化の程度は東部は西部に劣るが其の代りに人情に於ては西部よりも質朴な面白い點がある。彼の有名な人國記――北條時賴の遺著と稱せらるの要を擧げて東西兩部の人情を瞥見せんか、武藏の國の風俗、豁達にして氣廣し。

岐阜	一、五三六	女男 九九 六九	一二八	一、〇四八、〇一八	一、三三	
滋賀	二、六八七	女男 九九 四八	一五三	一、二九八、三二七	一、一〇	
三重	二、九二三	女男 九九 六九	一二一	一、三七七 四八四	一、二三	

伊豆は强き風俗にて氣に乘る時も氣に乘らざる時も强し。

相模は豆州に似たりと雖も人の氣變じ易く、智あつて智に迷ひ、義を知て義に迷ふ。

安房は氣尖なること及の如く男女共に死を恐れず。

上總は大體安房に異なることなし、氣質別して偏屈なり。

下總は上總に同じ。

常陸は肝膽の間逞く生れ付きて我意に任せて取り行ひ道理を知る人少し、されど昨日の咏方、今日の敵となる如きは千人に一人もなし。

人國記の言

上野、一人氣を勵ませば諸人氣を一にして振ひ、一人氣を縮むれば諸人氣を挫かれて退く。

下野、氣の強きことは上方の五ヶ國七ヶ國合せたるよりも上なるべし、恥を恥とせずして法外の事のみ多きは理非に闇き故なり。

以上は所謂關東各國にして其の氣風略ぼ見るべし、其他山國たる、

甲斐は人の氣尖にして傍若無人の事多し。

信濃は武士の風天下一なり、百姓町人も義理強く臆することなし、然れども頑にして鄙なることも多し。

といひ、西部に近き駿河は「駿河は人の氣狹く實寡し」といひ、遠江は人の氣何事につきてもひるまず」といひ、さて西部に入りては、

尾張は進走の氣強くして善を見ても惡を見ても移り染ること早し、人の善を消し我が惡を掩ふの類、邪智我慢第一にて萬事進むこと疾く退くこと速かなり。

三河、氣勝て人の長け十に七八のびず、言語いやしけれども實義多し。

伊勢は南は物ごと詞の體はしほらし、されども心底は飽くまで慾深し、北伊勢は人の心能き所多し約を違へば赤面するほどのことはあるなり。

伊賀は實を失ひ慾深し。

志摩は伊賀伊勢に替る事なく、侍は兵器を結構にして我が館にならべ置き朋友に見せて內に驕るの氣を含む。

美濃は人の意地綺麗にして水晶の如し、日本の內の四五十ヶ國の善き風俗なり。

飛驒は風俗律義にして愚なり、日本廣しと雖も、飛驒に越えたる所なしと思ふ。

と見、さて京阪近くなりては、

近江は賢俊を兼たる風儀なり、されども賢人は少く俊人は多かるべし。

山城は實義少くして義理を知らず、奢美柔弱の氣質を離れず。

大和は大體山城の風俗に似たり、されど少し尖なる所あり。

河內は上下男女共に氣柔にして富貴なる人は却て驕る氣ありて、人を足

下に見下す心あり。

和泉は能く人を詐かす。

攝津は百人中九十人は慾深く、總じて柔弱虚誇の國風故、武は用ゐるに足らざるなり。

と評し、京都府下に屬する丹波丹後は、

丹波は我が身を自慢し、人を誹り、勇少うして諂强く、

丹後は氣質不直にして弱く、實少うして邪智あり。

といひ、兵庫縣に屬する、

但馬は丹波丹後より優れり意地もあり實義もあり。

播磨は智慧あつて義理を知らず。

といひ、予が西部の中に含めし紀伊、淡路に就ては、

紀伊は不律義にして陽氣甚しく、上の下を貪り、下の上を侮ること言語に絶えたり。

淡路は實義なれども惰氣甚しく、達人の出づべき國にはあらず。

といふ、人國記の云ふ所を金科玉條として其の國人を見るは大なる誤りで、其の觀察の悉く肯綮に中らざるものもあるであらうが、一般に東は剛强にして、西は柔弱であるといふことは爭はれない氣風である。

第三節　東北と九州

東京を中心として鐵道は四方に敷設せられて居るが、其の主要なる集散點は新橋と上野との兩驛である。新橋よりは西南に向ふの幹線出で、東海、近畿を經て山陽に入り、車窓に瀨戸內海の風光を眺めつゝ進んで九州に入り。上野よりは東北に向ふの幹線走り、關東を經て奥羽に入り、更に進んで北海道に赴く。此の二驛は交通の要路であるが、其乘客の模樣も、沿道の風物も西するものと東するものとは大なる差異がある。新橋より乘車する時は向上するの感があり上野から乘車する時は墮落する感があると云ふのは、あながちに都人士の惡口のみとは云ふことが出來ない。東海近畿の繁榮は關東平原

奥羽と九州

奥州の風俗

に勝り、山陽の風光は奥羽に越え、九州の文明は北海道の遠く及ばざる所。北海道は昔の蝦夷、暫く之れを別とするも、奥羽は日本文明の尤も遲れたる所にして九州は日本文明の先驅、共に近畿を去ること遠く、邊陬の地たるを免れざりしと雖も、其の文化は實に寧壤の差があるのである。遠き昔は奥羽の尙ほ蝦夷の地たりしが如く、九州も熊襲幷に隼人の跋扈したりし所なりしも、西なるものは早くも文化勝れる大陸に接し、東なるものは文化拓けざる未開の境に接し、西なるものに王化洽かりし時も、東なるものは尙ほ半ば蝦夷の跳梁する所なりしを以て茫漠たる四千三百八十八方里の東北は僅に陸奥、出羽の二國に分割せられたるのみで、二千六百七十方里の九州の地は、豊前、豊後、筑前、筑後、肥前、肥後、薩摩、大隅、日向の九國と壹岐、對島の二國とに分割せられて居つたのである。維新以後、陸奥を岩代、磐城、陸前、陸中、陸奥の五國に、出羽を羽前、羽後の二國に分たれたので、例の人國記なぞも、陸奥を概説して、

當國の風俗は、日本の偏鄙なる故に、人の氣行き詰りて、氣質のかたより尖なること、萬丈の岩壁を見るが如し、たま〳〵道理を知りても、前非を改むることなし、譬へば江水の流滯、塵芥積りて清むることなきが如し、之れによりて名人と呼ぶほどの人の聞えざるなり。右の生得なる故たのもしきこともあり、又情（なさけ）なき風もあり、五十四郡の內、何れも二つ三つに風俗のかはりあれども大要此の趣なり、

といひ、「改正人國記」は更に付說して

古昔は奥の夷とて人倫にも通せず、禽獸の如き風なりしに、中古上國の人、君長となり、政治を施す力により、其の風に化せられ、自から人間の道をも知れるにや、されば近頃までは民家に子をぶつかへすといふことあり、産子三乳に及びぬれば、其の父母之れを縊り殺す、人これを怪ます、父母も亦依然として惻む色なし、其の不仁なること實に夷狄の風なりしが、誠に仁風の遠く及べるにや、殘忍の俗化して今其事なしとぞ

といひ、出羽に對しては、

出羽の風俗

當國の風俗は、奥州に大概變ることなし。然れども奥州よりも健義なる所

ありて、智も亦其の上なり、武士は忠孝の志ありて、下を使ふに法を沙汰し、下臈に上を敬ふ心あり、百姓は地頭を頼む心入ありて、互に我が地頭を加擔す、頼もしき所あり、みあひと人々思へるが故に、禮貌の風俗あるなりとぞ

といふ。其の必ずしも中らざるは前にいふ如きであるが文化不到の地とし、質朴の風は存するが、偏屈であると見たのである。されば人口は一體に稀薄で、商業の如きは未だ不振の域を脱せず、九州の、長崎市(人口十七萬六千四百八十)佐世保市(同九萬三千〇五十一)福岡市(同八萬二千百〇六)鹿兒島市(同六萬三千六百四十)熊本市(同六萬一千二百三十三)門司市(同五萬五千六百八十二)佐賀市(同三萬六千〇五十一)久留米市(同三萬五千九百二十八)小倉市(同三萬一千六百十五)等の市あるに對し、奥羽は、仙臺市の人口九萬七千九百四十四を尤も繁盛なるものとし、下て青森市(人口四萬七千二百〇六)山形市(同四萬二千二百三十四)若松市(同三萬九千二百六十五)弘前市(同三萬七千四百八十七)秋田市(同三萬六千二百九十四)盛岡市(同三萬六千〇十二)米澤市(同三萬五千三百八十)福島市(同三萬三千四百九十三)にして彼れには五萬以上の市六あるに對し、之れは僅に一仙臺あるのみ、若し人口一萬以上を有する町を比較せんか、九州には二十五町を有するに對し、奥羽には十五町あるのみ。例によつて兩者の統計を示さんか。奥羽地方は

縣名	一方里の人口	學齡兒童一千人につき	米の收穫高	人口千人につき刑事被告人	市街宅地一反地價
福島	一、三九九	男 九九 女 九九	一、三八六、二六〇	一、四〇	七三
宮城	一、五七九	男 九七 女 九九	一、一八九、九七一	一、七九	五一
山形	一、四八六	男 九九 女 九八	一、七七七、八〇四	一、〇八	五二
秋田	一、一五四	男 九八 女 九三	一、六一八、四八〇	一、五一	三七
岩手	八四六	男 九九 女 九六	七三一、七四九	〇、八二	四五
青森	一、一五一	男 九八 女 九三	九〇〇、七三二	一、八六	二九

九州地方は

縣名	一方里に一つき人口	學齡兒童百人につき就學者	米の收穫高	人口千人に就き刑事被告人	市街宅地一反地價
長崎	四、四六一 女男	九九 九七	四六〇、四九八	一、二一六	一〇五
佐賀	四、〇六五 女男	一〇〇 九八	一、〇〇九、一八〇	一、二三三	七三
福岡	五、一四六 女男	九九 九八	二、二〇二、三三七	一、八九	五八
熊本	二、五八七 女男	九九 九八	一、三七四、三四〇	一、〇九	八五
大分	二、一二六 女男	九九 九八	八九〇、二三三	〇、八〇	七一
宮崎	一、〇八五 女男	九九 九八	七四九、三九〇	一、一〇	六二
鹿兒島	二、〇六九 女男	九九 九八	一、〇一一、二二八	〇、七五	五二

即ち人口は九州に稠密にして學事も亦九州に於て進み、米の收穫も亦面積に比較して九州の勝れるを見るべく、其他工業に至つては東北の九州に及ばざる云ふまでもなく、殊に九州には其の財源とも目すべき石炭あり、東北に銅山ありて其の產額少からざれど到底九州の石炭に敵し難し、されど東北は尙ほ開かるべき餘地を存すること多きも九州は已に開かれ了りたる所多ければ、

生活難の問題は東北よりも寧ろ九州に於て感ぜらるゝのであらう。九州は山嶽起伏して平原少く、東北は奥羽を境する脊梁山脈の外は概ね平亘にして國內第一の大河なる北上川は滾々として灌漑に便し、最上、御物の諸川も亦其の流域に幸ひして人の心も廣く其の生活にも餘裕を生ずるのである。東北は農業の地、九州は商工の地。其の氣風も自ら異らざるを得ない。例の人國記によつて九州諸國の人情を見んか。

豐前　眞實定りたる意地なく、死生を論ずる場に至りても忠義を知らざるにもあらねど理を捨てゝも命を惜みのがるゝもの多し。

豐後　氣を稟くる所、偏塞なり、若し其の內十が一も善に生れたるは偏屈の中よりの出生故に堅固なること比なし、……其の死を厭はざること鵝毛の如し。

筑前　大抵飾多くして人々各〻の心なり、勇も一應は勤むれども飾る風故、

といひ、こゝにも出生する子を殺害する風あるを付記す、兩豐は今は武よりも文の地にて殊に豐後に於ては九州中尤も雅趣ある所たり。

終に何事も成就せず、但し九州に珍らしき華奢の國なり、酒色を好む人多し、親疎の隔てなく、我が爲めに得ある人にちなみしたがふ、

筑後　は筑前にかはり、實義あり、常に義理を談じ得失を沙汰し、費を愼んで言語に飾ること少し……其の堅固なること鐵石といへども、これは鐵にはあらずして石の如し、

と、筑前は海に面して交通に便なれど、筑後は僅に海に面して多くは山國たり。豐筑と其の氣風の同じからざるは兩肥幷に日薩隅なり、

肥前　武勇に至ては義を知りてひるむ色なし、只溫和の志を知らざるなり。

肥後　は大抵肥前に似たり、されども其の勇を數るに百分の一なり、……智あるを以て分別多く、思ひ〳〵なる故に一和せず、

日向　只氣の尖なるに任せて己が理とする時は非といふ人ありとも、曾て用ひず、……只だ死するを以て善とすること危き風俗恐るべし。

大隅　これも死を以て表とし、男子たるものは死する道と覺え……不禮の行跡多し、

薩摩　大隅に少しも違ふことなしとぞ

と日薩隅は武を以て勝り、肥後は之れに才を加ふ、」

日向は武を以て勝り、肥前も亦佐賀倒は武を以て勝り、肥後は之れに才を加ふ、」

これたい大體の觀察のみ、少くとも四五百年前の觀察のみ、德川三百年九州は外樣大名の其の國を領する多く、薩摩の島津、七十七萬石、日薩隅を領して琉球に及ぶ、肥後の細川、五十四萬石、筑前の黑田、五十二萬石、肥前の鍋島、三十五萬石、嚴然として領土を持し、幕府を恐れしめ、終に勤王倒幕の擧は此の九州より起りて今日の日本を致す、之れを奥羽の仙臺の伊達、六十二萬石を以て奥羽各藩佐幕の盟主となり、會津の松平、二十三萬石、庄內の酒井十五萬石之れを助け、南部は二十萬石、米澤の上杉は十五萬石、津輕は十萬石、其餘の諸藩も多く之れに從ひ、唯だ秋田、佐竹の二十萬餘石の勤王に與みしたる外、佐幕に傾きて現代の劣敗者の地に立てるに較すれば、略ぼ其人情も察し得べきではないか、奥羽は時代の逆境に立ち九州は順境に立つ然れども維新後四十餘年、時代は變化して奥羽の昔日の狀にあらざるは、九州の昔日の狀にあらざるが如く、日本の偏鄙と云はれたる九州の先きには琉

球早く我が版圖に歸し、臺灣も亦我が有となり、近く朝鮮も亦併合せられ、奥羽の先きには北海道あり着々繁華に赴かんとし、其の先きに千島あり、樺太あり、九州奥羽共に邊陬を以て目することが出來なくなつた。併し今日の處、まだ〳〵北は南に及ばないのである。北は馬、南は船、南船北馬の語は我が九州と東北とを旅行するものの事實に感ずるの語で、其の又船と馬との差異が其の文化程度に非常な影響を有し、人情風俗にも多大の關係を與へて居るのである。

第四節　表日本と裏日本

大體の上より云へば東海、山陽、南海、西海の諸道は表日本で、奥羽(殊に出羽)幷に山陰は裏日本に屬するのであるが、既にいふた北陸、關東、關西、東北、九州を除いていふと、表日本に屬するものは太平洋方面にある四國、中國、裏日本に屬するのは日本海方面の北陸と山陰である。表日本は日本の玄關、南を受けて氣候もよく文化も進んで居るが、北日本は日本の裏口半年一日の

晴なしと云はれる雨雪に苦む地方が多いので、其の人情風俗も從て異り、雪が少い四國中國と、雪の名所の北越とは其の氣風も同じくない。同じ裏日本の方でも北陸は山陰よりも北に入るので其の差も亦甚しい、山陰と山陽とは時に共に中國の名を以て併稱せらるゝので、其の脊梁骨たる山も亦高くないが、北陸と其の反對の東海諸國とは中に中仙道の高山峻嶽に隔てられて居るので山陰と山陽との差の如き比でない。先きに關東關西なる總稱の下でいふた諸地方と此の北陸とを比べて見ると、市といふのは僅に金澤市(人口十一萬九百九十四)の名古屋市の三分の一たる外は、新潟市(同六萬一千六百十六)富山市(同五萬七千四百三十七)福井市(同五萬三百九十六)長岡市(同三萬五千三百七十六)高岡市(同三萬三千六百〇三)あるのみ。もとより之れを山嶽崎嶇なる岐阜長野等に比せば農商共に發達して居るが、商に於て東海道に比肩することが出來ない。併し地は概ね平亘であるから農業に於ては決して劣らない。例の統計を示すと。

北陸の統計

縣名	一方里の人口	學齡兒童百人につき就學	米の收穫高	人口千人につき刑事被告人	市街宅地一反地價
新潟	二、一四一	男 九九 女 九六	二、七三五、一三〇	〇、六三	一三三
福井	二、二四七	男 九九 女 九七	八七七、五五七	〇、九七	八一
石川	二、七七八	男 九九 女 九九	一、〇四四、六八四	〇、七七	一〇一
富山	二、八一〇	男 九九 女 九八	一、六〇四、五〇九	〇、七八	七五

北陸の人情

で、全體の傾向は關東よりも關西に似て居るので、商業の取引も關東よりも寧ろ關西に多いし、宗教狀態も他力教殊に眞宗尤も多數を占めて居つて、關東の自力教の多數なるとは反對である。（同じ裏日本でも奥羽の方は關東に近いからでもあらうが、其の宗教も關東の如く自力教が多い）即ち北陸四縣の寺院總數七千三百の中四千百八十七は純他力たる眞宗である（奥羽六縣の寺院數五千七百七十八の中、二千八百八十七は純自力たる禪宗である。）人國記は、

若狹　人の氣和すること無く

其の非を擧る風あり、

越前　上下共に勝れたる辯舌、尾張にも劣るまじきなり、輕薄にして一旦たのもしきやうにて詰る所つれなし。

加賀　上下ともに爪を隱くして身を密かに持つ風なり、武士の風はおとなしやかにて尖なる所なし。

能登　人の心別して狹くして他國へ一足踏み出せば渴命に及ぶべしと思へり。

越中　陰氣の中に智あり、勇あり、俊なる氣多し。

と、當否は知らねど其の觀察の關西に似たるを見るべきではないか、越後は北陸中尤も關東に近きもの、されば又

越後　勝つことを好む氣象多し、臆する氣は少けれども、さしかゝりの强きほどは後度のしまりを考へざるなり

と云ふ、北陸中、富山石川兩縣地方には金澤の前田、百二萬石を以て之れを領し、福井は福井の松平、三十二萬石を以て之れを領したれど、越後は小藩分立して恰も關東の如く、各地方の氣風も亦自ら異るを免れなかつたのであ

る。

更に西して山陰を見んか、丹波丹後但馬は京都、兵庫の二縣の下に云ひたり、こゝに云ふべきは因幡、伯耆、出雲、石見の四國にして縣に於ては、鳥取、島根の二縣、此の二縣は大藩の領土にして因幡伯耆は鳥取の池田氏、三十二萬五千石、出雲は松江の松平氏十八萬石、石見は小藩分立す、其の宗教狀態は北陸に反して自力宗盛んにして、兩縣寺院一千七百八十五の中、七百〇九は禪宗にして、眞宗は鳥取に於て四十二、島根に於て五百〇三あれど。そは出雲の國にあらずして主として石見の國に存す。即ち石見の風は、他の三國と異にして山陽に似て居ることが多い、人國記によると、

因幡　八上碁頭邑美(山の方面)の三郡は實にして勇ありて約を變せず、高草、氣多、法味、巨濃の數郡(海岸)は佞にして邪智あり、

伯耆　風俗すべて虛實相半す今世下賤の諺に三日坊主といふは此の國の風より始るといふ、

出雲　萬事の作業、實義に勤めて夫れを專一とする風なれども、明闇の詮

義疎にして其の理を辨へず、

石見　は僞多くして實なる人稀なり、智あるものは只惡心をたくむ、言語道斷の國なり、

と、因伯と出雲とは大體には其の氣風を同じくすれど舊藩の異りしが故に、民情も同じからず、因伯は出雲よりも武に傾き出雲は文の國、禮義の國、體裁の國、石見は出雲に比して少しく野鄙なるを免れざれど、素朴の風あり、此の二縣は

縣名	一方里の人口	學齡兒童百人につき就學	米の收穫高	人口千人につき刑事被告人	市街宅地一反地價
鳥取	一、九〇二	男 九八 女 九四	六五三、一二一	一、三五	七六
島根	一、六五六	男 九九 女 九八	九六五 四〇〇	一、〇三	七〇

にして、其の反面たる中國即ち山陽諸道は、

縣名	一方里の人口	學齡兒童百人につき就學	米の收穫高	人口千人につき刑事被告人	市街宅地一反地價
岡山	二、七九〇	男 一〇〇 女 一〇〇	一、六二九、一一九	二、〇三	一五〇

廣島	二、九四五	女男 一〇〇〇	一、二七四、三七四	一、五〇	一五一
山口	二、五九六	女男 九九八	一、三九三、六〇二	一、五二	一一五

山陰と山陽

中國の人情

の數字を示す、これにても、山陰と山陽との風を察することが出來る。其の宗教狀態を云へば備前法華に安藝門徒、比較的岡山縣に日蓮宗多くして、廣島縣には眞宗が多い、勿論同じ廣島縣にても備後の方は禪宗が多いが、安藝に入ると眞宗勢力を得、引て山口縣たる周防長門に及んで居る。舊藩の大なるものは備前岡山の池田氏、三十一萬五千石、安藝廣島の淺野氏四十二萬六千石、長門萩の毛利氏三十六萬九千石、各〻其の氣風を異にす。例の人國記、

備前　利根を先として萬事を爲すによりて言行相違すること多し、……內は皆な私心にておもてを衒ふ風なり、しかれども却て智惠あり、

備中　意地つよし上下男女ともに勇氣ありて義理を勵ます意常にあり、

美作　卑劣にして欲心深し……されども化し易き氣質もありて石州には優れり。

以上三國は岡山縣に屬す、其の中美作は山國、備前は海に瀕して山淺くして平原多く、備中は海には面すれど山入更に深し、備後も亦海濱多けれど、山亦深し、安藝は三方に山ありて、南は海邊なれども、瀨戶內海の島々山の如くに連る、此の二國は廣島縣、人國記

備後　は生得實義にして約を變ずることなし、されども愚痴なること多き故、覺えず不實になることを辨へず。

安藝　は生得實多き風なれども、氣自然と狹く諸人控へて……己れ〳〵の一分を守る風なり、之れに依て拔群なる人なし

と、山口縣は周防と長門とを領す、周防は海濱多く、長門も亦三方皆な海、

周防　は健義なり……昨日まで肩を並べし者にても仕合よければ主君と仰ぐ風なり、故人稀れにして惡事も亦少し、すべて氣小さき故殘忍なることはなし。

長門　人に應ずるにも一思案して答る風なり、互に人賴みにして遠慮過たり……進むこと疾けれども其のまゝ怠惰の氣發す。

と、山陽は陽氣、山陰は陰氣、山陽には市として岡山市(人口九萬三千四百人)尾の道市(人口三萬〇三百六十人)廣島市(人口十四萬二千七百六十人)呉市人口十萬六百八十人)下の關市(人口五萬八千二百五十人)あり町としても備中の倉敷備後の福山、周防の山口、長門の萩等著名なるものあるに反し、山陰は僅に松江市(人口三萬六千二百人)鳥取市(人口三萬二千六百八十人)あるのみにて、之れに亞ぐものとして伯耆の米子町出雲の今市町を算し得るのみなるは心細からざるを得ず、港灣としては山陽には今四國との交通路たる備前の宇野港、安藝の宇品、古來著名なるものとして備前の玉島、備後の鞆、同尾の道、周防の岩國、而して軍港として呉あり、内外交通の關門たる下の關あるに對して、僅に伯耆の境港を算するのみなるを見ても、商工に於て文化に於て山陽の山陰に優るものあるを見るに躊躇しない。表日本は何れの點に於ても裏日本に優る。若し夫れ瀬戸内海の對岸を見ると、こゝに四國がある、四國は四縣、高知縣なる土佐を以て尤も大とし、香川縣たる讃岐を以て尤も小とす、舊藩の關係を云へば、土佐に山内氏あり、二十四萬餘石、阿波に蜂須賀氏あり二十五萬餘石、伊豫と讃岐

とは小藩分立し、氣風も亦同じからねど、大觀すれば四國は北に向へる阿波讃岐尤も開け、伊豫之れに次ぎ、土佐は交通不便の爲めに氣風も亦異る、即ち人口の密度其他に見よ。

縣名	一方里の人口	學齡兒童百人につき就學	米の收穫高	人口千人につき刑事被告人	市街宅地一反地價
德島	二、五七六	男 九九 女 九八	五三八、四六四	一、〇〇	一二七圓
香川	六、二〇七	男 九九 女 九九	九〇三、〇二七	一、〇二	一三七
愛媛	三、〇〇二	男 九九 女 九七	九一四、二三七	一、八六	一〇〇
高知	一、四二五	男 九九 女 九八	六〇四、六〇五	一、五三	一二四

近畿中國に向へる方面には德島市(人口六萬五千五百六十人)高松市(同四萬二千五百人)丸龜市(同二萬七千人)松山市(同四萬四千百六十人)あるに對し、猥濫たる太平洋に面せる土佐には高知市(同三萬八千二百七十人)あるのみである。併し交通の便は人情の輕薄と伴ふ、人國記に見よ、

阿波　大抵氣健かにして知あら、されども知ある故變道へ行く氣象あるべ

し、

讃岐　氣質弱く邪智の人多し、

伊豫　東部は氣質柔にして實義強く、西部は却て氣強く實は少く見ゆるなり、

土佐　極めて眞ありて氣質すなをなり、

と、しば〳〵云ふ如く人國記の云ふ所、必ずしも肯綮に中らねども大體の氣風は之にても察することが出來る。阿讃伊は中國即ち山陽と相對して其の人情も彼れに近く、土佐は地理的には日本の表面であるが、歷史的には中央に遠かつて日本の裏面たるの感があつて、もとより裏日本のやうに陰氣ではないが、四國の內では表に屬するものとは見られぬ。以上の觀察は非常に粗雜で且つ皮相たるを免れぬが、吾等は之れによつて大略風土と人情との離るべからざる關係を有することを看取するに難からぬのである。

第五節　世態人情の研究

今の人情は過去の結果

血は水より濃し

世態は紛糾、人情は微妙、其の研究は決して容易でない。唯だ僅に上來叙述したる所によるも、吾等が今日の世態は過去の文明の結果にして之れを享受するに吾等國民の歷史的遺傳によつて成されたる國民性を以てし、更に地方の狀態によつて變化せられたるもので、其の所謂人情なるものも、遠くは動物時代の性情を遺傳せる上に、文明の訓練を受けて其の野性を淘冶し來つたのであるが、そは尙ほ裏面に潛みて時に呑噬の蠻行を敢てして憚らざることあり、粗暴の氣風は德教によつて社會の共同生活を妨げざるやうに進められたのであるが、統治機能の之れに制裁を加ふるなくんば、遠き昔の性情を暴露するを免れない。五千年の歷史がしば〳〵繰返し來れる人種の異同に對する愛憎の情は、表面に於ては四海同胞の美名の下に、其の發現を止られたれど、血は水よりも濃しとの諺は小は個人の生活より大は世界の生活にまで今尙ほ偉大の力を持て居るのであるし、同じ人種でも其の隷屬する國家の異れるに從ひ、愛國土の情は、他を排するの心と表裏して離れざる關係を有し、強烈なる愛國の、時に強烈なる排他となることを免れない。遠洋萬里天

涯の孤客となつて同國の人に會するの時、誰か歡喜の情を起さぬであらう、若し其の人が其の鄉土を同じうするといふに於ては、其の感殊に深く、更に親戚たり、故舊たりといふに於ては感極らざるを得ない。即ち吾等は時間的には(一)動物性の遺傳(二)人類としての遺傳(三)歷史の訓練(四)現代の感情となり。空間的には(一)人種の異同(二)土地自然の狀態等によつて動かさるゝのであるに、それが統治機能や經濟機能若くは宗敎機能によつて人爲的にも變化を生ずるので、平素はさまで憎みもしない他國人も一旦交戰國となると憎惡心の甚しくなり、從來は餘りに親しまざりし外國人も同盟國となると親密の度を深くし、昔は藩主の異なるによつて其の感情にも異るあるを免れなかつた兩地方も、一縣廳の下に支配せらるゝと何となく睦みを生じ、曾ては同一政治の下にありしものも、其の管轄の異なるに從つては他國人の如く思ひなすに至るは統治上より來る變化で、今までは米麥と野菜とのみを作つて平穩に生活せし農村が、養蠶の盛んになるに從つて人の氣の投機的に陷り、曾ては素朴なる一漁村に過ぎざりし海濱も、鐵路通じて物貨集散の地となるや人情茲に一變する

如きは經濟狀態からの變化、久しく同一宗敎の下に養はれしものが新宗敎によつて其の氣風に變化を與へ、一文不知の土民も世界の智識の輸入せられて其の情の前と異るに至り、彼の粗豪の風一朝にして仁慈の俗となる如きは敎化より來るものである。併し人情の迂餘曲折は、決してこんな單純なものでは解せられず、富貴の人の感情は貧乏人には解せられぬことがある、或る乞食が若し巨萬の富を得ば黃金の麵桶を作るといふたといふのは一笑話に過ぎないが、こゝにも乞食の情はあり、或る大名が家來が此の大罪人に如何なる苦患を與へましようかといふ時に、其の大名が旅籠に乘せて道中させよといふたのに大名の心持はある。獵夫には獵夫の人情、商人には商人の人情、生活の人情に影響することは實に深いものがある。若し更に別種の方面から人の心を見んか、男女の關係がある。男の女を愛し、女の男を愛するは一應の情だが所謂其の愛情にも諸種の區別があり、青年の戀、中年の戀、老年の戀、其

の對手も所謂「蓼喰ふ蟲も好き〳〵」で、外見から想像することの出來ないことが多い、此の問題に別して人の情を動かし、國家の治亂も美人の纖手に繫かるの例は東西に乏しくない。遠き希臘のトロイ戰爭や羅馬の英將ポンペイの末路、支那の殷の紂王唐の玄宗皇帝は云はずもあれ、我が日本に見るも承久の亂は遊女龜菊の采地のことに崩し、應仁の亂は女御富子が心に出づ、其他の御家騷動より日々の新聞種に至るまで、此の問題の世を動かし人を動かすことは、非常なものである。更に更に高尙なるものを見んか、人は日々營々として衣食に奔走し、生活に齷齪す、其の爲めに金を得んことを欲す、眞に金が敵の世の中であるが、一文の錢をも惜む吝嗇奴も其の子の愛には錢の惜むべきを忘れ、生命の爲めには巨萬の財も代へ難しといふ、人は金を愛す、金よりも愛すべき命、されど其の命を棄てゝ願みざる志士仁人は抑も亦何を望むのであらう、彼等は名を望むか、名を望むは眞の志士仁人にあらず、西郷隆盛いふ、名もいらぬ命もいらぬといふものでなければ大事は出來ぬと、人情愈〻微妙世態益々紛糾、請ふ其の主要なるものに就て觀察を試ん。

第二篇　生活の研究

第一章　生活の中堅

第一節　生活の意義

生活といふことは、唯だ生存するといふ意味のみではない。唯だ生存するといふことなれば空飛ぶ鳥も、野を驅る獸も、衣服の心配こそなけれ、食と住とを求めて生きて居るのである。勿論、彼等といへども生存競爭の理法に支配せられて其の食を得るに苦心し、住居を保つに焦慮するであらうが、それは唯だ生くるといふだけ、否、寧ろ其の本能によつて行つて居るので、何等の意義もなく目的もない、人類の生活は此の生存に意義あらしむるので、希望もあれば、目的もある。過去幾千年、人類の企劃し經營し來れる文明なるものは實に此の希望を得んとする苦心の結果、此の目的を達せんとする焦慮の賜に外ならない。人類は此の爲めに統治機關の完全を計り、經濟機關の便

生活の中堅

宜を考へ、敎化機關をも造つて共同生活に資せんとして來たので、吾等の此にいふ生活は現代文明の一員として如何に生活すべきかで、彼の木實を食ひ獸皮を纏ひ、樹上を家とし、穴居を俗とせる原始時代の生活を云ふのではない。即ち今日の吾等は、(一)世界文明國民の一員としての生活、(二)立憲國民の一員としての生活、(三)自治町村の一員としての生活、(四)家族の一員としての生活、(五)個人としての生活を計らざるべからざると共に(四)家族の一員としての生活を計らねばならず、之れを完全にするには(一)現代の智識を修めざるべからず(二)時代の進運に伴はざるべからず。而して其の生存の中堅たる衣食住を得るに就ては何等かの業を營まざるべからず、吾等の生存には初めて呱々の聲を擧げしより、衣に就き、食に就き、住に就き、多くの物品を消費す、消費あつて生產なくんば、消費の資を得ずんば、衣も食も住も供給せらるゝなくして、吾等は單なる生存だも保持することが出來ない。吾等は消費者たると共に生產者たらざるを得ない。併し人類が悉く生產者たるといふことは不可能であるが、悉く消費者たることは事實である、小兒も老人も病者も不具者も

現代文明と生活

生活の五段

生產と消費

消費者たることは事實であるが。生產者たることを得ない。生產者たる能はざる所で、老人病者を遺棄した古代の蠻俗は今の世に存せしむべきことでなく、小兒の消費を禁じ、其の生存を奪うては他日の生產者たるものを亡ぼすことゝなる。此に於て社會には救濟事業あり、養育院、孤兒院、施療院の如きは此類で、國家は又法律に於て扶養の義務を定だめ、老者幼者を養はしむることゝしたのであるから、一人の生產者はこれによつて直接若くは間接に多くの不生產者を養はねばならぬことゝなる。それのみならず、身の病者たり老者となつて不生產に陷る時代あることを豫期せば多少の貯蓄もせねばならぬので吾等の生活は實に困難なものである。曾て國民の生活狀態に就て左の計算を示したことがある。

生活狀態には上の上より下の下に至りて一ケ月數千圓を要するものより一日僅に六七錢を以て生活するものまで其の差霄壤も啻ならざれど、暫く其の中等なるものを比較するに都會に於ては月收七十七圓を有するものを以

て標準とし、地方に於ては一町の田地を自作する農民を中流と見るは恐くは失當にあらじ、今此の標準によりて我が國民生活の狀態を視察するに頗る樂觀すべからざるものあり、暫く事の乾燥なるを許して數字的調査を遂げしめよ、これ豈に國民敎化上に看過すべきことならんや。今東京に於て月收七十五圓を有し夫婦の外に老人、子供二人、下女一人の六人暮しをなせるものゝ一年間に於ける生活狀態を見るに

收入

一金九百圓　月收七十五圓(一年分)

支出

一金廿七圓十八錢　所得稅府市稅區費
一金百四十四圓　家賃(一ヶ月十二圓として)
一金二百七十六圓　米代副食物諸費
一金六十圓　主人被服料

〔大抵月賦法にて洋服、外套其他を調製する慣用により〕

一金四十八圓　家族被服料
一金七十二圓　主人小使幷に車馬賃、交際費
一金六十圓　家族小使、小兒敎育費湯錢等
一金三十圓　水道、電燈、町內費用等諸雜費
一金三十六圓　下女給料
一金二十四圓　家具購入、家屋修繕等雜費
一金二十圓　臨時病氣其他諸費

計金七百九十七圓十八錢

差引殘額金百〇二圓八十二錢

こは某省官吏の家計表にしてこれにては生計頗る餘裕あるに似たれど、これは一滴の酒をも常用せざるなれば若し主人一日に二合の酒を呑むとせよ、其の酒を一合八錢のものとするも一日十六錢、一ヶ年五十八圓四十錢、日に敷島一個を費すとするも亦一年三十六圓五十錢、最低價なる新聞を閱讀するとするも二圓四十錢之れを控除する時は剩す所は五圓五十二錢、若し

生活の中堅

小兒に牛乳を要し老人に酒若くは煙草を要するとせば如何にして之れを給すべき、且つ夫れ一人にても中學(又は高等女學校)に通ふの子女あらんか教育費は到底先きに計算するものにては足るべくもあらず、主人にして若し何等かの娯樂を有せんか、そが最も費用を要せざる讀書にありとするも筆紙、ハンカチ、車馬、交際其他一切の小使を一ヶ月六圓に見積られたる中にては之れを購入するの費に窮せざるを得ず。更に生活を縮少するか、他に收入の策を講ずるにあらずんば此の一家は漸く生活し得るといふまでに て到底發展の法あるにあらず。

地方農民に至ては更に甚しきものあり播磨國飾磨郡に於ける千戸中僅かに百二十三戸と屈指せらるゝ中等農民の生活を見るに、前代議士川口氏が精細に調査して、殊に吾等の爲めに報告せられたるもの左の如し。

一町の田地を自作する中等農民の收支計算

但　家族の數　五人夫婦の外に老人一人、小兒二人、一人の小兒は學校に通學す
　　耕作地面　田地一町歩(自己の地を自作す)
　　土地の等級　中等(米麥兩作地)

法定地價　(一町歩五百五十圓と見る)

收入

一金二百六十四圓也　收入米價
是は一町歩の收穫米平均二十六石、其内四石を家族五人の飯料に控除、殘廿二石を金十二圓石代に計算す

一金五十四圓也　收入麥價
是は一町歩の收穫麥平均十三石、其内四石を家族五人の飯料に控除、殘九石を金六圓石代に計算す

一金二圓十錢也　收入大豆價
是は一町歩田地の畦畔に蒔付、收穫する大豆五斗の内、二斗を自家用等に控除、殘三斗を七圓石代に計算す

一金二十五圓也　(收入高及糠代)
是は一町歩の田地より收穫する稻藁參稈及糠等の内、自家に控除、殘品を時價に積る

合計金三百四十五圓十錢也

支出

一金三十圓二十五錢也
生活の研究

(以上一ヶ年收入金)

生活の中堅

一金十八圓十五錢也　是は國稅地租金にて地價金五百五十圓に對する五分五厘

一金五圓五十錢也　是は縣稅地租割金にして地租金一圓に付き金六十錢の割

一金二十二圓也　是は村稅地價割金にして地價金百圓に付金一圓の割

一金六圓也　是は一ヶ年の縣稅戶數割、村稅戶數割所得稅、所得稅附加縣稅、所得稅附加村稅其他水利組合費、協議費等、土地の收入を標準として賦課せらるゝ諸縣費の總計にして、地價金の約五分五厘に當るもの

一金九十圓也　是は一ヶ年の肥料代、但し一反に付金九圓の見込

一金十八圓也　是は耕作用の牛又は馬一匹の飼養料一ヶ月一圓五十錢の見込

一金四圓八十錢也　是は農具の新調及び修繕費、一ヶ月四十錢の見込

一金六圓也　是は疊建具其他納屋物置等修繕費一ヶ月五十錢の見込

一金十九圓也　是は家族五人の被服費にして一人一ヶ年に單物一枚、袷一枚宛新調するものと見て、表地一反金一圓五十錢、裏地一反金八十錢、小兒二名は一反を要せざるに付、餘りの布切を、積枠又は前垂等に流用す（但以上は何れも綿服平常用にして儀式用の晴衣は此外なり）

一金八圓四十錢也　是は親戚又は友人等の冠婚葬祭の贈與品代、自家祖先の佛事費等一ヶ月金七十錢の見込

一金二十四圓也　是は農繁の節、米麥地の耕耘、播種、苗取、田植、草取、苅稻採收、稻扱、收獲等の爲め男子一名雇、日數六十日間、一日賃金四十錢の見込

一金三十六圓也　是は家族五名、一ヶ年の鹽菜費、一人一日金二錢にて五人分、一ヶ月金三圓の見込

一金二圓四十錢也　是は一ヶ年中家族五人の藥價及び醫者の禮金等一ヶ月金二十錢の見込

一金十二圓也　是は小兒一名を高等小學校に通學せしむるに付月謝及び書籍筆墨紙代等一ヶ月金一圓の見込

一金二十一圓六十錢也

生活の研究

生活の中堅

一　是は家族が耕作物の手入の外、俵藷等の間製又は炊事及び衣類、洗濯等多忙の爲め薪を採るの餘暇なきを以て、之を買取るものとしての薪代一日金六錢一ヶ月金一圓八十錢の見込

一金二十五圓二十錢也

是は一ヶ年間の油、茶、其他小兒の小使錢等を込め雜費一日金七錢、一ヶ月二圓十錢の見込

一金十二圓也

是は公租公課の外に赤十字社、愛國婦人會、水難救濟會、海員掖濟會、義勇艦隊費、武德會、產業組合、體育會、敎育會、耕地整理、軍人後援會、海事協會、農會、報德會、養育院、廢兵救助、尙武會、地方靑年會、招魂祭、氏神祭禮費、入營兵士送迎費、其他敎育、慈善事業にして土地を標準として割付出金を免るべからざる一種の公課的性質を帶びたる支出金一ヶ月一圓の見込

合計金三百五十五圓三十錢也

差引不足金圓錢二十錢也

（以上一ヶ年支出金）

都會人士の生活は官吏を標準として示したるものにて被服等は必要に應じて見積りたれど、此農民生活は唯だ日常の被服の外、交際場裡に立つべき被服をも見積らず、且つ一滴の酒なく一本の烟草なき狀態なり、誰か尙ほ之れに向つて勤儉をいふものぞ、我が國民生活は上下を通じて疲態の中にあり、之れを之れ思はず其の負擔を重からしめんとするは之れ民を苦むるものにあらずや、

生活難の問題

此の一例によつても、國民生活狀態の一斑を見得べきでないか。今や文明諸國は一般に生活難の聲が盛んで、各國政府も其の施設に苦心して居るやうであるが、これは、食物の增加の割合よりも人口の增加の急激であるといふ根本原因もあり、機械の發明頻々で、其の爲めに人工を奪ふといふ一時的原因もあり、自由競爭が劇しくなつて業を得るに困難になつたといふ主要なるもあるが、消費の方面からいふと一般に奢侈になつたといふことは否むべからざる事實で、これには外國の奢侈品の輸入もあり、文明人士の體面といふ感情もあるが、其の根本なるものは、近代文明の產物たる自由平等の說が諸種の階級を打破して一切をして自由競爭の渦中に沒在せしめ、昔のやうに安圍と其の業を世襲するといふことがなくなり、實力によつては昔の貴族の爲

したるごともなすことが出來るといふ風で、前にもいうた、昔は斬捨御免の下に蔑視せられた素町人も、今は金さへあれば貴族と同じ汽車にも乘ることの出來る世となつたのであるから、下層民の生活が贅澤になり來つたのに基くことが多い。實際人間の生活は實用的のものより不實用的のものが多いので、單に生活するといふならば米と漬物があれば、それで足り、夏冬の衣があれば滿足し、膝を容るゝの室あれば充分であるが、滋養品を取らねば身體が續かぬといひ出し、粗食の人の健康なるのを見ずして鷄卵、牛乳、諸種の物も必要となり、唯だ腹を膨らすのみでは滿足せず、口、美ならざれば喜ばずして調理をやかましくいひ出し其の衣服にも羽織もいれば袴もいり、帽子も必要なれば外套も着ねばならぬ、其の家にも起臥する室の外に、座敷もいれば臺所も必要、これらは普通の生活としても缺くべからざるものとなり、其の上に尚ほ幾多の裝飾、幾多の需要、贅澤に限りはない。或る程度までは無用の用あり、必らずしも贅澤を以て目すべからざることもあつて、日常生活の必要とする物資も、其の人の地位、職業、收入によつて異るので、小商人にはフロック、コートは必要品ならねど小官吏にも之れは必要品となり、土方人足には一冊の書籍なくともさしつかへなきも、學者教員には之なくてはならぬ如く、仔細に觀察し精到に打算して行くと單に生活といふが其の分類は千狀萬態である、千狀萬態であるが、一切の外皮を剝ぎ去つて生活に必要なる中堅となるべきものはといへば衣食住であり、此の衣食住の需要を滿すに必要なるは金錢である。吾等は先づ此の中堅たる衣食住と人情とを見て生活の研究に入るの初めとせなければならぬ。若し夫れ之れ等の物質的生活以外に、精神的生活を尋ね、實用的生活以外に美的生活を究めて行かんか、更に紛然雜然たるものがあるのであるが、それは暫く後章に讓ることゝする。

第二節　食物と生活

試に營々として働く人に向つて、汝は何が故に働くかと問へ、彼れは必ず答へて云はん食はんが爲めなりと、食ふといふことは生活の一部分で、人は麵包のみにて生くるものではないが、又麵包なくては一日も生くることの出

生活の根本中樞

人あれば食あり

來るものでない。されば食ふといふことは生活の一部分であるが、實は其の主要なるもので他の部分はよし之れを略することが出來るとするも、食ふといふことは略することの出來ない根本中樞である。人間の生命といふものは主として此の食ふことによつて外部から營養物を得て保持して行くのであり、且つ人には誰れ敎へずとも飢えて食を求むる本能的の衝動があるから、大古蒙昧の時代といへども、人あれば食ありで、人類は食物のある所でなければ生存することが出來ないのである。人類原始の地方は此の食物に豐かな土地で氣候も亦暖かであつたから衣や住にも不便の少かつた所に相違ない。彼等は此の天然の助けある地方に木實を食ひ、漁獵を事として居つたのであらうが、人智次第に開けて漁獵の時代より牧畜の時代に入り、水草を追うて諸方に漂泊し、終に一定の土地に止つて農耕を事として食物を供給する時代に入つたので、此の頃には又衣服住居も必要を生じて生活は複雜になり來つたのであるが、矢張其の主要なるものは食物で、食物と土地とは離るべからざる關係を有し、其の土地と人類とも亦離るゝことの出來なき狀態となつた。さ

てかく土地、と食物、と人類とが離るべからざる關係を有し來るに從ひ、人口の增加するに從つて食物も亦增加せしめざるを得ず、食物を增加せしむるに就ては土地を擴張せざるを得ざるに至つて、他の部落との衝突となり、他の國家との軋轢となり來つたので、人類歷史の一面は確かに此の食物問題が中心となつて居るといふことが出來る。それは彼のマルサスが人口論に於て絕叫したが如く、人口の增加は幾何級數的で二が四となり、四が八となり、八が十六となるといふ風であるが、食物は其の割には增さない。勿論人智の進歩、農業の發達によつて收獲を增すには相違ないが、それは數學級數的で一が二となり、二が三となり、三が四となるといふ風であるから到底幾何級數的に增加して行くことは出來ない。これを我が日本の上に見るも、我が民族は天の益人（ますひと）というて非常に繁殖力に富んで居るので、今より一千三百年の昔、推古天皇の頃には僅に四百九十八萬八千人と算せられたものが、平安朝の末には八百萬人に增加し、德川氏となつては二千五百萬となり、今日は五千萬人となつたのである。かく人口は增加するが耕地が其の

米産と人口

割に增すのでないから如何に農業の改良を計り、不毛地の開墾を企てても、國土には限りがあるが人口の增加には限りがないから幾年かの後には食物の缺乏を免るゝことは出來ない。否、今日現に多少の缺乏を感じつゝあるのである。即ち今より二十年前には米の産額三千七百十萬石に對して、消費高三千六百八十萬石で三十萬石の剩餘を生じた我が國も、今は米の産額四千九百萬石に對し消費額は五千百萬石（四十一年調査）となりて二百萬石の不足を感ずるに至つたので、其の缺を補はんが爲めの外國米輸入は二十年前には僅に二萬石內外であつたものが、今は二百萬石を入るゝに至つて居るのである。されば今後十年二十年の後、人口は更に增加して六千萬となり七千萬となり來らば其の缺乏も亦從つて多からざるを得ないのである。併し目下此の困難に遭遇して居るのは獨り我が國のみではない。文明を以て誇る歐洲諸國といへども其の國で出來る食物で其の國人を支ふるに餘りある國は一つもなく、獨逸の如きは其の國の收穫を以て其の國人を養はんには一年八十餘日間の不足を生じ、英吉利の如きは一年二百有餘日絕食するにあらずんば、其の國の

殖民政策と食物

生産を以て其國人の消費に充つることは出來ないといふ。然らば如何にして生存するかといふに、多くの屬邦あり、殖民地あり、且つ外國貿易が盛んで之れによつて補ふて居るのである。近時歐洲諸強國が亞弗利加に眼を注ぎ、南洋に手を下し若くは南亞米利加に殖民を企てゝ居るのも亦此の必要に迫られて居るので、所詮人類の歷史、國家の興亡は此の食物問題に職因することが多いのである。

食物と人情

食は命なり、人誰れか生命を惜まざらん、」人誰れか食を欲せざらん、此の食物の爲めには人情も冷酷となるので、原始民族が飢えて異人種の肉を啖ひ、今日の蠻族の中に尙ほ食人の俗あるは暫く別とするも、飢饉若くは災厄の時に際して人肉を食ひし例は古今東西其の例に乏しくない。唐の張巡、睢陽の城を守つて糧食に窮し、初めは鼠を捕へて之れを食ひ、鼠盡くるに至つて死人の肉を食ひ、これを食ひ盡くして終には愛妾を出して將士に食はしめたのは有名な例で、兎圖小說に天明大飢饉の際奧州八戶の惠比須屋善六の書狀を載せて「死掛り候人々の肉を切りはなし、格別うまき味なし由申候、言語道斷、

かゝる時節に遇ひ申候事、如何なることに御座候やと存ぜられ候」とある、生存の慾望、飢餓の情の爲めには人類が此の冷酷事を敢てするを見ても、此の食物の人生に偉大の關係を有するを知ることが出來る。貧の盜みに懸の歌、多くの犯罪は生活難より產み出すのである。幸に人には倫條あり道德なるものがあつて、此の動物的本能を壓へ、渴しても盜泉の水を呑まざる美しき風もあるので、同じく天明の飢饉に際し伊豫の農作兵衞は麥を枕として身の餓死を厭はず、我よし此の麥を食つて幾日を生くるとも終には死を免れず、寧ろ此の麥を遺して來年度の播種の料に供せんといふたといふやうな美談もある。飢餓交も至るの時、初めて其の人の道德的品性を見ることが出來るのであつて、人の人たる價値も亦此に存するのであるが、それは一般にいふことは出來ない。普通は飢餓の爲めには不正事を敢てするに至るが人情の弱點であるから、生活難の救濟といふことは經世に志あるもの〻看過すべからざる大問題である。

以上は唯だ生きんが爲めに食ふ上での立論であるが、人は唯だ生命を繫がん爲めの食物のみにて滿足するものではない、食ふては其の味の美ならんことを望む自然の情は、文明の進歩に從つて其の食物贅澤となり行き古今食物の變遷

の變は非常なものである、初めは自然物を自然のまゝに食せしものが、夙に火を用ふることゝなりて炙り若くは煮ることゝなり、初めは唯だ炙り煮るのみなりしもの、之れをして其の嗜好に適せしむるやうに加味することゝなり、曾ては飢を醫するに止りしものも今は快を其の間に求めんとし、取材の選擇も行はれ、調理の法も發達し、たゞ自ら食ふのみならず饗宴のことも起りて希臘羅馬の昔に於て早くも贅澤の極を盡くし、支那の古代に於ても酒池肉林の宴は張られたので、我が平安朝に於ては佛敎の感化によつて肉食こそ衰微したれ、鮮魚の調理は此の時代に於て發達し蔬菜の調味も亦大に進歩し、饗宴には珍味佳肴と誇つたものである。武家時代となつて質素の風行はれしも足利氏茗嚥に耽る頃には更に趣味ある進歩を催したのである。併し一般には尙ほ質素の風で、今から見ると殆んど隔世の感ある逸話が少なくない。市井雜談に東鑑を引きて、

山海の珍味

右大將頼朝、遠州菊川止宿の夜、佐々木盛綱が領所、越後より鮭の楚割（今いふ鹽引）を到來す、盛綱一と切試みて其の餘りを和卓に居へ小童に持たせて頼朝の旅館へ送りて曰く、只今到來によりて試みたる所、味よろしく覺え候間進上たてまつる旨言上す、頼朝淺からず、和卓の裏に、自筆を染めらる。

待ち得たる人の心もすはやりのわりなく見ゆる心ざし哉

と、右大將頼朝公が鮭の鹽引を此の如く喜んだといふ一事でも當時の食物狀態を想ひ見ることが出來るのである。志賀理齋の三省錄に、

小笠原故實聞書に、山海の珍味といふのは、蕨、梅干、水母なり、國土の菓子といふは柿栗の類なりとあり、

因にいふ、世俗年中の五節句、或は煤拂、其の外、正月三ケ日のおせちとて煮物には平日奢れる家々にても、此の料理に限り、多くは芋、葫蘿蔔、牛旁などの野菜に、田作のなまぐさをもて祝儀とするあり、これら古風の遺れるものともいひつべし、これにても山海の珍味は備はれり、

貴族なる食物

とあり、蕨、梅干、水母、を以て山海の珍味とすとは今から思へば情ない珍味でないか。今の山海の珍味は眞に山海の珍味である、德川時代に於ては菓實蔬菜丼に魚類の初つ物を尊ぶの風起りて人に先ちて之れを食ふを誇り、袷を典じて初鰹を食ふ豪放の俗は、此の頃より生じ、且つ料理を以て客の求めに應ずる業も此頃より生じ、江戸金龍山に奈良茶といふ店舗先づ現れて、茶飯、豆腐汁、煮染、煮豆などを調へて一人五匁づゝを以て求めに應じたるより當時非常に調寶がられ、次で諸種の飲食店生じ、料理茶屋、繁盛に赴き蜀山人の「一話一言」には五歩に一樓、十歩に一閣皆な飲食の店ならずといふことなしとあるほど江戸は盛んとなつたので、當時豪奢を競ふ通人が、一尾の初鰹に三十金を投じ、客に饗する茶の水を遠く多摩川の上流に求めたる等の奇談は語り傳へらるゝものが少なくないのである。さて明治となつては從來の日本料理の外に西洋料理の輸入せられ、維新前までは汚穢として食はざりし獸肉も今は平氣で食ふことゝなり、曾ては豊臣秀吉が切支丹吟味の一條として「何故に耕作に必要なる牛を食ふか」といへるは、今は日常殆ど缺くべからざるの食

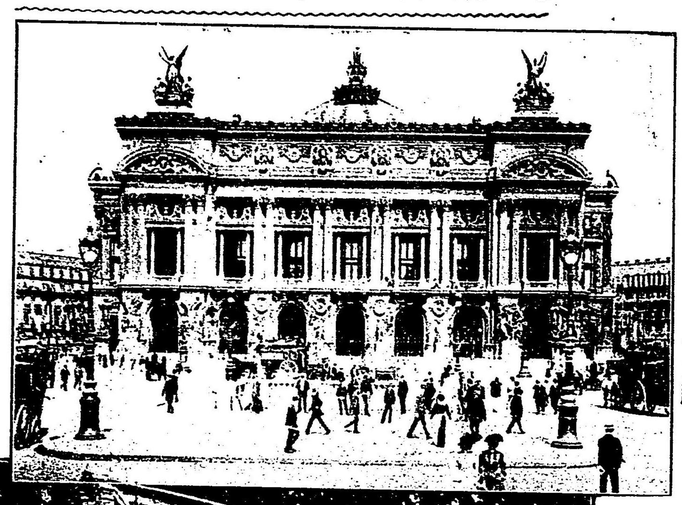
食物の本義

物と變じ取材の範圍は廣く、梅干、蕨、氷母、の類を以て滿足したりし昔とは大なる差となつた。かく食物の贅澤になり來つたことも亦生活難を招くの因で、今日にても昔流の一汁一菜に甘んずるのであつたらば、さほどの困難を感せないかも知れぬ。併し人は唯だ飢を凌ぐだけで滿足するものでないから、理屈の上から云へば澤庵禪師の

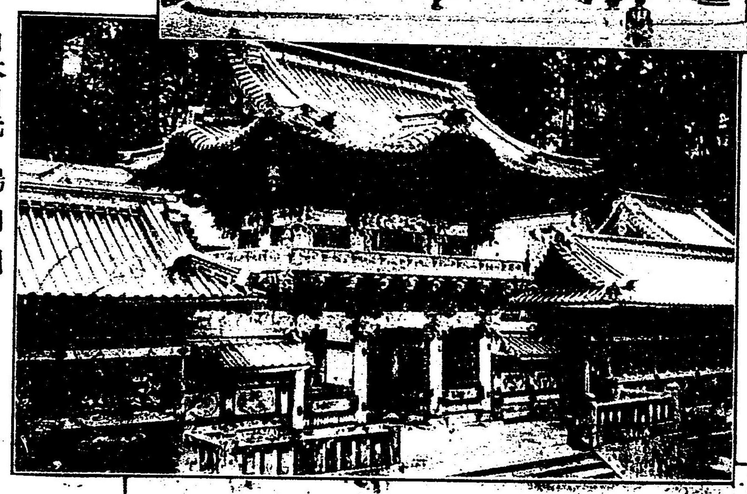
飯は何の爲めに食ふものぞや、ひだるさを止る爲めに食ふものか、ひだるくなくば食ふていらざるものか、しかるに添物なくては飯の食はれぬといふは、皆な人の僻言なり、ひだるさを止る爲めの計略なり、添物なくて食はれぬといふは飢の來らざるなり、飢來らずば一生食はざるものも濟むべし。

と云はれたのは道理であるが、人情はそれにて承知せず、食へば美ならんを欲すると共に名聞心も亦之れに伴ふので、彼の五代目尾上菊五郎が朝食に多くの副食物を並べるを見て、或る人が餘りに贅澤ならずやといふと、菊五郎は斯く多く並べたからとて實際食はれるものにあらねど、尾上菊五郎とも云

建築物の文明と野蠻



佛國巴里　グランドオペラ座



日本日光　陽明門

南亞ヅールランド土人の家屋

はるゝ役者が、あんな客な物を食うて居るかと云はれては人氣にかゝはるから、かくは並べるのであるといふ話は、確に食物に對する人情の一面を示したものである。併し此の名聞を思ふたり、美味を欲したりするのは未だ眞に生活の苦楚を嘗めたのではない、眞に飢餓に迫ると人は食ひ能ふものは何でも食ふと云ふまでに至るものである。其の本を忘れて末を苦むを戒めたのが古聖先賢の旨で、食物に對する道德はこゝに崩し、簡易生活はこゝになるのである。

第三節　住居と衣服

衣食住の三者の中、食物に次で原始的に必要なものは雨露を防ぎ猛獸を避くる爲めの住居である。或は山腹に穴を穿ち、或は樹上に巢を造つて之れに接息するので、其の稍〻發達したものは木の葉を屋根とし、木の枝を柱とし莚蓆の類を以て周圍を覆ひて、其の中に安眠を貪つたので、更に進歩して遊牧の民となるに當ては、一定の所に之れを置かずして住民と共に轉遷し得べ

家屋の變遷

き天幕を家とし、農耕時代に入つては定住の家を有するに至つたので、其の初めに於ては雨露や猛獸を防ぐに過ぎなかつたものが、外敵の侵入を防ぐことゝなつて更に堅牢の度を加へ、其の生活狀態も初めは主として戶外のみの勞働なりしものも、漸次戶內の業務も增し來り、個人個人の住宅の外に、宗教上の共同建築たる寺院、政治上の共同建築たる政廳の類も生じ、唯だ實用の外に莊嚴を喜ぶ美術思想は、次第に其の建築を華麗にし、丸木柱に葺の屋根なりし我が國も、奈良平安の朝に至りては唐制を模倣して其の美を學び、之れに我が國獨得の意匠は加へられて、公家風の家屋となり、鎌倉時代には外敵を防ぐの用を兼ねたる武家造りと混和し、室町時代となつて建築の術大に進み、今に遺れる金閣、銀閣の建築は、豪奢の風を示して居るので、唯だ雨露を防ぎ若くは外敵を防ぐといふにてはなく、床には軸を掛け、戶襖には繪畫を貼り、座敷の裝飾、書院の設備、實用以外のこと多く、上先づ範を示して下之れを學び、泰平三百年の德川時代には柳營の建築、大名の住宅、下つて町人の住ひに至るまで漸次華美の風となり來つた。されば三省錄は燈前

漫錄を引きて之れを戒めて、

家居は雨露霜雪を凌ぐ爲めなり、結構を好むべからず、大小は分限による べし、それも表向の書院、客座敷は分限相應にして內所の普請は如何にも分限より引き下げ、ともかくも用事の足るゝ程なるべし、昔は皆かくありしとなり、然るに今は表向の座敷は龕末にして狹く、內所の向は廣く結構ものずきをなすは本末輕重を失ひ、奢侈の其爲す所を見るに財あまりありてするにあらず、侯家にては家中あてがひを減じ、百姓町人より年貢諸役の外に用金と號し、金銀をしぼりとりてする普請なれば、其の作る所の家室の入用金は、皆諸人の汗泪のかゝる所なり、廣堂大厦もそのもとは皆百姓の鋤鍬の微より出るなり。むかし唐土に堯王といへる者あり、大なる築山をつかせ、宮殿を奇麗にして、臣に見せしめられしかば、姚垣といへるもの、つら〳〵見てこの血山のみといへり。又た開寶塔といへる結構なる塔をつくらしめられて普請成就せしかば、田錫といひし人書をたてまつりて、「衆以つて金碧熒煌と爲す、臣以つて塗膏霧血と爲す」といひしことあり

借屋・借室、

住居と人情

云々

といふ、こは主として其の時代の大名の邸宅に就ていふたものだが、世の進むに從ひ家屋の建築も複雜となり、食ふのみに孜々たる貧民は到底之れを造るの資を得る能はず、此の時代より借家なるもの盛んに行はれて、他の建てたる家屋を一定の賃を拂ふて借ることゝなり、文化の發達に伴ふて此の借家の數も亦增加することゝなつて、終には一軒を借る能はずして一室又は數室を借ることも都會の地には行はるゝに至つた。こゝにも生活難の面影を偲ぶことが出來る。それに人には實用以外に美を望む心のあり、名聞を好むの心もあるあり、他人も亦家屋の構造を以て其の人を品隲する傾があつて、所謂●●●

おあん物語

綿着物に、紬の帯一筋にて姿を作り嫁取振舞の時も、淺黄に散らし菊の絹の着もの繻絆の帯に、紫の革足袋に花をやりしに云々

といひ、又古老の説を擧げて

元龜の頃には高祿の武士の妻女も、乘物に乘ることなく嫁入のときも、麻のかつぎを着て負木（おひき）といふものに尻かけて後（うしろ）さまに負はれて行きけるよしとあり、「おあん物語」には

さて衣類なく、おれが十三のとき手作りの花染の帷子一つあるより外はなかりし、其の一つ帷子を十七の年まで着たるにより、脛（すね）が出て難儀にあつた、せめて脛の隱れる程の帷子一つほしやとおもふた、此やうにむかしは不自由なことでおじやつた。また晝飯など喰ふといふことは夢にもないことと、夜食といふこともなかつた、今時の若い衆は衣類の好みに心を盡くし金を費し、食物はいろ〳〵の好みことをめさるゝ沙汰の限りとて又してもとある、これは徳川初代のものであるが、それにも早や驕奢の風の見えたのは彦根の事をいふと叱りたまふ故、後には子供どもに彦根婆と云はれしと。

衣服と人情

で、元祿となつては綺羅錦繡あるがまゝの贅澤三昧に修容裝飾を施すことゝなり、其の日暮しの貧乏人も娘には惣鹿の子の衣類を着せ、髪の結び様も華美に趣き、進み進むで文化文政となり、更に明治の代となりては西洋の服裝も採用せられて、今や我が國は衣食住共に東西兩洋を併せ集めて、徳川時代に生れし老人をして彦根婆が言ひし語（ことば）を今の世に繰返さしむるに至つたのである。かく華美になるに從ひ、衣服の美を以て其の人格を推し馬子にも衣裳の諺通りにて、昨日まで馬を追ふた者も衣服さへ立派となれば他の尊敬を受くるといふ傾を生じて、恰も立派な家屋に住む時は、其人も立派なるやうに思はるゝが人情、門構の家の娘はお嬢さんと貴び、裏長屋の娘はあまつ子と卑む如く、羽織袴や洋服姿は旦那樣と崇め、腹掛姿は親方といふは外形によつて內部を推すので不都合ではあるが、致方なき人類評價の標準である。官吏に官吏の服あり、軍人に軍人の服あるも此の人情から割り出されたる自然の狀勢で、一文不知の若者も軍服を着すれば、何處（どこ）となく威嚴の備はり、浴衣姿では尊敬の情も起らぬが、警官の服を着すれば敬意の湧くは人情である。

それと共に居は氣を移し、衣は心を改めしむるので、四疊半の下宿に居る時の心持と、百疊敷の大廣間に居る時と其の氣分の異るが如く、浴衣一枚の時と禮服着用の時とは其の心持が同じくない。自分も其の積りで居れば、他も亦其の積りで見る人情は實に奇態なものである。若し此の住居や衣服の爲めに心を變せず陋巷にあつて其の樂みを改めざる古聖や、一狐裘三十年の先賢は、大に貴ぶべきものと云はねばなりぬ。「燈前漫錄」には衣服に對する訓誡を垂れている。

衣服というものは元來寒暑を防ぎ、膚を現はさぬを以て禮とするものなり惡くとも寒暑をだに凌ぎたらばすむことなり、常服は何程も分限よりも下げても苦からず、表向の衣服は分限相應なるべし、孔子も禹王を賞したまひて衣服を惡うして美を黻冕に致すとのたまへり、これは禹王の常服をあしくして、表向の禮服を屹ときらびやかにしたまひしことなり、禹王は天下の主にましませば、常服たりとも美麗にしたまへばとて分限に過たるとは云ふべからず、然るに常服をば殊の外ひき下げあしきものを着したまひしとなり。況んや諸侯より以下をや、およそ大丈夫たるものは貴賤によらず衣服の美惡などに心を用るは其の心の向ふ所賤しきなり、左樣の心にては大事を任ずることは成りがたし、たゝ道を求るに專なるべし、何事にても、之れに專なれば、彼れに疎く、彼れに詳なれば之れを略さずしては叶はざることなり。孔子も「士、道に志して惡衣惡食を恥るものは與に議るに足らず」といましめたまへり、然るに諸侯の世子などは、初め奥向きにて女中の手に育ちたまふ故に衣服のよしあしに目を付け、其の好みなども女中めき、或はざればみたる模樣又は流行などの好みあるは、大につたなきこととなり、これ畢竟は其の初め婦人の手に育ちたまふ弊なり、殊に高貴の方の小兒は年の程よりくすみたる衣服おとなしやかにて、其の家風も厚く奥床しく見ゆるものなり、時のはやり模樣ざればみたるは賤く、其の家風も何となく見おとさるゝものなり、婦人は小兒のあでやかなるを愛し、はなやかなるを好みて男子をも女子か又は芝居役者などいふ賤きものゝやうにこしらえなすは見る目も恥しきことなり

と、此の訓誡は今も尚ほ應用せらるゝではないか、衣服の用は防寒と禮義とにありて裝飾は寧ろ其の次ぎといふべし、身分相應なるこそよけれといふべきで、身分を思はず、徒らに華美を競ふて、吾から生活難を招くは慨くべき次第である。

第四節　金錢と人情

金錢と生活

個人が自ら自己の要する衣食住を自ら供給したのは太古のことで、文化漸く開くるに至つては有無相通じ、衣を供するものは食を他に求め、食を供するものは又住を他に求むることゝなり、其の交換も初めは直接に物と物との交換なりしも、終には媒介物を造りて布帛牛羊若くは貝殻を以て之れに充てたるも、其の分割し難く若くは運搬し難きの不便を感ずるや、こゝに通貨なるものを定めて交換の媒と爲すに至り、金錢は一切の需要を充たす最必要の具となり、其の衣も食も住も皆な此の媒介を待つにあらざれば得難き現時の社會となつては、人類生活に直接必須のものは實に金錢となり、此の金錢だにあらば如何なる美食も貪り得べく、如何なる華麗の服をも經ふべく、如何なる宏壯の住宅をも築くべきを以て、金錢は一切の幸福を産み出す母の如くに目せらるゝこととなつた。彼の營々として働くもの、孜々として動くもの、其の目的とする所は實に此の金錢にあるので、之れあるものは貴ばれ、之れなきものは賤まる。まことに金がはんとて齷齪して居るのである。人は此の金によつて自己の慾望を達し、又此の金によつて他に誇るの生活を營み得べきで、慾望に限りなき人類の金を求め、他に誇らんとする名聞心ある人類の金を得んとするは免れ難き人情である。併し我が國の昔の組織は餘程面白く出來て居つて此の人情の赴く所を融和して居つたやうに思はれる。即ち前にもいふた如く我が國――殊に德川時代にあつては、富めるもの必ずしも貴からず、貧なるもの必ずしも賤められなかつたので、公家と大名とは何れを貴しとするかといへば、云ふまでもなく爵位は公家の方が上であつたが、富力は大名に及ばず、武士と町人といづれを賤しとするかといへば、これ又云ふまでもなく町人で

社會制度と金錢

金錢萬能

あつたが、其の富の點に於て町人の武士に優るものあつたのは頗る多い。富に於て優るとも貴ばれず、富に於て劣るとも賤められなかつたから武士は食はねど高楊枝で、金錢のことを口にするを恥としたのであるが、今は其の階級全く打破せられて、金さへあれば町人も大名の眞似をすることの出來る世の中になつたのだから、人が皆な金錢に齷齪するのは是非なき社會狀態である。曾て金錢に對する古今の人情を叙して、左の如く云ふたことがある。

昔は武士は食はねど高楊枝などゝ云つて、金錢利慾を卑んだものである。伊達公であつたか、或る時、慶長小判の、實に眩ぶしいやうなのを、諸大名に示した。一座廻りまはつて、直江山城守の處に行つたとき山城守は、これを扇面に受けて眺めた。山城守は上杉の臣で即ち陪臣の身であるから遠慮して然うすると思つて、御遠慮なく、お手に取つて御覽なされと云はれたに對し、曰く、吾が手は、事あるに臨んでは、千軍萬馬の裡に立ち、軍配を振つて指揮すべきもの、苟も金などを取ること、尤も汚れであると。

極端ではあるが、昔は如何に拜金主義で無かつたかを想像が出來よう。また日本人は、支那人の白髮三千丈など、無暗に大きなことを言ふを好むに反し、優にやさしき心を持つて物を見る風があつて、彼の有名な石川丈山の詩の、白扇倒懸東海天といへる、富士山の見やうの如きは、最もよくこの風を表はして居る。今の世の人の見やうは如何か。海拔何千メートルといふ風に、凡て物質的に見ねば承知が出來ない。今の世は斯くの如く物質的で、實際また金は大事な世の中と成つて居る。昔では、武士のみに限らず。一般平民でも今の世ほど物質的ではなかつたのである。

柳里恭の書いた、雲萍雜誌の中に、京都に有名な大佛餅を賣る者があつた。一日一人の乞食が、その餅を買ひに行つた。主人頭から貴樣には賣らぬと怒鳴ると、乞食は不平だ。何もたゞ呉れといふぢやなし、代價を拂つて商ふものを買ふのに、賣らぬといふ方があるかと理窟をいふ。主人重ねて怒鳴つて曰く、貴樣はそれだから一生乞食するんだ、考へて見よ、吾家の餅は、諸方貴き方々のお口にも召して貰ふ品だ。乞食風情に賣つたとあ

つては商買の汚れになる。貴樣が眞に吾家の餅を買ひたいならば、立派な一人前の眞人間に成つて買ひにくるが可いと、遂に賣らなかつた。洪園は之れを商人の見識として讃めて居る。今の世に於ては如何うか。金さへ貰へば、乞食でも非人でもかまはない。金にさへなれば何でも可いといふ風ではないか。それが都會に於ては殊に甚しい。

全體、人の上下尊卑といふことは、今日の世では、何を以て區別して居るか。曰く金を有することの多少によるのみ。自働車を馳らせ、二頭馬車を驅るものが豪らい。果してえらいか如何か。兎に角豪らいものと今日の世の相場が定つて居る。下宿屋に居たつても、その人の良不良などは問ふ所でない。一に金の使ひ方の多少によりてその待遇を異にする。百般の事、如何に金の力に支配せられつゝあるかは、吾輩の呶々を俟つて始めて知るべきでない。而して凡ての所謂誘惑なるものは、殆どこの金の勢力が源泉をなして居ると云つても可い。

現代の社會は金さへあれば何でも出來る世の中、現代の人は金になることなれば何事をも辭せぬといふ有樣である。若し法律の制裁する所がなかつたら、人は他の物をも强奪し兼ねまじき狀態である。否、此の法律の網の目を潜つて私利を貪る傾向は幾多の裁判事件や、新聞記事で明かであるが、幸に之れを制止する所の社會制裁といふものがある、金を得ても人に惡く云はるゝを避けんとする人情は、其の甚しきを止めて居るのであるが、若し此の法律もなく、社會制裁もなかつたらば、人は利の爲めに走りて底止する所を知らないであらう。されば富貴の門には來客多く、貧賤の家には訪ふもの少く、利のある所に集ること蟻の甘に就く如きが人情で、彼の杜甫が、

翻手作雲覆手雨　紛々輕薄何須數
君不見管鮑貧時交　此道今人棄如土

といへるは、昔も今もかはらぬ人心である。

落ちぶれて袖に涙のかゝる時
人の心の奥ぞ知らるゝ

金錢によつて人情の眞價を見ることが出來るのである。併し之れは餘り人情

を悲觀したので、人の心は斯く冷かなる方面ばかりではない、弱きを助け貧しきを憐む美しき情もある。

「假名世說」に

京都五條の邊に、風之翁といへるあり、この翁曰く、人情は通じがたきものなり、僅か五金十金の事にて死なねばならぬといへるも、實の事として力の及ぶだけは、合力もすまじきものにもあらねど、其のやうなる手を以て人の金銀をかたりとる者もあれば、又そのたぐひかと思ひて、取あはぬもの世の中に多し、されども其の者實の事にていよ〳〵たゝぬ義理にて、死しなどすればさては實のことにてありつるよと、初めて驚き、かゝる事ともしらば貸すべきものをと思ふは、誰れしも同じことなるべし

と、人情は錯綜、美しき情もあれば、之れを掩ふ貪もあり、瞋もあり、痴もあり、慢もあり、疑もある。此の貪、瞋、痴、慢、疑は人情の汚點で、利に走りて飽くことなきは貪、利になることをも腹立ちて棄つるは瞋、僅かの財を吝みて後に悔ゆるは痴、財を散じて他に誇らんとするは慢、此の假名世說

に擧げたるは疑である。此の五のものを敵として戰ふ同情の念もあるのであるから、一概に論定することは出來ないが、一般の傾向は利に走る心と、人に惡く云はれまじといふ二つの混淆に出て寬和せられて居るのである。其の爲めに財を吝むこと甚しきものも、守錢奴と云はれ、吝嗇漢と云はるゝを避くる爲めには心ならぬ金を費し、自己の欲望に汲々たるものも時に他の爲めに財を散ず。眞面目なるが如くにして豈に此の眞面目なる生活を遂げ得んや。唯だ達人能く達觀して、金錢に對する道を教ゆ、佛源禪師曰く

君子は財を吝むと雖れを用ふるに道あればなり

之れを用ふるに道あるが故に財を吝む、他の毀譽何かあらん、よし吝嗇漢と呼び、守錢奴と云ふとも、用ふべからざるに用ひず、其の用ふべきに當ては何の吝む所なく、一切を擧ぐるも辭する所にあらず、これ眞に能く金錢を活用するものと云ふべきである。眼を此の向上一段の所に着く、金錢に對する道は、快刀亂麻を絕つ如くに通ずるのである、夢の如き一生、徒らに財を積

守錢奴と濫費者

んで何かせん、シェクスピヤア曾て守錢奴を罵つていふ、

汝、富むと雖も貧しきに同じ、譬へば金塊を負ひたる驢馬の如し、汝は唯だ一旅行なるに重き富を負ふ、汝の重荷を卸すは唯だ死あるのみ

と、ジョン、ラボック、濫費者を責めていふ、

「貧乏神が戸内に入り來れば愛の神は窓外に遁れ去る」とは卑劣なる諺の如きも、今、眼前に妻子が衣食に究し、醫癒を缺き、休養する能はざる狀を見、願みて、若し己れにして相當に働きしならんには、又若し己れにして不必要なる嗜慾を禁じたりしならんには、彼等にかゝる苦痛を懸けざりしならんと思ひ至る其の悲みや幾許ぞや

と、金錢は生活の主要物たり、之れに對する覺悟如何で其の生活を樂しくするか苦くするかゞ分れるのである。

第二章　生活と世態人情

第一節　家族生活

直系親族

人は決して單獨に生活するものではない。已に男あり、女あり、先づ夫婦の關係を生じ、夫婦關係自然の結果として親子の關係を生じ、叔姪の關係を生じ、漸次網狀形に廣められて、血は終に水の如くに薄らぎ行けど、其の古に遡れば互に同じ血の繋り合ふて居るのである。併し今は遠く人種の源を語り、民族の祖を論ずるのではない、近く吾等の日常生活に於ても、血の濃きものは常に接近して家族を形成して居るので、彝倫道德の教は此に萌し、國家社會の基礎も此に立つのである、蓋し社會の上より見れば夫婦は人倫の始であるが、個人の歷史より いへば其の最も初めに接するは親子の關係である、身體髮膚之れを父母に受く、吾等が今日の生存は一に父母の賜である。父母あるが故に我あり、父母なければ我あることなし、父母は實に我が本、而して父母の本は祖父母にあり、祖父母の本は曾祖父母にあり、之れを直系尊屬親といふ。而して我れあつて我が子あり、我が子あつて孫あり、孫あつて曾孫あり、之れを直系卑屬親といふ。其他父母に兄弟あり、傍系此に生じ、我れには伯叔父母たり、伯

傍系血統

叔父母の子、我れには從兄弟たり、此の如きを傍系血族とす。此の如く血の相續くにあらずして、我れより血族の本を爲すを夫婦の關係とす。夫婦は我れに於て血系あるにあらざるも、我が子より見れば離るべからざる血族關係を有する父母となり、其の父母の尊卑兩血系は子に於ては又離るべからざる親族となる、これらを姻屬といふ、かく血族に直系傍系あり、加ふるに姻屬のあるあつて我れを中心として本より本を尋ね、傍より傍を求めて行けば終に窮極する所がない。此に於て我が民法に於ては血族に於ては六等親、姻屬に於ては三等親までを親族關係と認む、即ち直系尊屬には父母、祖父母、高祖父母、五世の祖、六世の祖を限りとし、直系卑屬には子、孫、曾孫、玄孫、來孫、昆孫を限り、傍系は父母を一等親として算し。

法律上の親族

二等親　兄弟
三等親　伯叔父母、甥姪
四等親　從祖々父母、從兄弟
五等親　曾祖父母の兄弟、從祖伯叔父母
六等親　高祖父母の兄弟、曾祖父母兄弟の子

扶養の義務

とし、姻屬は

一等親　配偶者の父母、前夫前妻の子
二等親　同祖父母、孫、配偶者の兄弟
三等親　同曾祖父母、同伯叔父母、曾孫、配偶者の兄弟の子

等とする、併し之れは限度を示したもので、實際同時代に此の如く悉く生存するといふことはなく、且つ一家の內に生活するといふことはない、其の一家の內に生活するのは、古の所謂六親九族位である。六親とは父母、兄弟、妻子で、九族とは、高祖、曾祖、祖父、己、子孫、曾孫、玄孫である。民法で其の自己の資產又は勞務によりて生活を爲し得ざる場合、又は自己の資產によつて敎育を受け得ざる場合に親族者に扶養の義務ありとしたのは、直系血族の相互、配偶者相互、兄弟相互等で、人倫道德も亦此の父母に孝に、兄弟に友に、夫婦相和する上に立つ。蓋しこれらは一面に道德の規定たると共に又一面は自然の情で、燒野の雉子、夜の鶴、子を思はぬ親やあるべき、殊

生活と世態人情

に人の親たるもの丶子を思ふの至情は、彼の稅所篤子が佛說父母の十恩を咏じたるにて想ひ見るべきである。

懷胎守護
唯しばし露をやどせる草の葉も
おきふしやすきものとかは見る

臨產受苦
いき死の海の波間をわけてこそ
この白玉はかづきあげしか

生子忘憂
うぐひすの谷のま出る一聲に
こその寒さは忘れはてつゝ

嚥苦吐甘
山がらす軒の雀も朝夕に
おのが爲めにはあさらぬものを

回乾就溫
思ひ子の濕るゝをおしみとこの海に
我が身はうきてねぬよはもなし

乳哺養育
たらちねのほとちにかけて繫がずば
たまのをことはねも絕なまじ

洗濯不淨
子の爲に洗ふつゝりのいとまふみ
つゝるのもとに立たぬ日もなし

遠行憶念
峯つゞき花より花に遊びけり
まつらむおやの心しらずに

爲造惡業
子を思ふ關こそやがて後の世の

くらきに迷ふしるべなりけれ

究竟憐愍

世を救ふ三世の佛の心にも
　似たるはおやの心なりけり

父母の子を思ふ此の如し、此の爲めには名譽財産も抛つて惜む所のない例は古今に乏しくない。鳩翁道話に親の意見も空吹く風と聞き流し、先祖傳來の財産を湯水の如くに使ふ放蕩無頼の子を、親類緣者が斯くては家の爲めにならじと勸當を勸めた時、母親は「伜の爲めに家を失ひ、馴染んだ村を立ち退いて、夫婦袖乞になるとも我が子の尻からついて歩行たら、わしは本望に思ひます、五十年以來、一生に一度の願ひ、ドウゾ聞き入れて勸當をやめて下されい子故に乞食すると思へば恨にはおもひませぬ」と聲をあげて泣き、父親は、「さてさて一家中へ對して面目ない事でござれども、今ばゞがいふ所、尤に思ひますまい、かういへば其の甘い心で育てたものゆゑ、あの樣な不孝ものが出來たと定めておまへ方は笑はつしやらう

が、笑はれても苦しうござらぬ、勿論アノ伜を勸當せねば此家が潰れる事は、物三年まちはすまい、わが子故に先祖代々の家を野原にするのは、先祖に對してすまぬといふことも、能う合點と不付合となり、親類義絕も合點でござる、（中略）世間の義理も、先祖への不孝も親類の義理も顧ぬのは子が可愛ばかり、其の子の尻から乞食して付てあるくことなれば此方等夫婦の本望といふもの、ハテ何で死ぬるも一生ぢや、可愛い子の爲めに大道にのたれ死、並木のこやしになるのも好んですれば恨とは存せぬ」といふたといふ話が載せてある。父母が子に對する至情は此の一話にも現れて居る、石田梅巖の道歌に

子にまよふ親の心を見るにつけ
　我がかぞいろもかくやありなん

で、骨肉の愛は此に存する、「艷姿女舞衣」に、半七の父半兵衛に對するお園の父宗岸の述懷は又實に能く親子の愛を描いたものである。

思へば〳〵不孝者よい時に勸當さつしやつて親に難儀のかゝらぬは未だ此上

の仕合せと思ふたは他人の了簡、違ふは此方の縛り縄咎極つた牢七が命、一日なりと延したいと人殺しの科を身に引き受け、縄掛つた此方の心は、眞實心に子を思ふ親の誠と知れば知る程、宗岸が仕損ひ、牢七の身の難儀、此方も勘當して仕舞、われも娘を取戻したら親にかゝる首縄もない、よい事をしたと世間から譽る人もあらうが、親となり舅となるが、大抵深い縁かいのう、かういふ仕義になつたときに譽められるゝより笑はるゝが親の慈悲、片時も早うと連れて來た心はの、一旦嫁に遣したれば、牢七が厭がるなら、ハテ尼にしてなと内で、御夫婦の亡き後の、香花なりとも取らして下され、これ手を合して頼みます、詫言が叶はねば引き放されたとつき詰めて、短慮な心も出し居かと、案じ過して夜の目も合ず、母親はなし、誰だ一人、彼奴を思ふおれが因果、此方の縄目も牢七が科人になつたら、猶ほ可愛かろ譬ひ又勘當が定でも、久離切つたが誠でも、眞實親子の肉縁は、切るに切られぬ血筋の親、おれも此方程にはなけれども、娘は可愛い、まして勘當はせぬ娘、愚痴なと人が笑はうが、おれや可愛い不便でござる。

親の子に對する情、實に此の如きものである。

若し夫れ

去られても闇に見に行く幟かな

の母親の心、雲井龍雄の棄兒行の

斯身飢斯兒不育　斯兒不棄斯身飢
捨是耶不捨非耶　人間恩愛斯心迷
哀愛不禁無情淚　復弄兒顏多苦思
兒今無命伴黃泉　兒今有命斯心知
焦心頻屬良家救　欲去不忍別離悲
橋畔忽驚行人語　殘月一聲杜鵑啼

といへる父親の情讀んで淚なきを得ざるは、實に人情の至美を描き出して居るからである。親に此の情あり、子も亦親を思ふ。

親思ふ心にまさる親心　今日の音信如何に聞くらむ　（吉田松陰）

人倫の道徳も之れより出で、法律が相互に扶養の義務あるを規定せるも亦此に由る。兄弟の愛に至ては少しく其の趣を異にすれど、其の切つても切れぬ骨肉たるに於てや一、然れども其の親子の如くに親しからざるは父母を中心として繋がれたる二等親たるに由れど、幼時より相共に嬉戯し、相共に育養せられたる親しみは一生を通じて思ひ出多きものである。

埋火のあたりのどかに兄弟の

まどゐせし夜ぞ戀しかりける　（定家）

況してや、双親已に去りて頼るべきなく、身は浮世の辛酸嘗め盡くして、生活の苦闘に耐ゆる時、相頼むべきは骨肉の情あるのみで、詩經に

兄弟牆に鬩ぐも、外、其の侮を禦ぐ、良朋ありと雖も、丞に戎るなし

といへるは、親は泣寄りの人情を寫したものである。兄弟に友なるべき道徳も此の人情あつて行はれ、相互扶養の義務も之れによつて力強いのである。夫婦のことは後にいふべき機會あれば、此に略するが、夫の婦を愛し、婦の夫を愛するも亦た之れ至情、人に此の親子、兄弟、夫婦、の愛情あり、かくて一人の生産者は能く老いて勞役に耐えざる父母、幼にして未だ生産の力なき子弟、幷に自己の配偶者の消費を供して一家團欒、夕顔棚の下涼、爐邊のまどひに平安なる家族生活を送るべきであるが、世は此の如く單純ならず、人情も亦此の如くに美しきのみならず、人には自己中心の情あり、自己の生存を中心として老幼に及び、自己の滿足を根本として他に及ぼすの羨しからぬ心あるが故に、父母の子を物品視するあれば、子の父母を厄介扱するあり兄は弟を排し、弟は兄を却けんとし家庭の不和、親族利益上の爭ひは世上に幾多の醜聞を傳ふることゝなるのである。親しかるべき血屬の間さへ利害の爲めには此の如き衝突を免れざるに、配偶者間に於てこそ切り難き關係あれ其の他に於ては何の關係もなき他人の加はるに當りて、利害の爲めに紛擾を生ずるは、殆んど吾等が耳に慣されたる常套事である。即ち之れまでは子の愛を一身に受けし母の、嫁の來りし爲めに其の愛を奪はるゝを思ふ偏執は、

嫁いぢりとなり、

伜の嫁と鰹節とは氣にかゝる

小いものは嫁の持て來た茶碗、長いもの姑の爪
嫁と姑とは犬と猿
末長くいびる杯姑さし
願くば家の死水とる氣なり

等の俚諺や川柳の決して誇張でなきを思はしめる。これはもとより愛に對する姨姑ばかりでなく、新舊思想の衝突もあるので、老人は自己の經驗を以て年少を律せんとし、年少は其の自由の意志によりて老人に反抗し、姑が十八歳の昔を繰返せば、嫁は舊弊と誹り、時代遲れと笑ふ。加ふるに家々に其の家風ありて姑の家と嫁の家と必ずしも一致するものにあらず。姑の心、嫁には量られず、嫁の爲る事、姑に解らず、其の間意思の疏通を缺き、偏執をして益々甚しからしむるを免れぬ。嫁と小姑との關係も亦此の如く、配偶者のなかりし昔は、兄妹は互に相愛せしもの、我れより親しき配偶者の出來て我が愛のそれに奪はるゝを思ひ、血屬たる母と一致して嫁に當るも其の例に乏しからず、「小姑一人は鬼千匹にむかふ」なぞとの俚諺を現實に感せしめる。更

に他の血屬ならぬ關係を見れば、繼母(若くは繼父)と繼子との關係、男即ち父の方は主として外にあれば、さまでの感なかるべきも、常に其の子女と家にある繼母と繼子との關係は、暖かきもの稀れにして、親には繼母氣質(ままはゝかたぎ)あり、子には繼子根性(ままこんじやう)ありて、子は親に親しまず、親は子をいとしがらず、それも實子の未だなき中は、さまでにもあらねど、實子の生ずるに至ては、實の子を愛して繼子を疎んずるは自然の人情、其の爲めに家庭の不和親族利益上の爭ひを現出したるは稗史小說に見得るのみならず、世間日常の事實に徵して見易きことである。予が曾て「修養論」に於て擧げたる大罪と云はるゝ謀殺故殺の原因は、常に此の家庭の不和親族利益上の爭ひの多數を占むるは、驚くべき事實にして、しかも亦人情の缺點を見得べきものである。即ち、

因由	男	女
貪欲	三	四
姦通	一二	七
夫戀姨姤放蕩	一四六	三　一五
計		九　一五五

家庭の不和と犯罪

怨恨執仇　一四八
家内不和親族　七五　一五三
利益上の爭　一〇六　一八一
種々の因由　五三　一二　六五
因由不詳　一　〇　一

而して放火の因由に於ては、此の如く甚しからざるも、總數四百人の中、三十二人は此の家庭の不和に因し、自殺の原因も、總計九千六百人の中其の約半數たる四千百七十七人の精神錯亂者を除き、其の次ぎに多數なるものは病苦による一千八百三十五人、活計の困窮に由る一千〇十七人、痴情又は嫉妬による四百八十五人にして、之れに次ぐものは親族の不和なる三百三十八人と緣談上の困難に因する二百九十七人である。此の家族生活の狀態が如何に社會に影響するかを推すことが出來る。抑も是等親しかるべき家族に、此の如き忌はしき現象を生ずるは何故かといふに、古人が犬が中よく遊んで居る時、肴のあたまを一つ投げてやると、俄に牙をむいていがみ合ふ

といふた如く、利害の問題、頭上に下る時は人は此の親しみを忘れて、呑噬を逞うするので、其の基く所を尋ぬれば人情の醜方面たる貪欲、瞋恚、恐痴、慢心、疑心の五に基き、佛敎の謂ふ所の煩惱も此の五に綜括することが出來得るのである。此の五は常に我が心の上にあるのであるが、小範圍なる家庭に於ては一人自己の慾を擅にせんとせば、勢ひ他の慾を制せしめざるを得ず。一人我執を主とすれば勢ひ他と衝突せざるを得ない。昔に於ては家長其の權を弄して、家族は奴隷の如く之れに服從し、子女は時に物品の如く取扱はれた時代もあるのであるが、今は個人の權利の認められた世の中であるから、古の如く家族は家長の犧牲となるといふやうな弊風はない代りに、一家の秩序を保維する上に於て困難なきを得ない。幸に倫常の敎ありて之れを融和するも、情の趨る所は時に此の倫常を無視して此の五つの汚らはしき心の爲めに苦めらるゝを免れない。併し親は泣きより、血は水よりも濃し、よし血族ならずとも、夫婦の間に子の生じては、憎い嫁の產んだ可愛い孫となつて其の爲めに感情の融和せらるゝこともあり、同棲の久しき中には人類の美所たる

人情の美所

同情も加はるもので、此の同情は實に家庭道徳の淵源で家族生活を圓滿にするは此の二字の外はない。之れあつて血屬の親を增すは云ふまでもなく、血屬ならぬ舅姑と嫁との間も、此の爲めに親しみを生ずるもので、昔話に、仲の惡い嫁が姑を殺さんとして醫者に毒藥の調合を賴んだ時、醫者此の藥は喜んだ時に呑まさねば功能がない、何うせ殺すのなら一と月ばかりは如何なる無理でも、唯だハイ〳〵と答へて、少しも反抗はぬやうにさつしやれ、かくて姑の心おさまりし時に用ひられよとて、毒ともならぬ藥を與へしに、嫁はそれと知らずに、今に毒を呑ましてやると覺悟して、何事をいふても反抗はず、ハイ〳〵と從順にして居るほどに、姑は嫁の生れ代つたやうな仕打に心解け、終には一にも嫁、二にも嫁と愛しがるに、一と月ばかり經て嫁は醫者の家に行て、あのやうな優しいお方を何故殺さうなぞと思ふたのでござんしよう、もう〳〵此御藥は用りませぬといふてそれから仲善く暮したといふのがある。或は道學者流の作り話であらうが、打てば響く人心の秘奥の同情によつて、其の上を覆ふた貪嗔痴慢疑の心の闇の去られたのである。性は善なる人心、此の心を以て人を動かすことの出來ぬことはない。

憂きことに慣れて雪間の嫁菜かな

同情の心さへ持ち續けて行けば、何時かは花さく春に遇ふことが出來るのである、家族生活を圓滿ならしむるの訣、此の同情より善きはない。老は少に同情し少は老に同情し、相互に我執を去るの時、頑固な氷の春風に溶けて、能く方圓の器に從ふ水となる如く、一家は打して一丸となり、互に其の身を思ふ如くに其家を思ひ、賤が伏屋の詫住居も、そこには胎蕩たる春風の吹くあり、金殿玉樓、富、巨萬を積むと雖も、互に相貪り、相瞋り、相疑ひたらんには秋風淅瀝たる悲境を現出せざるを得ない。思へ、一椀の粥も親子兄弟互に相分ちて食ふ中に人の心の美しさは宿り、數萬の財産も、親子兄弟を爭ふに至て其の淺ましさを見るべきではないか。社會は生活の戰場、家庭は人生の休養場である。之れを慰安の樂園たらしむると紛擾の修羅場たらしむるとは家庭を組織する人々の心に存する。

以上は家族其者幷にそれを組織する人々の心持に就ていふたのであるが、

更に其の生活狀態に於ては、多くの家庭は戸主を生產者として他は非生產者にして、一人の生產によつて衣食するの狀態であるが、中には夫婦共稼ぎもあり、子女をも勞動せしむる所もあり、これらは職業の差異、資產の多寡、社會的地位等に關係するので、後にいふべき時あれば此には略する。

第二節　國民生活

國家の統治

文明國民は皆な何れかの國家に課屬し、其の國家によつて生命、財產、自由を保護せられて生活して居るので、吾等は家族の一員たると共に亦國家の一員である。既に國家の一員たる以上は國家の統治權に服從して相互の秩序と安寧とを保維せねばならぬ。統治權とは國家が國民に對し命令し强制すべき權利にして最高無上の力を其の國民の上に有す。昔は此の大權を以て獨り君主の專有に屬し、國民は唯だこれに服從するのみにて何の異議をも挿むことが出來なかつたが、十七世紀の頃から西洋に於て人民の權利漸く擴張し來り、民主の說頭を擡げ、終に憲法なる根本法を定めて君主の權利を制限して

人民の權利を伸張するに至り、こゝに古の面影を其のまゝに遺せる君主專制政體、之れに全然反對せる民主共和政體、其の間にあつて最も穩健なる立憲君主政體等の區別を生じ、各國其の歷史を異にするが如く、其の政體も亦同じくないが、歷史あり勢力ある現時の文明諸國は主として此の立憲君主政體を採用し、專制君主國に於ける君主權、民主共和國に於ける民主權の極端に走るの弊を矯め、君主、貴族、富豪、平民等の權勢を調和して共に俱に國家の一員として義務を負ひ權利を行はしめんとして居るのである。殊に我が國は萬國無比の國體に基き、神聖にして侵すべからざる天皇を戴き、其の天皇より惠與せられたる憲法によりて此の政體の下に置かれて居るので、即ち憲法の保障により、

一　居所移轉の自由（憲法二十二條）
二　身體の自由（同　二十三條）
三　住所の侵されざる（同　二十五條）
四　信書の秘密の侵されざる（同　二十六條）

臣民の權利

五　財産の侵されざる　（同　二十七條）
六　信教の自由　（同　二十八條）
七　言論出版の自由　（同　二十九條）
八　集會結社の自由　（同　　條）
九　請願の自由　（同　三十條）

の權利を有するので、此の中には法律にあらざれば侵し得ざるものと、命令を以てするも特別の理由ある以上は制限し得るものとあるが、兎に角法律の制限の下に自由を得て居るのである。其他憲法二十四條によりて我が臣民は法律に定めたる裁判官の裁判を受くることを請求するを得、且つ憲法十九條により日本臣民は法律命令の定むる所の資格に應じて門閥血統の如何を問はず均しく文武官及び其他の公務に就くことを得、尚ほ又憲法三十五條の規定により衆議院は選擧法の定むる所によりて公選せられたる議員を以て組織するが故に、日本國民は選擧法の規定に從ひ議員を選擧するの權を有するのである。而して法律の制定改廢幷に國家歳出入の豫算は議會の議決を俟たざるべからざるを以て、國民は悉く國家の一員として其の休戚を負擔せざるべからざること明になつたのである。されば國民は一切の法律に服從せざるべからざるは云ふまでもなく、國家の兵役と納稅の二大義務を行ふことを忘れてはならぬのである。かくて國家は法律を定むる立法、之れを實施する行政、背反者に制裁を與ふる司法の三作用を以て國民を統治し、國民は其の統治の下にあつて安らけく生活して居るので、吾等の安らけく生活し得る所以のものは全く國家組織の恩惠であるを思へば、此の國家をして向上發展せしむるも亦國民として吾等の忘るべからざる務である。唯だ法律命令に服從するのみが國民の義務ではない。國土内にある外國人も其の法律命令に服從せざるべからざるは一であるが、國民としては更に法律よりも根強き道德的觀念を以て此の國家を擁護し此の國家の發展を希圖する思想がなければならぬ。國民にして此の觀念あり此の希圖あつて國家の基礎は强固となるので、古來の志士仁人が一身を犧牲に供して君國の爲めに盡くしたのは皆な此の至情に出るので、此の心は實に國家結合の根底となるものである。殊に我が國は永き歴史と特

國民の義務

國民精神

殊の國體とを保ち來つたのであるから、國民の心裡に一日も此の心を失つてはならぬ。否、此の心も亦人の至情から出て居るので、其の君を思ひ、其の國土を愛するも亦人の心の美しき所である。

何事のおはしますかは知らねども
辱じけなさに涙こぼるゝ

これ實に我が國民の　皇室に對する至情で、神に對する心を以て　皇室に對し、崇敬の念、他の窺ひ知るべからざるものがある。此の心は以て國體の擁護となり、義勇奉公の志となる。況んや建國以來未だ曾て侵略を蒙らざる國民の誇りあり、雲に秀づる富士の山、一碧拭ふが如き琵琶の湖、天然の風景の愛國の心を養ふものあるをや。殊に況んや君民同祖にして萬民悉く神の御裔たる血族關係の其の情を濃かならしむるあるをや。蓋し血族相親むは人情にして自己の國土を愛着するも亦人情、而して其の歴史を誇るも人の心の自然なれば、何れの國民も此の愛國の誠なきはない。英國人ジョンラボックは

若し曾て人の誇りて、之れが爲めに働くべき國ありとせば、確にそは吾等の國なり、

於戲、英國なる哉、汝が沈勇の模範、猶ほ雄圖を有する小軀の如し、其の廣袤を云はゞ洋上の一點のみ、されど猥茫たる洋海に馭る船の過半は英國の旗を飜し居れり

と、更にシエクスピヤーの

此の帝笏持てる島、いとも尊き此の地、軍神の在す此の地、エデンならぬエデン、半ばこれ樂園、此の幸多き民、此の小世界、幸少き地よりの猜みに對し、家に對する壁の如く、又濠の如く防禦の用を爲す銀海に置かれたる寶石

といへる語を引きて其の國を讃美して居る。其の國の風土、其の國史の人物皆其の國を讃美するの料となり、愛國の心を養ふの資となる。ナポレオンあるは佛國の誇りにして、ネルソンを有するは英國民の誇、羅馬の歴史は伊太利人の血を湧かし、アルプスの雪は瑞西人の心を清くす。ライン河畔の秋色

には獨逸人の懐郷の心を動かし、孔子あるを以て支那は榮とす、彼の頼山陽が

花にあくる　春の三芳野
見しならば　もろこし人も
こまひとも　やまと心に
なりぬべし

と謳ふたのは、我が風景の誇りにして、藤田東湖が、

天地正大氣。粹然鍾神州。秀爲不二嶽。巍々聳千秋。注爲大瀛水。
洋々環八州。發爲萬朶櫻。衆芳難與儔。凝爲百錬鐵。鋭利可斷�organ。
蓋臣皆熊羆。武夫悉好仇。神州孰君臨。萬古仰天皇。皇風洽六合。
明徳侔太陽。不世無汚隆。正氣時放光。乃參大連議。侃々排讒曇。
乃助明主斷。欲々焚伽藍。中郎嘗用之。宗社磐石安。清丸嘗用之。
妖僧肝膽寒。忽揮龍口劍。虜使頭足分。忽起西海興。怒濤殲胡氛。
志賀月明夜。陽爲鳳輦巡。芳野戰酣日。又代帝子屯。或投鎌倉窟。

憂憤正愼々。或伴櫻井驛。遺訓何慇懃。或殉天目山。幽囚不忘君。
或守伏見城。一身當萬軍。承平二百歳。斯氣常獲伸。然方其鬱屈。
生四十七人。乃知人雖亡。英靈未曾泯。長在天地間。隱然叙彝倫。
孰能扶持之。卓立東海濱。忠誠尊皇室。孝敬事天神。修文與奮武。
誓欲清胡塵。一朝天歩艱。邦君身先淪。頑鈍不知機。罪戾及孤臣。
孤臣困葛藟。君冤向誰陳。孤子遠墳墓。何以謝先親。荏苒二周星。
唯有斯氣隨。嗟予雖萬死。豈忍與汝離。屈伸付天地。生死復奚疑。
生當雪君冤。復見張網維。死爲忠義鬼。極天護皇基。

といふたのは、歴史によつて我が愛國心を鼓吹したのである。此の愛國心は人の至情から出るのであるが、仔細に其の生起の要素を求むれば、諸種の條件がある。

一　國家統治權の確立及び其の永續は愛國心を生起せしむるに尤も必要なり、我が萬世一系の皇室を戴く如きは他國に見るべからざる熱烈なる愛國心を起さしむる要因である。天壤無窮、金甌無缺等の語は愛國

の精神を激勵するものである。

二　人種の同一なること、凡そ社會の原始は血族の集合になるのであるから、國家も其の初めに遡れば同一血族である、同一血族であるから其の容貌、氣質、を同じくして共同の情を濃かにする。

三　土地を愛着するは人の情で、此の土地なるものは國家の具體的方面であるから、此の土地愛着の念は、やがて愛國の精神と密接不離の關係を有するに至るのである。

四　言語の同一なることは國民の思想を統一融和して其の親密の度を深くするもので、言語の異れる場合は思想感情の疏通を缺き親和力を薄くするを免れぬ。

五　風俗習慣の同一なること亦國民團結の意識を堅くせしむる所以で、同一國民は其の生れたる時より同一風俗習慣の下に包容せらるゝので あるから此の風俗習慣の同一といふことも愛國の精神を起さしむる要因である。

六　同一國民は同一の歴史を踏み來つたのであるから、史上の成跡は國民の等しく想起する所で、英雄豪傑の芳蹟の愛國心を打つことは頗る多い。

尙ほ諸種の誘因もあるであらうが、これらは其の主要なるもので、平生にあつても、此の心によつて繋がれ、一旦緩急あるの時は、發して國難に殉ずる献身的の心となるのである。さて此の愛國心と他の人情との衝突は、史上に於ても其の例に乏しからぬことで、人生の憂患を此上に見ることが多い。其の身を愛着するは人情、されど愛國の士は國の爲めには其の身を顧みず、妻子を愛するは人情、されど君國の爲めには其の妻子の愛をも犧牲に供する。彼の梅田雲濱が。

妻臥二病床一兒泣レ飢　此心誓擬拂二戎夷一
今朝死別兼二生別一　唯有二皇天后土知一

といひ、吉田松陰が

回レ首蒼茫浪速城　蓬窓又聽杜鵑聲

丹心一片人知否　不夢家郷夢帝郷

といへるも皆な家族の愛を絶ちて國家の愛に代へたるもので、其の志は壯とすべきも、其の心は眞に憫むべきである。人情の迂餘、英傑の心を痛ましむる所實に此にある。彼の平重盛が父清盛を諫めて、孝ならんと欲すれば、忠ならず、忠ならんと欲すれば孝ならず、重盛進退維に谷る、生きて此の悲みを見んより死するに如かずと云ふたのも此の苦衷である。彼の近松の「國性爺後日合戰」に、父老一官が目前に殺されんとするに氣憶れし國性爺を描いて一官は齒がみを爲し、ヤイ國性爺、狼狽へたか後れたか、七十に餘る此の一官、命ながらへ、何になる、母が最期の健氣なりとて父にも語り吹聽せしを忘れしか、これほどまでに仕終せし一大事、此の皺爺が命一つに仕損せしと云はれて、末代の恥辱、故郷の聞え、日本生れは愛に溺れ、義を知らぬと他國に惡名止めんは日本の恥ならずや、女なれども汝が母は生れ故郷を重んじ、日本の恥といふ字に命を捨てしを忘れしか、これほどの手詰になり、此の親が目前に八つ裂にせらるゝとも、眼もふらず飛びかゝつて本望とげ、大明の御代になさんと思ふ根性は何處で失せた、エヽ未練なり淺ましと地團太踏んで制すれば、國性爺、父に恥しめられ、思ひ切つて大王目がけ飛び出づれば、李蹈天、父に劍を差當る、ハッと氣も消え立止り進みかねたるしどろ足、頭の上に須彌山が、今崩れかゝつても、びくともせぬ國性爺、前後に暮れてぞ見えにける。

と、これらは特別の場合であるが、平常に於ても可愛い子を兵役に出す父母の心に、此の煩悶なきを得ず、況して戰時に妻子を遺して出る軍人の情も之れと同じものがあるのであるが、愛國の精神は能く是等の情に打克ち、義は山岳より重く、死は鴻毛より輕しと覺悟するのである。更に生活に密接した る方面を見れば國家の機關は國民の租稅を主要なる原動力として運轉するのであるから、國民は皆な納稅の義務を有し直接に間接に自己の生產の幾分を割いて國家に提供せなければならぬのである。個人の私情からいへば己れの働いて得た金を國家に提供するのは嬉しいことではないが、國民として生活する以上は怠ることの出來ない當然の任務である。即ち吾等は自らの生產を

以て自らの衣食住に供するのみならず、家族の衣食住に供すると共に、國家の生存と發達とに必要なる租稅を出さねばならぬのである。併し已にもいふ如くたゞ兵役納稅の義務を全うするのみで國民たる務は盡きたのではない、進んで公益を廣め世務を開き、自己の一擧一動をして此の國家の發展と人類の福利とに貢獻せしむるの覺悟を以て暮さねばならぬ。彼の蒲生君平の君のため國の爲めとし思はずば

雪や螢をなにかあつめん

といひたる如く、其の業の何たるを問はず、其の標的とする所を此に置くのが國民生活の第一義である。

以上は國家なる大範圍に就ていふたのであるが、吾等の生活は直接に此の大範圍の下にあるのではない。國家は其の統治の必要上行政區劃を分ちて府縣、郡市、町村等として居るのである。吾等は日本國民たると共に、何縣(若くは府)何郡(若くは市)何村(若くは町)の民たらざるを得ないので、其の爲めには府縣稅、市郡稅、町村稅をも負擔せざるを得ず。又選ばれては府縣市町村の

名譽職に就くの義務をも持つて居るので、吾等は實に市町村の一員として法律の範圍内に於て其の地方の自治に努め、隣保救濟の實を擧げ、共同の利益を進めて、國家の健全なる發達を計らねばならぬ義務を持て居るので、之れを人情よりいへば鄉土を愛する至情と、遠き親類よりも近き他人の相倚る必要から生れたもので、こも亦國民生活として忘るべからざる一事象である。煩鎖なる哉、吾等の生活、吾等は政治的に二重三重の責務を有して居るものである。

第三節　社交生活

吾等は家庭の中に家族と共に生活するのみにあらず、其の生活の舞臺は家庭よりも廣く、其の生活の對手は家族のみにあらず、吾等は其の生活に必要なる物資を廣く世界人類に需むるが如く、吾等が生活の方法は又世界人類を對手とせざるべからざるもので、思想には國土の領域なく、物資の需給は山河の境界を認めず。現代生活の世界的となりしは已にも云ひし如くなれば、

世間の手前

社會制裁

吾等は普く人を相手として生活するといふも誣言でない、ソコデ人の噂、世間の手前といふことが直接間接に吾等の生活に關係して、社會の風習に囚はれ、浮世の義理に責められて無い金を算段しても一定の職業には一定の服裝をせねばならず、潜かに質屋通ひをしても知人の慶弔には引物を贈らねばならぬ。これらも亦吾等の生活費の一部分を占むるもので、義理と褌かゝねばならぬといふ俚諺は社會が個人に迫る生活の苦痛である。更に深く其間の消息を査究すれば「所謂義理が立たずば身が立たぬ」で、冷酷なる社會制裁の爲めに社會から除外せらるゝを恐るゝ情もあらうが、又世間體人前といふ虚榮の心もあるので、人の見ない時には粥を啜つて居つても、人の前では「家には金の桑釜がある」といふ顔がしたく、内所は火の車でも世間體は豐かな生計のやうに見せたい人心もあるので、一面これが生活の膨脹の種ともなるが、他面に於ては社會制裁を重んずる心ともなり、社會の秩序を保つ遠因ともなるのである。人々が皆な社會の習慣にも頓着せず、浮世の義理をも思はず、自分勝手に振舞へば社會秩序の規則たる禮儀禮式といふものも、立たなくなる

禮儀禮式

禮儀禮式といふことは無駄なことのやうであるが、社會の秩序を維持して行く上に於て尤も必要なことで、これあるが爲めに相互の感情を融和し、人と人との交際を圓滿にするので、聖人の德教も亦一に此に基くので、孔子の教學は禮を修むるを以て第一とし、一切の行動之れに由らしめんとし、論語には、孔子顔回に教へて

禮にあらざれば視ること勿れ、禮にあらざれば言ふことなかれ、禮にあらざれば聽くこと勿れ、禮にあらざれば動くこと勿れ

といひ、有子は

禮の用たる、和を貴しと爲す、先王の道、斯れを美と爲す、小大之れに由る、

といふて居る。此の禮を無視したい自己の本能に驅られて欲する所を行へば人は禽獸と異るなく社會は呑噬の巷となり了らん、吾等が社交生活に於て忘るべからざるものは此の禮である、孔子又いふ、

恭にして禮なくば則ち勞、愼にして禮なくば則ち葸、勇にして禮なくん

ば則ち亂、直にして禮なくんば則ち絞

と、恭愼勇直は人生の美德であるが、若し此禮を缺く時は勞惹亂絞の惡德となり了るのである。禮は社會秩序の根源、吾等の生活をして禽獸と異らしむる所此にあるのである。唯だ禮の外形に流れて其精神内容を無視する時は、折角の禮も虛禮虛儀となつて、社會生活を複雜ならしむるの結果を招くか、阿諛諂佞となつて却て心ある人の指彈を招くやうになるので、人の社會的結合は精神結合であるから、禮儀禮式も其の本は恭敬の精神、同情の心から出ねばならぬ。徒らに心にもなき言語態度を以て人前を粉飾するは、粗野なる言語態度を以て他の感情を害すると共に、禮儀を去ること頗る遠いのである。昔俳聖松尾芭蕉が招かれて内藤侯の御前に俳諧の物語をした時に、侯の烟草嫌ひを思ふて平生嗜きな烟草を吸はなかつた。門人其角之れを嘲り て俳諧の道は權貴に阿らず、威武に屈せざるを貴ぶ、師が今日、侯の御前に於て烟草を手にせざりしは聊か阿るに似たりといふと、芭蕉は叱して、俳諧は小技なりと雖も、以て道とするに足る。予が今日内藤侯の御前に於て烟草

を吸はざりしは禮なり、阿るにあらず、禮を知らずして放縱を事とするは斯道の賊なりといふたといふことである。颯逸を旨とするものも亦此の禮なるべからず、さすがに芭蕉は一道の師となるべき人である。

人は感情の動物で、一言一句の行違ひより大事件を釀すこともあり、一擧一動の思ひ違ひから意外の事變となることもある。意志の疏通、感情の融和は社交の要件で、之れには第一に言語態度に關する注意が必要である。凡そ人の意志を他に通ずるのは言語で、同じ意味でも言ひやうで他の感情を害するを免れぬ、

丸い玉子も切りやうで四角、ものも言ひ樣で角が立つ

態度も亦た左樣で、同じことでも、傲然としていへば他の感情を害し、悄然としていへば他の憐を買ひ、肅然としていへば他の襟を正さしめる。耳に聽く所、目に視る所は人の感情を動かし、其の感情(Feeling)より喜怒哀樂の情緒(Emotion)となつて諸種の葛藤紛糾を生ぜしむるので、此の言語態度は自他接觸の機關で、他は之れによつて其の人格を窺ふのであるから、微細の點にも

英雄の人心收攬

注意を怠ることは出來ない。位貴きにあるもの〻誇れば、人の感情を害し、卑しきもの〻誇れば、分を知らぬと誹らる。所詮社交に於ける言語態度は自ら誇らず、他を卑しまず、共に社會の一員として他の人格を重んじて過する上に他の心を得ることはあるので、英國の大政治家グラッドストンは能く人を記憶して居つて、田舍の名も知られぬ議員でも、一たび相見たものには、親しく語をかけたが、爲めに、彼れの如き大政治家も我を記憶して呉れるかといふ心からグラッドストン崇拜の情を起したといふことである。人には各〻自尊の心があるのだから挨拶をしても、「君は何方でしたか」なぞと云はれると非常に感情を害するものである。此點に於てグラッドストンは確かに人心收攬の術を心得て居つたとも云はれる。彼の豐臣秀吉が絶世の雄を以てして、位、關白の高きにあり、故郷を訪ひ、酒を置て一村の父老を慰めたと傳へらるゝ話も、亦實に此の消息を見ることが出來る。太閤記によると、

村中のもの喜ぶこと限りなく、皆な一生の晴れと上下衣服を着し出でたりける。殿下も此の日は官位に係りたまはず、紫の小袖に丸絞の帶を締めたまひ、百姓と倶に同席し、酒飯を召し上られ、彼等へも下されければ、何れも關白樣と同坐することゝ冥加至極と感涙を流し萬歳を賀し奉りける。殿下また猿樂を催したまひ、無禮を御免ありて見物せしめられしかば、幼を負ひ老を扶けわれも〳〵と群集し心の儘に見物しければ、殿下も大に御喜悦ましまし、種々興を添へ饗應したまひ云々

とある。高きにあつて誇らず衆と共に樂む此に人望を得る所由はある。英雄の美談に之れに類するもの頗る多い。社交の要訣は其の職の尊卑に關せず、其の產の貧富を問はず、對手の人格を重視するにあるので、禮義の根本たる恭敬の念も此の人格重視の觀念に基くに外ならぬ。人々各長所あり、短所あり其短所を見れば萬人悉く短所のみなれど、其の長所を見れば愚者にも一得はある。其の長所を認めらるゝ時に其の人は滿足す、士は己れを知るものゝ爲めに死すといふ覺悟も、要は此の心から出るに外ならぬ、これは言語態度のみではない。意志疏通の他の方法たる書簡も亦社交上に注意を要することの多きもので、予の知れる或る政治家の如きは、一たび名刺を交換したる人に

己を知るもの〻爲めに死す

書簡

は、如何なるものにも書信を絶たずして人望を得た人もある。これも亦一種の人心收攬策と見ることが出來る。人は單獨に生活するものでなく、社會の共同生活の一員として生活するのであるから、其の人の生活に密接なる關係を有するので、如何なる英雄も其の社會的生命を斷たれては回天の事業も行ふことは出來ず、如何なる學者も其の社會的生命を失ふては、其の說に耳を傾くることなく、如何なる商業家も其の社會的生命を沒しては一物をも賣ることは出來ない。併し徒らに之れに苦心焦慮して世に阿り人に媚びるのは策の得たるものではない、社會の批判は一時的のもので、人の噂も七十五日、自ら守る所正しく、行ふ所誤りなくんば終には其の眞價を認めてくれるやうになるものである。これらのことに就ては後に世態の心理を說く條下で詳述する機會あれば此れは略するが、毀譽に動せず、貶褒に迷はず、自ら信ずる所を行ふて行かねばならぬのであるが、又世を解し人を知るといふことは尤も必要である。

社會的生命

人の噂も七十五日

元禄正徳時代風俗小町踊の圖

『風俗十二ヶ月』筆蝶一英模

第三章　職業と人情

第一節　職業の分類

文明の進歩は單純より複雜に向ひ、初めは兵農も分れず、商工も同一人の手に成りしもの漸次分化して其の業を別にし職を異にして、世の進むに從ひて職業の分類は益〻甚しく統治機能に屬する官吏公吏にも上は大臣宰相より下は村役場の雇員に至るまで其の階段は霄壤の差を生じ、敎化機能に屬するものにも僧侶あり、敎員あり、其の敎員にも一時間の講演に數十金を得るものあり、一ケ月の俸給十圓に足らざるものあり、其の僧侶にも法主あり、管長あり、托鉢坊主あり、生活の程度月旨も啻ならず、是等は間接に生産に關與するものなれど、直接生産に關與する經濟機能に屬するもの、即ち狹義に於ける職業を見んか、千種萬樣、分化に分化を生じ、足利氏の時代に當りては早くも、農樵の類には農夫、樵夫、漁夫、草刈、鹽燒、炭燒、金掘あり、衣服髮飾（かみかざり）に關するものには、

中古の職業

機織、紺かき、縫師、組師、白布賣、直垂賣、綿賣、苧賣、烏帽子折、扇賣、帶賣、髮かき、白粉賣、紅粉（べに）とき、櫛挽、

等あり、食物に關するものには

酒造、酒賣、酢造、米賣、鹽賣、豆賣、麹賣、魚賣、素麵賣、豆腐賣、饅頭賣、心太（ところてん）賣、法論味噌賣、烏賣、菜賣、地黃煎餅賣、

の類あり、住居家具に關するものには、

番匠、檜皮葺、壁塗、檜物師、車匠、草結、紙漉、硯切、枕賣、薰物賣、疊紙賣、疊匠、唐紙（からかみ）師、表具師、傘張、笠縫、艸履賣、足駄造、桶師、火鉢賣、

等あり、運送に關するものには

船人、棹手、渡守、轎夫、馬丁

の類あり、文藝並に娯樂に關するものには、

文者、出家、書工、蒔繪師、賞鑒家、茶家、歌人、連歌師、田樂師、太神樂、猿樂師、白拍子、曲舞（くせまひ）、放下、聲女（こゑめ）、琵琶法師

等あり、戰國の時代として武具に關するもの弓師、矢師、箙細工、弦賣、鎧師鞍師、刀鍛冶の類あり、其の他衞生に關する醫師、宗教に關する陰陽師、天文者、曆道、人相、山伏、巫師の類等皆な社會の必要に應じて分化し、德川時代に至つては益〻夥しく、「守貞漫稿」の載する所によりて之れを擧ぐれば。

米問屋、魚問屋、織屋、茶道具屋、藥種屋、唐物問屋、相場師、材木屋、瀨戶物屋、古道具屋、古着屋、金銀箔屋、曆問屋、兩替屋、太物問屋、小間物問屋、酒問屋、刀屋、武具屋、靑物市場業、魚市場業、材木問屋、廻船問屋、茶船屋、積問屋、船宿、飛脚屋、悉皆屋、縫物師匠、白皮屋、雪踏店、献殘屋、纏工、窖工、菜屋、刺身屋、便（たより）屋、藏法師（貸土藏）札差、植木屋、出し見世、路店、粟餠屋、際物（きわもの）師、矢師、茶漬屋、蕎麥屋、料理茶屋、鰻屋、鮨汁屋、茶見世（水茶屋）旅籠屋、下宿、招牌（かんばん）屋、工匠、大工左官、石匠、瓦工、手傳人足、鳶人足、

等を列擧し、行商に類するものは、

呉服賣、古金糸賣、菖蒲人形賣、油揚賣、帽子賣、高荷木綿賣、地紙賣、

ぼて、鮮魚賣、枯魚賣、初松魚賣、白魚及むきみ賣、牡蠣賣、蜆賣、海鼠賣、乾魚賣、菜蔬賣、豆腐賣、糊賣、油賣、花賣、荒神松賣、羅宇屋、錠前直し、鑄鉄師、磨師、下駄歯入、針賣、鏡磨、眼鏡の仕替、印肉の仕替、瀬戸物焼接、紙屑屋、古傘買、灰買、臼之目立、鼠取薬賣、箒賣、銅器賣、算盤直し、赤蛙賣、鹽賣、漬物賣、新粉細工、飴賣、菓子賣、弄物賣、蕃菽粉賣、小間物賣、烟草賣、筆墨賣、還魂紙賣、鰻蒲焼賣、桃灯張替、蠟燭之流賣、植木賣、瓦器賣、竿竹賣、ハッリ賣、さぼん玉賣、海ホウヅキ賣、勝負附賣、輛替、按摩、錢緡賣、奸賣、雪踏直し、際物師、甘酒賣、湯出菽賣、是齋賣、枇把葉湯賣、錦魚賣、簾賣、心太賣、蟲賣、松茸賣、初簟賣、炭團賣、曆賣、箱火鉢賣、御鉢入賣、黒木賣、蹴鞠花賣、揚昆布賣、盆蒲焼賣、行燈仕替、櫓直し、艾賣、有馬籠賣、乾物賣、鯡昆布巻賣、鳥貝ふか刺身賣、味噌屋、澁紙敷衾賣、岩起賣、羽織紐直し、焙烙賣、蒸芋賣、薄板製の燈籠賣、竹馬古着屋、冷水賣、湯出雞卵賣、文庫賣、笊味噌漉賣、附木賣、苗賣、鮨賣、水彈賣、草履賣、衣紋竹賣、砂糖

入金時賣、納豆賣、白酒賣、白玉賣、歯磨賣、麹賣、乾海苔賣、番附賣、拂扇筥賣、墨澁屋、竈賣、蚊帳塗、文蚊屋賣、竹帚賣、草帚賣、三絃賣、簔賣、拂ひ合羽、簾篠蓋賣、鹽辛賣、看板書、樽買、櫻草賣、稗蒔賣、葬花賣、葭戸賣、御役人附賣、錢塵賣、クゴ繩賣、温飩屋、蕎麥屋、善哉賣汁粉賣、上畑おでん、茶飯賣、

其の他雜業の部に於て藝人並に乞食の類を擧ぐ

神道者、わい〳〵天王、鹿島の事觸、虚無僧、太神樂、今世太神樂、願人坊主、おぼくれ坊主、考へ物、御日利御祈禱、半田行人、まかしよ、江戸住吉踊り、庚申の代待、乞胸、綾取、猿若、江戸萬歳、辻放下、からくり淨瑠璃、說經、物眞似、仕形能、物語、講談、辻勸進、獅子舞、首掛芝居葛西踊、西國順禮、六十六部、四國邊路、宿之者、京師非人の長、大阪の穢多、乞食、非人乞食、宿村之送加、今世屠兒、犬拾ひ、猿曳、癩病人、女太夫、引廻刑人、節季候、大黒舞、鳥追、砂書、掃除、一人相撲、河童に扮す、乞食芝居、神樂みこの扮、すだすだ坊主、和尚今日、古札納め

職業分類の困難

こは比較的精細に諸業を列擧したれど、尙ほ之れのみを以て一切を悉くせるにあらず、殊に明治となつては其の生活の世界的となりしに從ひ、職業の分化も甚しく、到底之れを列擧する能はざるのみならず、之れを總括していふも頗る至難の業たるを免れざるに至り、通常は之を單に農工商並に庶業に分ち、商業會議所の有業者統計にも單に商業、農業、工業、其他の職業といふ名の下に分つて居るが、其の農にも、工にも、商にも、大小の別、同日の論にあらざるあり、大地主も農なれば小作人も農、三越白木の如き大呉服店も商なれば大道店の古着商も亦これ商、工學博士の學位を有せる工あれば手內職に燐寸箱を貼つて居る工もある。殊に庶業といひ其他の職業といふ中には農工商以外の一切を包含せしむるが故に、利子に生きる大富豪もあれば乞食に等しき其の日暮しの人もありて仔細に分類し難きも、呉文聰氏著實際統計學に引用せられたる佛人ベルチロンが萬國統計學會へ提出したる方案は略ぼ其の要を得たるが如し、即ち類別の通則としては、

甲　原料の生産

一　農作　二　採鑛

農作及び採鑛は各業の爲め必要なる資料を採集するものにして、農業は地上にて勞動し、鑛業は地下にて勞動するものなり

乙　原料の形を變じ之れを使用の途に向くる業

三　製造、製造は原料と技術と器械にて變形し、之れを人類の使用に供す、

四　運送、運送は製造品を需用者に運搬す、

五　商賣、商賣は製造品を需用者に販賣す、

丙　政務及び自由業

六　公力　秩序を保ち營業の安全を保護する兵備及び警察官これなり

七　政務　公共の事務を處理す

八　自由業　宗教、法律、醫學、教育、學術、文藝、美術等に從事す

九　獨立者　收入に由て生活する者

丁　雜類

十　雜類及び區別し難きもの、無業及び不詳のもの

さて右に農業といふは、耕地、園作、野菜作、苗作、蔓作、牧蓄、漁業、獵業等をいふものにして、採鑛とは金屬及び燃料の採掘、石及び砂の採掘、又は山鹽沼鹽の採掘なり、工業及び製造は其の物質と用途に從つて之れを別つ、則ち金屬工業、皮革工業、木材工業の如く、食料、衣類、家具建築、運搬具、自然力製出、奢侈品及文學技藝の生産、廢物利用の如し、雜類は分つて三部とす、家内勤務(例へば馭者、馬丁、車夫の類)不生産者、業務不詳是なり、不生産者は無業者及び就業し難きものゝ二とす、無業に一時の無業と永久の無業とあり、一時の無業は一時の不生産者なれば甚だし き恐なしといへども、癈疾又は不品行の爲め永久の無業者は國家の爲め大に恐るべきものとす、則ち其區別左の如し、

不生産人員

い　一時業務に就くを得ざるもの

ろ　永く定業なきもの

不生産人員中一時業務に就くを得ざる者

は　業務なきもの

に　就學年齡者

ほ　青年壯年の學生

不生産人員中永く業に就き難きもの

へ　病人及不具

と　瘋癲

ち　四人

り　乞食無宿者及び娼婦(吳氏「實際統計學」)

としてある、これを以て今は尤も精細にして且つ要を得たものとせざるを得ない、予は今此の類別を基礎とし、說述の便宜上、暫く各種の職業を、

一　採收に關する職業

二　製造に關する職業

三　運搬に關する職業

四　賣買に關する職業
五　政治に關する職業
六　敎化及び衞生に關する職業
七　趣味娯樂に關する職業
八　罪惡的職業及び無職業

に分ち、更に概括して漸次其の觀察を試みんとす、職業の夥多なる到底此の類別の中に包含し難しと雖も、人類生活の各方面は略ぼ之れによりて觀察することが出來ると思ふのである

第二節　自然物採收に關する職業

自然物を採收して人類の用に供する職業は、其の勞動の場所に於て地上に勞動する農業、地下に勞動する鑛業、水上に勞動する漁業と爲すべく、又其の採收物に就て植物を採收する農樵、動物を採收する漁獵、礦物を採收する鑛業とに分つべけれど、これらは共に一應の分類にして學術的にいへば廣意

に於ける農業の定義の中には一切を包含し、米國經濟學の大家ウォーカー氏は百般の生產事業を物體の性質を變ずる作業即ち農業と、形體を變ずる作業即ち工業と其の位置を變ずる作業即ち運搬等とに分ちたれば、農の範圍は頗る廣く、同氏の云ふ所によれば凡そ地中より收得するものは播種の結果として得ると否とを問はず、皆な農產と稱すべし、魚介鑛石は下種せずして收獲する農產なりと、其の狹義に解せるものは佐藤信淵翁の

竹木の繁庶なる群品の中より日用に尤も緊要なるものを選み、之れを植ゑ之れを作りて能く生熟せしめ以て人生の需に供するを耕農の業とす

といへるあり、更に英のウイルソン氏の如く「農は食物を十分に且つ間斷なく生產するものなり」ともいへるありて其の標準一定せざれど、予は食物のみならず、衣類に關する養蠶、牧畜等の類をも此の中に包含せしめ、凡て田園に勞動する業を一括して農と見、廣意に於ける農業より漁業と鑛業とを除いて觀察するを便とするのである、何となればこれら田園に勞動する者と漁業並に鑛業とは其の氣風に於て大に異なる者あれば其の人情は到底一律の上に云

ひ難きを認めたからである。併し同じ農の部に屬せしむるものでも純農即ち米麥野菜のみの收穫に從事するものと、主として養蠶を事とするものとの間には、其の氣風の異ること甚しくして純農地方は質朴なれど、養蠶地方は華奢の風に染り易く、純農地方は堅實なる精神に富むに反し、養蠶地方は浮薄の傾向のないではない、且つ純農にも天災地妖の其の收穫に多大の影響を與ふることあるは免れざる所なれど、養蠶の如く影響の甚しからざるを以て、純農地方には投機的精神少けれど、養蠶地方には比較的其の多きを見る如きの差は少なくないが、養蠶は多く副業として營むを以て、農村は矢張農村の氣風を存し一般に都會の空氣に染むこと少く、自然を相手として勞動するが故に、心神清澄にして氣質も亦堅固に、殊に其の職業、土地と密接不離の關係を有するが故に愛土心强く、頗る都會輕薄の風と趣を異にし、其の生活は質素にして所謂「麥飯に五斗味噌汁、榮耀喰ひはようせねど、在所住居の氣さんじに腰屈むる相手もなく、惡を勸める友もなければ、今日を眞直に暮らす人間」たることを得るのである。氣安きは農家の生活、其の賃銀の如きも他に比

して頗る低廉なるもので、明治四十二年の調査によると、

農作年雇　男四十三圓三十一錢　女二十一圓九十三錢
同　日雇　男三十八錢　女二十三錢

養蠶は幾分高値にして、

養蠶日雇　男四十三錢　女二十七錢

絲繰女　二十七錢

こは最低なる農事雇人に就ていふたので、等しく農業といふも、數萬町歩を有せる大地主あり、僅かに自家の耕作し得べき土地のみを有せるものあり、自家には寸地の所有なく他人の土地を小作せるものあり、賃銀を以て雇はるゝものありて、上は多額納稅者より下は水呑百姓に至るまで、其の差、尤も甚しけれど、これを簇漁若くは工業に比しては、地主と小作若くは雇人との關係は比較的親密に、其の利害も亦た互に影響し、殊には代々一定の地を耕耘せるが故に世襲の關係を生じて、太古素朴の俗は却て此の間に存するを見るのである、即ち農業者は從順にして質素、堅實にして忍耐の心に富む、

甕庵の

民艸のことしげき、見るもなか〳〵むづかし、萱が軒端に雨も嵐も防ぎかね、我が菰垂（こもだれ）の中、烟にふちぼり、打寢るも牛馬に床を並べ、妻などは蓬（よもぎ）のかしらかき亂せる、たゞ聲のみ男兒（おのこ）ならぬ子のおほきなる小さき、餓えたり寒しなどいふ聲、いとかしましく、おほしたてたるたなのものも、公（おほやけ）に致し盡くせば其の味を知ることなし、衣織る所もいと色美しく織りなして も、値いやしくして上へ召され、商人へ賣るも、其の幾分を上へさゝぐれば殘るもの若干ぞ、さておのれは襤褸（つゞれ）をきたり、さる上に凍えたり、こゝのゑたち、かしこの公事といふ事さへ加はれば終に頭の露をのみ我がものとして、思ひ出もなき世を渡るめり、かうやうのいたましきかぎりをば國治（しろ）しめすやんごとなきがあはれとしろしめす云々

といへるは農民の生活狀態にして、雨森芳洲の

ある國しろしめす御かたの、はじめて國賜はりし時、御國の民どもに教へたまふ文、いかゞしたためはべらんと、したべの人の問ひたてまつりしに、

一　ぶしやうをかまへ農業に怠るべからず

一　庄屋組頭の申すこと違背すべからず

右は百姓中一百姓ども油斷せざるやう下知すべし、私しすべからず、右は庄屋中へとのみ仰せ出され、其の外は年々になつものゝ豐凶を見て年貢運上、或は輕め或は寬うし、これば かりにてやみ給へりと語れる人あり、これも一道なるべし

といへるは反面より農民の素朴なるを示したものと見ることが出來る。既にいふ如く農は定着的世襲的なるが多く、其の上經驗を主とするが故に兎角保守に流れて新智識を輸入するに疎（おろそか）であるが、其の代りに愛國の精神は愛土の情と混じて常に國家の元氣を維持するもので、國家の兵力は主として此の農民から出るのである。我が日本は古來農を本とするの國で、全國總戶數の約四割一分は純粹の農民で、約一割八分は農を兼業とするのであるから併せて全國戶數の約六割即ち過半數は農民であるので、全國各府縣中農家戶數が總戶數の半數に達せざるものは僅に東京、（農家戶數一割一分）大阪（仝二割五分）京

林業者の氣風

都(全四割五分)の三府、神奈川(全四割六分)兵庫(全三割四分)の二縣あるのみである。此の點に於ても農民の氣風が如何に全國に影響するかといふことが解る、併し日本は農民が多い割に耕地が多いのではない、日本の面積十四萬七千方哩の百分の七・四が田で、百分の七・二が畑であるから、合して百分の十四に當る、之れに比して最も多いのは日本の山林面積で實に總面積の五割七分、此に於て林業といふことには日本は天惠の國であるし、四面は繞らすに海を以てして居るのであるから、海産物にも天惠を有するので漁業の民も亦少なくない。林業者は農業者の如く廣濶なる平野に勞動せずして鬱蒼陰濕なる林間に勞作するが故に、氣質偏固に傾くは免れざる所なるも、常に新鮮の空氣を吸ひ、變化少き自然を相手とするが故に農者よりも更に質朴の度を增し、身は深く山間に入り時に猛獸毒蛇と戰ふを以て自由獨立勇悍の氣風を有して居るやうである。漁業は水上に勞動するが故に、危險少からず、年々遭難船數は

明治三十三年	一千〇六十五艘	
仝　三十四年	九百四十六艘	
仝　三十五年	九百三十八艘	
仝　三十六年	五百六十一艘	
仝　三十七年	六百九十七艘	

漁民の氣風

の割合にて遠洋漁船、內地の部總計三千三百四十八艘、其の乘組員三万六千三百九十七人、朝鮮沿海の部三千六百五十四艘、其の乘組員一万六千七百九十三人、露領沿海州附近の部百七十五艘、其乘組員一千四百四十九人(明治四十二年調査)なれば其の遭難は一割以上に相當すること少からざれば、所謂「板子一枚下は地獄」の稼業にして、其の收穫も亦彼の農業の春に播種して秋に收穫する如く定着的にして、略ぼ豫定し得べきに異り、一網に打盡して巨利を博することもあるも、時に意外の不漁なき能はざるを以て其の業冒險的にして、其の事投機的なるを免れず、之れを以て就業者に貯蓄の念なく、一時的目前的にして得れば則ち散じ、飲酒博奕の如き惡弊は農に比して多きものあるは勢ひの免れざる所であるされど地、都會を距ること遠く、人を相手とすること少くして自然を相手とすること多く、常に目にするものは滌蕩たる海洋な

漁民の信仰

る、を以て奸譎の俗なく、直情徑行飾らず僞らざるの美風を存し、運命を信ずること深く、宗教を信ずること篤く、寧ろ迷信に屬すること少なくない。水難を救ふと示されし觀世音菩薩、胎内にあつて安らけく三韓征伐を爲したまひし八幡大菩薩(應神天皇)は彼等の崇拜する所にして、各所の海岸に觀音崎、八幡濱の名の存するにても知ることが出來る。中世以后水天宮並に金毘羅大權現の信仰は盛んとなりてこれ亦水難救濟專門の佛神として崇められ、漁獵に就ては龍神(殊に羽前大山の善寶寺の如き)は祈願を罩めらるゝことが多い。彼等の宗派にはいろ〳〵あるが天台眞言の如き平安朝の宗教は殺生禁斷を標榜するが故に比較的少く、眞宗日蓮宗の如き鎌倉時代の宗派に屬するものが多い。農家の主として祀る所は稻荷大明神で山村水郭、いづれの所にも其の社祠の無い所はない、これは稻倉魂(うかのみたま)神で米作と密接に關係して居るからで、漁業者も稻荷を祀らぬことはないが、農家に比して少いのは其の職業との關係から出たのであらう。

鑛業に從事するもの丶氣風は、全く農漁の民と異るので、畚幕時代には重

罪犯人を坑夫に充てた遺風の存するにも因るであらうが、人の生活すべき地上でなく、人の生活せざる地下に入つて勞動するのであるから農漁の如く世襲的に從事するものはなく、多くは他の職業に於て失敗した渡り者で。職業自體に快樂少きと、危險多きが故に、其の日暮らしの今日主義、自暴自棄の風盛んに、殺伐俗を爲し、自然物採收に從事するもの丶中、風儀の惡きは此の業を最高位とするほどで、昔は「坑夫生活に自分のものでない自分の物でないは下駄と金と女房だ」といふほどであつたが、今は漸次矯風の實も擧つて昔日の如くならず、これらの社會にも亦有爲の士のないでもないが、一般に社會の制裁の風吹くこと少く、何事も小範圍の中に行はるゝが故に他の社會に於て罪惡視せらるゝことも平氣に行はるゝ傾がないでもない。併し其の範圍の小なるだけ、又一種の制約の法律以外の法律として行はれて彼等の間の秩序を維持して居る。峽雨生が「足尾銅山に於ける坑夫生活」の一節に老鑛夫の談を擧げていふ。

それは一人前の鑛夫になると飯場の主人を親方に持つて自分はその乾分に

なる規則で、親分乾兒の盃をする、其の時に親分から昔はお三寶に長脇差一本を載せて引出物に出したものだが今日では刀の替りに大工槌といふ鑿夫の使用する道具の一つを呉れることになつてゐる、そして一人前の坑夫即ち親分持の坑夫となると鑛山から鑛山へ自由に出稼ぎに歩るかれるので何處の鑛山にでも行つて飯場を頼つて行けば勤口が出來る飯場は親分持の坑夫には一と通り保護を與へる規約になつてゐる、で、坑夫が飯場を頼つて行く挨拶も一定してゐてそれが博徒のつきあひといふものと似てゐるもので斯うだ、先づ坑夫が飯場の表口を這入ると敷居に手をついて案内を頼む飯場の者は旅の坑夫と見て、『浪人衆そこは端近故まづお上り』と三度いふ坑夫も『浪人の身分としてこの座で御免を下さへ』と三度答へ次に坑夫は『えー』と口をきつて『あなたさんとは初の對面で御座り升、二度の對面の儀は平に御免下さへ時候と申しましては追々寒さの時節と心得升、あなたさん御身にとりまして始終御壯健さんでお芽出度う御座り升、早速上申させて戴き升』と。

これから自分の親分の生國姓名と自分のそれを名乘り來意を告げるのださうで飯場ではその坑夫に稼ぎ口を周旋するか若くは三日だけ自由に泊まらせて金二十錢を草鞋錢として包む事になつてゐるといふのだ。坑夫の渡者を浪人衆といふ抔は面白い。

別殊の社會には亦別殊の人情もあり。德義もある。明治四十二年六月末日の調査によれば鑛山就業者現在人員二十三萬三千八百二十七人、これらの人々の宗教は種々雜多で、無宗教無信仰のもの過半を占めてゐるのが其の實際である。

第三節　製造幷に運搬に關する業

自然物採收に關する業は、尤も原始的のものにして其の方法に於て幾多の進歩ありて、曾ては單に人力に依頼したるものゝ今は機械を利用し、前には自然に任したるものゝ今は科學の力を應用して自然の障害に打克つ施設も出來たのであるが、文明の發達の惠を受くること尤も多きものは製造幷に運搬

文明の進歩と製造運搬

に關する業である。人の力の漸次機械に奪はれて、人はたゞ機械の補助の如くになり來つたのは此の製造並に運搬で、手內職の糸績みの大紡績會社に奪はれ、駕籠昇きの其の業を汽車に奪はれ、人力車夫の電車に客を取らるゝも皆之に屬するのである、かくて人は機械に驅逐せらるゝが、其又機械は人によつて發明せられ人によつて動かさるゝのであるから世は廻り持ち、廻りて文明は發達するのである。

先づ製造に關する業即ち工業より見んに、我が國に於て近時尤も進歩したのは此の工業で、政府直轄の工場には內閣に印刷局あり、大藏省に造幣局あり、陸軍省に東京、大阪の砲兵工廠あり、被服廠あり、糧秣廠あり、海軍省に橫須賀、吳、佐世保、舞鶴の工廠あり、農商務省に製鐵所あり、遞信省に電信燈台用品製造所あり、鐵道院には三十に近き工場あり、これらの職工數は實に男二十萬女、五十萬に達す、更に民間に於ては一萬一千三百九十の工場あり、平均一日使用の職工六十五萬と算せらる。之れらの中主なるものに就て職工一日賃銀の平均を見んか。

工場と賃銀

工場名	賃銀	工場名	賃銀
印刷局	男六十二錢 女十九錢	海軍省諸工場	男七十二錢 女二十七錢
造幣局	男五十八錢 女	製鐵所	男六十五錢 女
陸軍省諸工場平均	男七十二錢 女二十九錢	鐵道院工場	男七十一錢 女二十九錢

民間諸工場に就て平均一日の賃銀を見んに、染織に關する工場にては男四十二錢女二十九錢、機械に關する工場にては男五十六錢、女三十錢、化學工場男四十八錢、女二十三錢、飲食物工場男四十八錢、女二十四錢といふ割合であるから彼等職工の多くは男は五十錢內外、女は多く三十錢以內で一日の生活を支持するので其の就業時間は大抵一日普通の場合で十時間以上十一時間以內徹夜の場合には十二時にも達するのであつて、休憩時間は僅に一時間半より二時間までに過ぎないのであるから、身心共に疲勞するは免れないことである。若し之れを其の工場主や資本家の安逸な生活に比べたならば天地の差があるのであるから、勞動者保護の問題は文明の進歩に從つて看過すべからざ

ることとなるのである。彼等はかくて一日又一日、同じ事を繰り返して其の日を送るが故に、性質は偏固になつて自己の意思を没却し全く機械的になつてしまうのは自然の傾きである。彼等に慰安を與へて人生の情味を知らしむるといふことも亦治政の上で忘るべからざることたるは云ふまでもない。併し今はそれらの議論をする時でないから略することゝする。

これら工場に於ける職工と工場以外にあつて自由に業を營むものとは其氣風も亦趣を異にする、先づ明治四十二年調査農商務統計表によつて工場以外の諸職工の賃銀を見るに、

建築に關するもの

職名	賃銀	職名	賃銀	職名	賃銀
大工	八十錢	煉瓦積	一圓〇一錢	木挽	七十八錢
左官	八十二錢	煉瓦製造	七十六錢	家根	七十九錢
石工	九十三錢	船大工	八十一錢	瓦葺	九十四錢
				疊刺	七十四錢
				建具	七十六錢
				經師	七十三錢

衣服身裝品に關するもの

職名	賃銀	職名	賃銀
機織	男四十四錢 女二十六錢	袋物	六十一錢
染物	四十六錢	下駄	五十七錢
綿打	五十二錢	靴	六十六錢
和服仕立	五十三錢		
洋服仕立	七十九錢		

飲食物製造に關するもの

職名	賃銀	職名	賃銀

醬油造	月給	九圓六十八錢	杜氏	月給	十五圓九十二錢
菓子製造	四十錢		米搗	三十五錢	
煙草刻	五十七錢				

器具製造に關するもの

職名	賃銀	職名	賃銀
指物	七十五錢	飾	六十二錢
桶	六十錢	鑄物	六十七錢
車製造	六十五錢	鍛冶	六十七錢
馬具	七十錢	陶器轆轤	六十四錢
塗師	五十九錢		

雜類に屬するもの

職名	賃銀	職名	賃銀
漆掻	五十五錢	活版植字	五十一錢
油絞	五十五錢	版摺	四十九錢
紙漉	四十二錢	日雇人夫	五十二錢

こは平均賃銀で土地により氣候により多少の差はあるが、大體の標準、此の如きを以て略ぼ彼等の生活狀態を察知することが出來る。彼等の多數は一人の働きを以て一家を支へるには不充分なるを以て働き得べき年齢と體力とを有するものは老幼男女の差なく、何等かの職によつて生産を計りつゝあるので、同一工場に父子夫婦共に出るものあれば、夫は夫で何等かの職に從事し、妻は妻で手內職に其の口を糊するのもある。併し一般に職工とはいふものゝ其の中には親方となつて多くの子分を有する組織を爲せる大工左官の如きあれば、個人個人に獨立して職に從事する指物職や鍛冶屋のやうなのもあり、其の生活の程度狀態も同一ではない。即ち一°、工場に出勤する職工二°、戶外に勞動する職(大工、左官、石工、植木職の如き)三°、家內にありて

職工の氣風

勞動する職(仕立、指物、下駄職の如き)とは全然趣を異にし、先きにもいふ如く工場に於ける職工は機械の如くに勞動するが故に全く個性を沒却して働くが戸外勞動の職にては其の手傳ひとなり子分となつて働くものは親分たり棟梁たるものゝ命令のまゝに働くので同じく機械的たるを免れぬが、其の長たるものは設計多く自己の意中より出るを以て、或る制限の下に個性を發揮することが出來るのであるから、自己の名譽といふことに着目して其の仕事の出來上りに趣味を持つことが多い。其の一例としてこゝに擧げ得べきは、有名なる幸田露伴氏の小說「五重塔」に揭げられたるのつそり十兵衞述懷の一節である。

御覽の通り、のつそり十兵衞と口惜しい諢名をつけられて居る奴でござりまする」工事は下手ではござりませぬ。知つて居り然し御上人樣、眞實でござります。馬鹿にされて居ります、意氣地のない奴でござります、虛誕(うそ)はなか〳〵申しませぬ。御上人樣。大工は出來ます。大隅流は童兒の時から、後藤立川二つの流義も合點いたして居りまする。爲(さ)せて、五重の塔の仕事を私にさせていたゞきたい。それで參りました。川越の源太樣が積りをしたと

は五六日前聞きました。それから私は寢ませぬは、御上人樣、五重塔は百年に一度一生に一度建つものではござりませぬ。恩を受けて居ります源太樣の仕事を奪りたくはおもひませぬが、あゝ賢こい人は羨やましい、一生一度百年一度の好い仕事を源太樣はさるゝ、死んでも立派に名を殘さるゝ、あゝ羨ましい大工となつて生きてゐる生甲斐もあらるゝといふもの、それに引代へ、此十兵衞は墨手斧もつては源太樣にだとて、誰にだとて打つ墨繩の曲ることはあれ、萬が一にも後れを取るやうなことは、必ず〳〵ないと思へど年が年中、長屋の羽目板の繕ひやら、馬小屋箱溝の數仕事、天道樣が智惠といふものを我に賜さらない故、仕方が無いと諦らめても、拙い奴等が宮を作り堂を受負ひ、見るものゝ目から見れば建てさせた人が氣の毒なほどのものを築造(こしら)へたを見るたびことに、內々自分の不運を泣きますは、御上人樣、時々は口惜くて技倆もないくせに智惠ばかり逢者な奴が憎くもなりまするは、御上人樣。源太樣は羨ましい、智慧も逢者なれば技倆も逢者、あゝ、羨ましい仕事をなさるか、我はよ源太はよ、情ない此我はゝと、羨ましいがつひ高じて、女房にも口きかず泣きながら寢ました、その夜のこと五重塔を汝作れ、今直つくれと怖しい人に吩咐けられ、狼狽(うろたへ)て飛び起きさまに道具箱へ手を突込んだは、半分夢で半分現、眼が全くさめて見まするれば、指の先を鐔鑿につゝかけて怪我をしながら、道具箱につかまつて何時の間にか夜具の中から出て居たつまらなさ、行燈の前につくれんと座つて、嗚呼情ない詰らないと

思ひました時の其心持、御上人様、解りまするか、ゑゝ、解りまするか、これだけが誰にでも解つて呉れゝば、塔を建てなくてもよいのでございまする。腰抜鋸のやうに生きて居たくもないのですは、其夜からといふものは眞實、眞實でございまする御上人様、晴れてゐる空を見ても、燈光の逢かぬ室の隅の暗いところを見ても、白木造りの五重の塔がぬつと突立つて私を見下して居りまするは、ようよう自分が造りたい氣になつて、到底及ばぬとは知りながら毎日仕事を終ると直に夜を籠めて五十分一の雛形をつくり、昨夜で丁度仕上げました、見に來て下されれ御上人様、頼まれもせぬ仕事は出來て仕たい仕事は出來ない口惜さ、ゑゝ不運ほどなさけないものはないと、私が歎けば御上人様、なまじ出來ずば不運も知るまいと、女房めが其雛形をば揺り動かしての述懐、無理とは聞えぬだけに餘計泣きました。御上人様御慈悲に今度の五重の塔は私に建てさせて下され、拜みます、こゝこの通りと兩手を合せて頭を疊に、涙は塵を浮べたり

能く彼等の人情を描寫し悉してある。家内にあつて働く職人にも問屋の仕事を請合ふて居るものと、獨立して營業して居るものとがあるが、彼等の職の多くは充分に自己の伎倆を發揮し得べきを以て、多少は美術的手腕を要する職に從ふものは其の名を重んずること大に、從て自ら信ずること篤い。有磯逸郎氏の「名工の苦心」といへる一篇の中に鉋の名工義廣の事を擧げて

義廣が何時も言つて居やしたのは、人間は數ある中の數に入らぬといかねへ、職人が中の職人と爲らねへぢや死ばつた方がよい、なんて言つてゐやした、でがしたから家の紋は酸漿でしたが、上羽の蟻は人の長になる緣起だてんで、酸漿を上羽の緣の紋に換へやした。

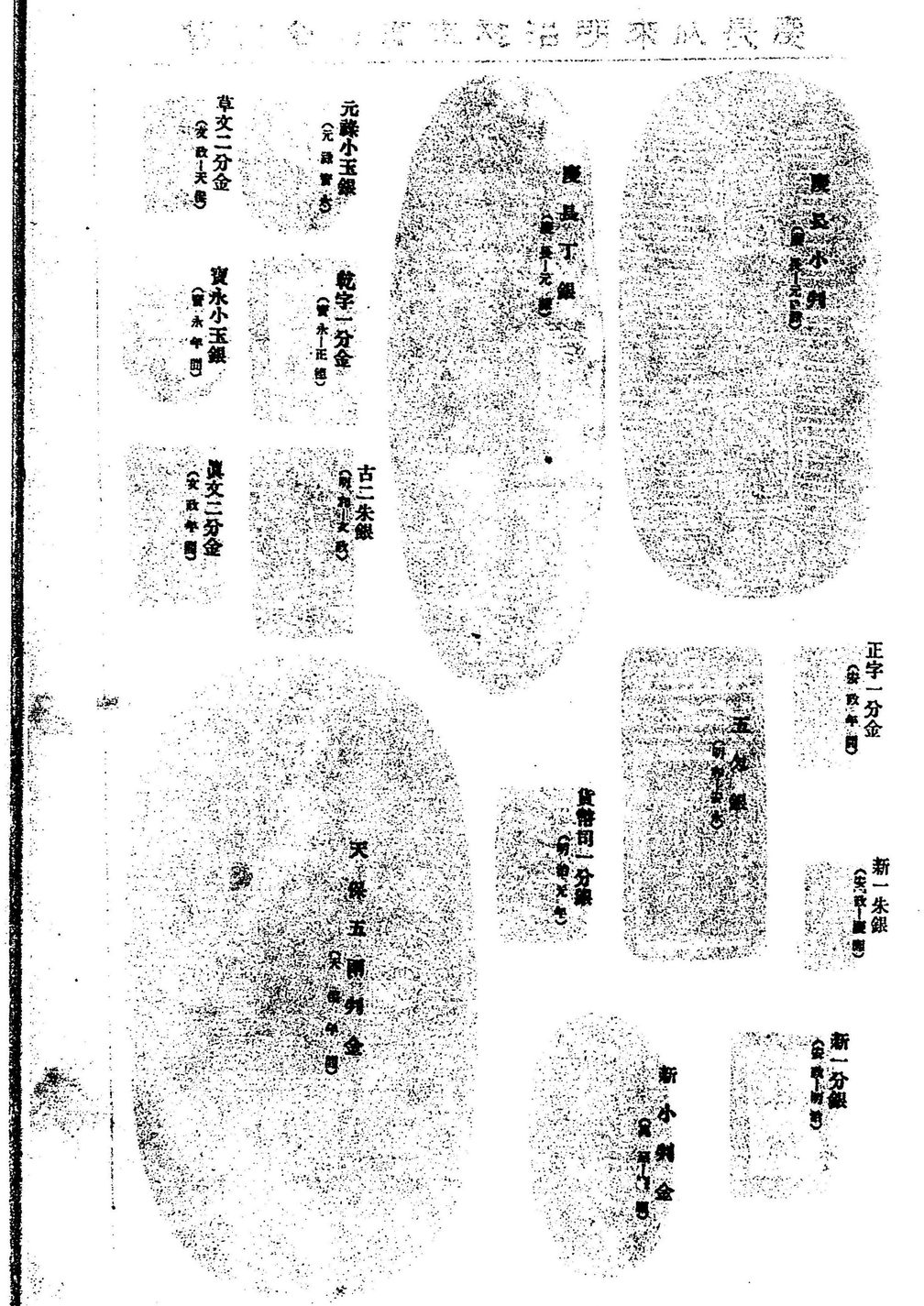
といふてある。名を思ひ、技を貴ぶこと此の如きを以て其の苦心も少くない併しこれらは幾人と指折らるゝ名工で、他は多く平々凡々唯だ生活の爲めに追はれて粗製濫造に甘んじて居る連中である。而して其の粗製濫造に從事するもの〻方、生活は豐かに、苦心慘澹たる名工の方、生活不規律にして貧しき生活に安んずるもの多きは一見怪むべきが如くにして寧ろ彼等の常態である。

運搬に關する業は多く機械的にして、其の大なるものに至つて鐵道廳の事業も、郵船會社の事業もこれなるべく其の中央部にあつて主腦たるの事務を執るものは官吏たり會社員たる月給生活にして、其の現業に從事する陸に於ける汽車の機關手、車掌、水に於ける船長、機關手も月給生活にして、多き

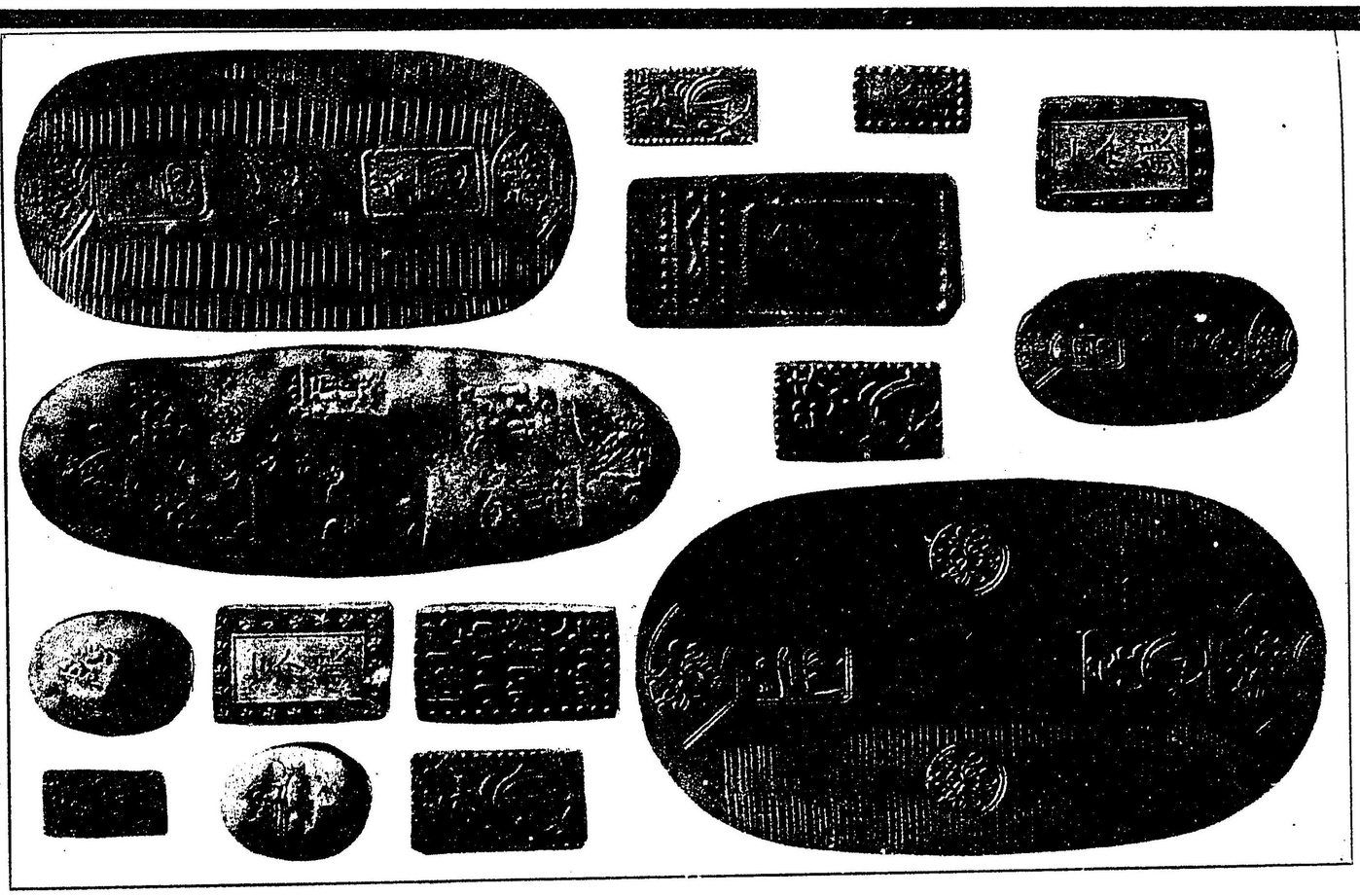
鐵道及び電車

車夫馬方

は數百圓に達し、少きは十數圓に過ぎざる徑庭あつて、一概に語り難きが、共に文明の神經系統に關するもので、此の事業の隆否は一國の隆否をトすべきほどのものであり、且つ其の怠慢は直に多數乘客の生命財產に關するのであらから、之れに從事する人々の自覺も亦他の機械的事業に從事するものと異り、其の責も大に其の任も重いのである。其の稍々小なるものに至つては電車あり、之れ亦市內若くは附近の交通に便するもので、東京市街電車に於ける車掌運轉手等の俸給は特等十圓、を最上とし六等一圓を最下とし、これに一日運轉せし哩數を以て收入金を除き、其の四分五厘を車掌運轉手に給する制であるから、一ヶ月大抵十七八圓手取にすることが出來るのである。之で略ぼ彼等の生活を想像することが出來る、これら一定の俸給に生活するものゝ外、親方に隷屬し若くは獨立して營める運搬業は頗る多く、社會の下層に屬する人力車夫。荷車曳、荷車曳、馬方等も亦此の中に算せらるゝので、彼等は道の遠近によつて定れる賃錢を得て勞動するもので、中にも最も不定なる人力車夫の如きは、一日に數圓に上ることあれば、十錢にも足らざる時、



貨銀金の度年祀治明來以長慶



若くは全く收入の途なき時さへあるが、東京市中に於ける車夫の語る所によれば平均一日一圓内外が普通であるといふことである。彼等は劇しき勞動に從事するが故に、營養を食物に取ると多く、疲勞を酒に慰することと盛んにして、得る所の賃錢は半ば酒食に費すの傾を有するが、中には此の劇しき勞動によりて妻子を養ひつゝある憫れなのもある。彼等は客によりては一と走りに多くの賃を得ることもあれど、客なければ終日何の得る所もないことがある。終日何の得ることもない折のあるのであるから多少貯蓄をすればよいのであるが、客によりて多くの賃錢を得ることを豫想して貯蓄の心なく、且つ其の得る所、實際生活を充實するに足ること少きを以て貯蓄し能はざる事情も存して目前的一時的なるは彼等一般の氣風たるを免れない。此の車夫よりも一層下層に屬するのが俗に所謂「立ん坊」で坂路に立ちて腕車若くは荷車の後押を業とするもので、大抵一と仕事、一二錢の收入なれば一日四五十錢に上るは稀れにして多くは十錢内外を以て滿足せねばならぬ。これらは老窮して長途の勞力に堪えざるもの、腕車を借るの資力なきもの、荷車を曳くの信用なきも

の等の職とする所で、其の生活は非常に窮乏して居るのであるが、それでも一杯の濁酒に勞を慰することを忘れないのは此の社會の常弊である。常弊であるとは云ふものゝ、他に慰安を求むるに途なき彼等の境遇を察すれば、これ亦是非なきことであらう。

第四節　賣買に關する業

こゝに賣買に關する業といふは狹義に於ける商業で、商業を廣意に解する時は先きにいふた運搬に關する業は大部分此の中に含まるゝので、商業とは貨物の轉換及びこれが媒介幇助を目的とする營利の業で、我が商法に據れば商行爲は

一　絶對的商行爲
二　相對的商行爲
三　附屬商行爲

の三に分つことが出來る。絶對的商行爲といふのは利益を得て讓渡するために動產不動產若くは有價證券を買求むる場合、又は其の已に買入れたる物を更に他へ轉賣する場合の行爲、即ち賣買の如きもの、及び取次、仲買取引所に於て爲す諸般の取引、手形其他の商業證券に關する行爲等で、相對的商行爲とは行爲其者の性質は必らずしも商行爲ならざるも、之れを營利の爲めに行ふが故に商行爲と認めらるゝもので賃貸營業、海陸の運送業、請負業、倉庫業の如きもの、附屬的商行爲といふのは商人が其の營業に附帶して爲す所の行爲で、例へば得意先に景物を贈る等は之れに屬するのである。商法の上からいふと此の如くであるが、予のこゝに擧げんとするは絶對的商行爲に就てのみである。これにも其の賣買取引の範圍に廣狹の差あり、其の組織に大小の別あり其の資本に多少の異は頗る甚しきものあつて、世界を相手とする貿易業あり、或は南洋若くは支那のみを範圍として貿易するものあり、國內を相手としして商業するものあり、一地方を相手とするものあり、道行く人々を相手とするものあり、數百萬圓の資金を以て成立する會社、これにも合資あり、株式あり、會社ならざる組合あり、二三十圓を資本とする小商人あり、其の日の資金を漸く其の日に調へて賣買する紙屑買の如きもあり、小賣商人に

賣るを目的とするものあり、直に顧客に接して賣るものあり、千差萬別にして一概に其の人情を示し難い、今先づ東京商業會議所の統計に觀るに、全市人口二百十六萬八千百五十一の中、有業者人口は

營業稅納付者營業別

營業名	人名	稅額
商業	二十三萬八千八百九十三人	
工業	十一萬三千五百九十八人	
農業	七百七十五人	
其他の職業	二十一萬九千九百二十人	
計	五十七萬三千百八十六人	
物品販賣	三三、九七八	一、八四一、六八六
銀行	一二二	一、〇九四、九五六
保險	一七	九八、七六六
金錢貸付	一、四三七	一五〇、〇九三

物品貸付	四六四	一三、二三一
製造	六、三五一	六二八、三一二
運送	五四三	五七六、四六二
倉庫	一三	四六、一三八
貨物陸揚場	一	二九四
土木請負	一、一一五	六三、五三四
勞力請負	二六一	一〇、一八三
印刷	三四〇	三八、二六一
寫眞	八八	七、五九七
貸席	一、〇〇四	六三、二八八
旅人宿	四八八	四六、一四五
料理店	七〇八	一〇三、七四九
公ナル周旋	六五五	一四、〇六〇
代辨	五二	一一、八七一

仲　重	六三四	一一二、二二三
仲　買	三二四	六九、五一七
船　渠	〇	一三九
合　計	四八、五九五	四、九九〇、五〇四

こゝに人員とあるは個人としての納税は云ふまでもなく、銀行會社は法人として一人に計算せらるゝので、其の銀行會社に勤務するものゝ數は頗る多く且つこれらの人々の氣風は自ら物品の販賣に從事する商人とは頗る異るものがあるのである。彼等は一定の俸給を支給せられ、これに二季の配當の加はるあつて營業の損益は間接に影響するのみで、自身は定收入によつて定額の生計を營むが、自ら物品を販賣するものは一錢二錢の損益直に自己の生活に關係するのであるから錙銖の利を爭ふは商人の通弊で、其の爲めには義理も人情も失ふて顧みざる所謂「町人根性」なるものを發現するが、これは其の極端の弊に就ていふもの、其の長所をいへば利害を察すること明に、一波動いて千波萬波之れに伴ふ世界の大勢を看取し、人情の趨向を察して仕入、賣出し

銀行會社員

町人根性

等各種の手段を講ずるのは、彼等の當に爲さゝるべからざる業務であるからである。從つて世才に長ずることは農工の徒の比でない。

機敏は其の特色とする所、農は自然物を相手とし、工は機械や器具を相手とするが故に靜止的で、變化に乏しいが、商人は人を相手とするのであるから活動的で且つ變化自在である。之れを以て農工の如き朴素の氣乏しく、やゝもすれば輕佻浮薄に流れ易きの短所を免れない。

信用は第二の資本、品を良くして値を安くすれば自然に繁昌すべきものであるが、それは利を永遠に期しての上の事で、品を惡くし値を安くする方が目前の利を得るに便なるが爲め、兎角此の目前の利に走りて永遠の利を思はざるの弊に陷り易いのが商人の人情である。併しこれは小商人に就ていふもの、大商人に至ては其の商業の範圍も廣く、從て其の利も之れを永遠に期せねばならぬのであるから信用は常に其の資本となつて、商人同志の德義は他の金錢取引と自ら趣を異にするものがある。彼の西鶴が

總じて北濱の米市は日本第一の津なればこそ、一刻の間に五萬貫目のたて

り商もあることなり、其の米は歳々に山を重ね、夕の嵐、朝の雨、日和を見合、雲の立ち所を考へ、夜の中の思ひ入にて賣人あり、買人あり、一分二分をあらそひ、人の山をなし、互に面を見知たる人には、千石萬石の米をも賣買せしに、兩人手打ちて後は、少しもこれの相違なかりき、世上に金銀の取りやりには預かり手形に請判、慥に何時なりとも御用次第と相定めし事さへ、其の約束を延し、出入になる事なりしに、空定めなき雲をしるしの契約をかへす、其の日切に損徳をかまはず、賣買せしは、扶桑第一の商人の心も大腹中にして、それ程の世を渡るなる。

といへる商人の取引機關は此の信用の油によりて圓滑に動く、こゝに擧げた米穀の取引又は株式の取引は平和の戰爭にも比すべきものにして一擲千金の利を得るものあれば、昨日の大盡、今日の乞食となる勝敗の劇しきものなれば人情の歸趨を察するには此の取引を見逃すことが出來ない。とまで云はるゝほどで、商界の英雄多く此處に覇を唱へるのである。株式界の驍將と云はるゝ福澤桃助氏の「株式成功策」に、

出來株式相場の高低なるものには、一定の形式がある。或は昇り、或は降り、一定の時期が來れば必ず大波動を起し、地から天に上り、天から地に下るほどな大變動を來すのが普通である、我輩は常に此の機會を窺ふことに怠らず、決して日毎に一上一下する小波動には眼を呉れぬ、

といひて大局達觀の要を說き、

併し神ならぬ身の、吾輩も亦此の頂點を誤ることがある。例へは百圓まで一定の時期が來れば必ず大波動を起し、地から天に上り、天から地に下るほどな大變動を來すのが普通である、我輩は常に此の機會を窺ふことに怠らず、決して日毎に一上一下する小波動には眼を呉れぬ、

といひて大局達觀の要を說き、

併し神ならぬ身の、吾輩も亦此の頂點を誤ることがある。例へは百圓まで

は上昇するだらうと思ふて居たのが、百二十圓になるといふ場合、自分は最初の見當が百圓であるからして、百圓といふ聲を聞いて忽ち投げ出して仕舞ふ、とそれが更に二十圓も高くなることがある、又最初は百圓と見越して居ても、中途から百五十圓と見越し更へをして、ひたすら百五十圓時代を夢想して居ると、百三十圓までは上つたが、それ切りで百二十、百十と下り始めることがある。斯る場合には何うするかといふに、夫れは頂點の見損ひであるから下落して百二十圓か百十圓かといふ時に思ひ切つて

手放して仕舞ふ。

といひて思ひ切りの要をいひ、さて「從來の經驗によると大波動は二年か三年毎に必ず一度は來るやうで、殆ど此の社會に於て爭ふべからざる事實である から我輩の如きも、常に此の邊に注意して、買ひの一方とか賣りの一方とかを辛抱強く行り拔くのである」といひ、諸戸清六の株式賣買の憲法を擧げて、數年前に物故した彼の伊勢の大富豪諸戸清六氏は、一代に於て日本一の者産家たることを夢想して居た人だが、此の人、株式場裡に立つ時の憲法は『五朱に賣つて七朱に買へ』といふのであつたさうだ。勿論これは尤も確實な鐵道株などの場合であるが、吾輩も之れには同感で、何でも五朱の利があると見れば賣り、七朱の利があると見た時に買へば、大した違算はないやうである。以上要するに小刀細工を用ひないといふ所が眼目で、若し世人が吾輩を認めて株式界の成功者とするならば其の成功の因は矢張り此の點にあるといふことを斷言して憚らぬ、

と、以て此の種の業に從事する人の氣風を窺ひ得べきではないか。こゝに擧げられた諸戸清六といふ人は、巨萬の富を有しながら梅干と握り飯を辨當とし、飯を食ふ時には二個の茶碗を用意して一個を食ひ終ると直に次ぎに移りて時間の節約を計つたといふので有名な人である。此の逸話も亦以て商人の氣風を見ることが出來る。

物品販賣の商人にも相場の高下は影響するのであつて、凡そ經濟機能に關する職業に從事するもの丶中、賣買に從事するものほど外界の狀況に影響せらるゝものはないが、單に物品販賣を業とするものは、よし大機關の商人なりとも株式市場に立つもの丶如く甚しき影響を受けず、小商人に至つては原價高くなれば高く賣り、低くなれば低く賣ることが出來るのであるが、それでも知らず識らず外界の狀況に支配せられて世の景氣不景氣は購買力の多少に影響し、從て其の收入は不定なるを免れない。此の不定なるを免れないのは偶丶以て自己の力によつて發展もし退縮もする愉快の伴ふ自由の餘地を有することゝなるのである。已に自己の力によりて築枯する餘地を有するが故